第三集

足助の聞き書き

足助の聞き書き　第二集

聞き書きとは、

話し手の話した喋り言葉だけで作品が構成されています。
しかし実際は、話し手と聞き手の会話から作られていくものです。
ですから、話し手と聞き手の人間関係、信頼関係が作品に表れてくるものだと思います。
自然の生長量の中で、持続的に暮らしていた石油に依存する生活になる以前の暮らし。
その暮らしの知恵を聞き、伝えていくというのが聞き書きの意義です。
聞き書きが在るか無いかで集落の実態像は違って見えます。
歴史を埋めてきたのは人々の感情。謙虚で真摯に生きてきた人々です。この地域で生きてきた人々が、どういう思いを持っているか。農作業や自然をどう利用したか。どういう人と助け合って生きてきたか。民俗調査では埋めきれない行間部分が、この地域には、こういう思いの人が暮らしているという証です。作品を読めば、十人中八人は話し手に興味を持ち、その人が生きた風土を好きになります。
この聞き書きが足助の地域づくりにつなげていってほしいと願います。

澁澤寿一（ＮＰＯ法人 共存の森ネットワーク理事長）

目次

男の人たちの留守を守る足助町婦人消防クラブ ……
加藤　八重子（かとう　やえこ）・桑田和町　聞き手・髙木伸泰　4

慣れちゃあ平気 ……
山内　初代（やまうち　はつよ）・足助町　聞き手　伊藤初音　16

仕事は七変化　～農林業から工業へ～ ……
髙木　健（たかき　けん）・則定町　聞き手　澤田暁枝　26

いろいろやらしてもらったよ ……
河合　茂（かわい　しげる）・富岡町　聞き手　加藤洋実　36

足助の香嵐渓は、お抹茶が最高に似合う場所 ……
成瀬　秀子（なるせ　ひでこ）・足助町　聞き手　岡村ゆかり　50

みんなが枝を張って、花を咲かせてくれる ……
井野口　よし子（いのくち　よしこ）・足助町　聞き手　柴田華世　62

激動八十九年　～動ける時は動かにゃぁあかん、頭を使わなくちゃあいかん…
板倉　晋蔵（いたくら　しんぞう）・白倉町　聞き手　山井由利子　70

金蔵連に生きて ……
矢澤　八重子（やざわ　やえこ）・御内町　聞き手　藤澤和子　82

九死に一生、山仕事も店も俺の一代 …… 92
藤原　總助（ふじわら　そうすけ）・足助町　聞き手　深見博子
信用を第一にみんなで一緒にやり抜けてきて、今がある …… 106
加藤　綾子（かとう　あやこ）・足助町　聞き手　鈴木明美
山ノ中立で生き続ける …… 120
内藤　剛（ないとう　つよし）・山ノ中立町　聞き手　井上美知代
志と想いを暖めて …… 132
成瀬　義秋（なるせ　よしあき）・富岡町　聞き手　河合友理
牛のない生活はしたことない …… 144
大河原　チエ子（おおかわら　ちえこ）・野林町　聞き手　原　章展
すべてのことを大事に想う …… 156
梶　公子（かじ　きみこ）・野林町　聞き手　加藤　彩
あとがき

男の人たちの留守を守る足助町婦人消防クラブ

加藤　八重子さん　（かとう　やえこ）　桑田和町

昭和十二年八月三十一日生まれ（七十五歳）

追分で生まれ、桑田和に嫁ぐ。足助警察署に庁務員として勤務するとともに、足助町婦人消防クラブの会長として婦人消防の活動に力を注いだ。

現在は、シルバー人材センターに入会し、足助城の管理員として勤めている。

今は足助城の管理員

いまのところは主人と二人でここ桑田和に住んでいます。子どもは娘と息子と二人だけれどね。娘は多治見へ嫁に行き、息子は瀬戸に住んでいます。今はシルバー人材センター（豊田市シルバーセンター足助支所）に入って、足助城（全国で初めて発掘調査により復元された戦国時代の山城）の管理員を勤めています。お城は説明を希望される方には歴史のことや、なぜこれを作ったかって言うことなど、いろいろとお話をするのですけれども、私はあんまりよく知らないから余談ばかりしてしまいます。

足助城

オテンバだった中学時代

生まれは追分です。近岡に「藤」って喫茶店があるでしょう。あそこが在所なの。私は九人兄弟で六番目かな。小学校は追分小学校で、中学は盛岡中学校。中学は遠かったから朝六時半に家を出ていました。昔は追分の交差点の向こうに鍛冶屋さんがあってね。そこにみんなが集合して、団体で田振の坂を登って国谷の盛岡中学校まで通っていました。あの頃は追分から国谷に上がる農協のトラックがあってね。そのトラックにみんなカバンをパァーっとほかしあげて飛び乗ったの。当時はまだ木炭のトラックで、エンジンがかからんって言って、お湯沸かしてキュッキュッ、キュッキュッと回してね。そのお手伝いをして乗せてもらいました。男の子も女の子も自転車に乗ってる子もみんなね。自転車も全部ほかしあげて。田振の人たちは、ほとんどが盛岡中学まで歩いて行ってたと思うけど、追分の私たちみたいなオテンバは、農協のトラックが国谷に行くと聞くといつも乗せてもらっていました。

追分小学校のときの卒業生は十九人で、その中の岩神の二人は校区の関係で足助中学へ行ったので盛岡中学には来ませんでした。中学は休まず行きました。勉強じゃなくて学校は遊びだったね。私はソフトボールをやっていて、足助の中学校の大会で優勝して、三河の大会に出場したこともありましたよ。スポーツは何でもやろうっていう気がありました。背は小さいけどパワーだけはあったね。

二十歳で結婚して桑田和へ

中学を卒業してから、家に兄のお嫁さんが来るからということで会社へ勤めました。安城の会社へ行って、その会社でもソフトボールをやっていましたね。安城公園で仕事がない日曜日などにね。伏原って言う毛織紡績工場の会社でした。結構大きい会社だったので、定時制高校にも通わせてくれたんですよ。私は糸の流れているところの検査の仕事をしていたような気がします。早番遅番があって、早番のときは仕事のあとに、自分で個人的に洋裁や和裁を習いに行ってました。それか

ら、お茶やお花もね。

それでも二十歳になるまでだから四年間勤めましたね。「みんなお嫁に行っちゃうから、そんなところでうろうろしとらんで、うちに帰ってきてお嫁に行け。」って言われて帰ってきて、半年家に居なかったくらいで、ここに来ちゃったんですよ。お見合いして四か月めに結婚式でしたね。だから二十歳のときには、もうここに来ていました。

こっちに来たのが昭和三十三年で、主人が二十四歳のときですね。主人の兄弟は一番下がまだ小学校二年生でした。主人が長男で、ここは男ばっかり七人兄弟。いっしょにお風呂に入ったりしたこともありました。

木材の商売

当時は材木業者で木材の商売をやってたんですよ。まだ乗り物と言えばオートバイだったので、主人やおじいさんたちはみんなオートバイに乗って朝早くから山へ仕事に行きました。あの頃は薪ですからね。四時ごろ起きて、大きなお釜でご飯を炊いてね。二升か二升五合は炊いていたと思います。

材木の仕事は、よその人を頼んで木を切ったり出したりしていました。ひと山いくらって買っておいて、その山の木を切って製材市場に出すんだけど、博打のようなものでね。値のいい相場を見てトラック一杯持っていくというような、そんな仕事をずっとしていました。いくらもらったかお金は知らないですけどね。あの当時は木切りをやる人夫の人たちがいたので、ひと山のはじめのときは必ずみんなを呼んで一杯飲ませたりしていました。五、六人はよその人夫の人たちが集まって、仕事はじまりと仕事の中と終わりと、全部家でやっていました。

子育てが終わって働きに

仕事に出たのは子育てが終わってからでした。息子が小学校四年になってから、萩野（はぎの）にある共和産業に働きに出ることに

しました。共和産業は車の下請けで、サンバイザー専門の会社でした。サンバイザーを作る仕事は、自動車の種類によって型を変えないといけないし、一日に何千枚も作るので結構忙しかったですよ。そこに一年九ヶ月勤めました。

足助警察の庁務員としての仕事

「足助の警察で杉山さんという方が退職されて、そのあとに入る人がいないから頼むに来て欲しい。」って言われて、昭和四十七年に警察へ入って、それから二十九年間おりました。あの当時は小間使いさんなんて言ったのですけど、だんだんと名前が変わって庁務員になりました。朝行けば、まず私の仕事は署長室の掃除からはじまるのね。署内掃除をして、いろいろ済んでから、今度は昼から銀行回りで会計さんの用足しをしました。

結構、四季折々のいろんなものを作って、署員のみなさんと食べました。年頭あいさつにみんながいっぱい来るでしょう。お正月は甘酒、それから鏡開きでお汁粉をやって、お雑炊をやったり七草粥をやったり、味飯を炊いたりね。ハソリから器から、みんなそろっていたのでやっていました。もう今ではやってないと思いますけどね。あの当時の署員の方に行き会うと「懐かしいね、おいしかったね。」なんて言ってくれます。ヘボ（地蜂の子）を獲ってきた人たちに「ヘボ飯炊け。」なんて言われて、ヘボ飯を炊いたこともありましたね。

警察でお昼の遊びに卓球をやっていてね。四十五歳か四十六歳のときに、選手に出て欲しいと言われて愛知県の警察の卓球大会に出場したこともあります。その当時は四十歳以上の年齢の人をチームの中に入れることが条件でしたので、それで私が選出されたわけです。名古屋の体育館で大会が行われて、足助警察署の卓球チームが優勝したこともありましたね。下手だったからだと思いますよ。上手な人だと下手な相手はかえってやりにくかったのではないですかね。

ハソリでの調理風景

シルバー人材センターから足助城へ

警察署は六十三歳まで勤めて、平成十三年の三月三十一日をもって退職しました。それでシルバー人材センターに入会して、四月一日からはもう百年草（足助にある福祉と観光の複合施設）の宿泊施設に行っておりました。

二年くらい勤めた頃に、シルバーのほうから「お城（足助城）へ行く人がおらんで、お城へ行ってくれ。」って言われてね。歴史やいろんなことの勉強もしないといけないし「そんなことはようやりません。」って言ったんですけどね。でも「頼むで。」って言われて、それからずっと、今もお城に勤めています。七十五にもなりました。まぁ十年にぼつぼつなるよね。結構楽しいですよ。各他県からみえるからね。いろんな世間話をします。よくお城のことを調べてみえる方もあるしね。私たちの方が教えていただくことが多いくらいですね。まぁ、ぼちぼち定年にならにゃいかんね。

足助の人たちはがんばっとるよね

私も外のことは良くわからないですけれど、足助の人たちはみんながんばっとるよね。県外からお城にみえるお客さんが言いますよ。「足助の町は凄いね。」って。「よくがんばっていろんな企画を次から次へと考えてやられる。すばらしいですね。」って褒めてくださいます。

足助城を建てるにしても、全部で5億4千万かけたんだそうです。発掘から全部含めてね。「よく思い切ってやったが、いいねぇ。」って言われる人もあるし、地元の人はかえってあんなのって言う人もあるけど、他県から来るかたは、とても褒めてくださいますよ。ちゃんと整備もして草も刈ってきれいにしてあるので、「すばらしいですね。日本一ですね。」なんて言うかたもありますよ。

昨日、滋賀県からいらっしゃったお客さんは「ロケに使うといいようなお城になりましたね。」なんて言われましたけどね。結構みんな遠くから見えますよ。ほんと、良く来てくださいます。

男の人たちの留守を守るための足助町婦人消防クラブ

婦人消防クラブは昭和四十二年に発足しました。足助町婦人消防クラブ連絡協議会っていうのが正式な名前ですね。最初できたときは中部地区を除いた全戸が会員でした。足助町の中でも中部地区は消防団の本部分団が役場にあったから、婦人消防クラブはやってなかったですね。中部以外は一応はみんな発足したんですよ。その当時、男の人たちはみんな豊田の会社に行くようになっちゃったから、男の人たちの留守を守るために婦人消防を作ろうということで発足したのです。婦人消防クラブは男の人たちの消防団の分団に合わせて地域ごとに組織が分けられていましたね。私はその中の萩野（はぎの）婦人消防クラブの会員に発足したときから入っていました。あの当時、小出甲子夫（こいできねお）さんっていう町長さんが、すごく婦人消防に力を入れてくださってありがたかったですね。「婦人会は教養のための婦人会。婦人消防は財産を守るための活動だから。」と一所懸命に力をいれてくださいました。

婦人消防の制服は、最初は真っ黒で忍者みたいな服でしたね。その次に法被を着て、それから紺に変わって、紫に変わって、それからまた紺に変わったのだったと思います。

婦人消防クラブの制服の一例

火の用心で「かまど」の検査

火の用心も毎月やっていて、一軒ずつ順番に回って「かまど」の検査をしていました。まだあの時分、焚きものが薪だったから、「ここらに置いてあると危ないですよ。気をつけましょうね。」って言って声掛でしたね。印鑑を押す用紙があったから、回ったところはその用紙に印鑑を押していました。回るのは自分たちの部落だけでしたよ。各部落にみんなそういう役割がありましたから。

火事のとき

火事のときは、婦人消防クラブも行ける人は出動しました。分団の人たちのお手伝いとか、火事のあとの始末とか、そういうことをやりました。消防団のほうは保険に入っていますが、私たちは保険に入っていないから消防ポンプは動かさなかったですけどね。安全な範囲の作業でお手伝いしました。菅生（すごう）で火事があったときは、ちょうど雪の降る日でね。みんな出動って言うので、私たちも桑田和の消防団の車（積載車）に乗って消しに行きましたよ。人が足りないっていうことで消防団といっしょに出動しました。

小型ポンプ操法の訓練

小型ポンプ操法の訓練（エンジン式の小型可搬消防ポンプを使って火災消火を行うことを想定した基本操作の訓練）もやりました。操法大会（小型ポンプ操法のスピード、動作の規律、操作の正確性などを競う競技大会）に選手としても出たんですよ。私は指揮者をやることが多かったです。指揮者は、「気をつけ！」、「右にならえっ！」って号令をかけて。前のほうに走って行って「止めよ！」とかやるんですよ。

足助の操法大会もあるし、豊田の大会もあるでしょ。それから全国もあるし、いろいろなところ

小型ポンプ操法訓練の様子

に行って小型ポンプ操法をやるから、その都度、その都度、足助消防署で電気を灯して夜練習したんですよ。練習のために夜出て行くので、家族がよく黙っておってくれたなと思います。大会が近づくと、よく練習させていただきました。消防団の分団長が来て「まんだ、声が小さい！」なんて言われてね。日本消防操法大会のときには、特訓ということで足助消防署で毎晩練習をしました。全日本の大会のときは、西日本と東日本に分かれていて、東日本では私たちが行って、西日本方面は鹿児島だったと思います。

日本消防協会会長の笹川良一さんの前でやったこともありますよ。場所は、東京の消防学校のグランドでしたね。あのとき私は操法はやらなかったけれど、いっしょに行きました。そのときはホースが不思議にも真っ直ぐに伸びて行ったんですよ。そうしたら笹川さんが凄い喜んでくださってね。最後に指揮者が「これをもって、操法を終わります！」なんて言うじゃない。そうすると「ちょっと待った！」なんて言われてね。笹川さんが「見事だな。」なんて言って、えらい褒めてくださいましたよ。「男の消防より、よっぽどかいい。」とか言ってね。あのときは雨の中でもみんなで練習してたね。いくつぐらいのときだったかな。若かったと思うよ。

観閲式

観閲式・出初式・夜警は男の人たちといっしょに

私たちも消防団の観閲式や出初式に男の人たちといっしょに参加していました。消防団の県の操法大会があるじゃないですか。足助の分団が出たときも、追分のときも四ツ松のときも、婦人消防はいっしょに応援に行きましたよ。第七分団が出場したときには、筒先の頭が飛んでいっちゃってね。あんなことがあるものなんですね。背負っていた筒先を力を入れて

外すときにヘルメットが飛んじゃったこともあったしね。そんなときもいっしょに行って見ていましたよ。夜警もね、消防団の団長といっしょに足助町の車に乗って各詰所を回りましたよ。雪の中を行ったこともありました。

最終的には婦人消防クラブの会長に

だんだんと歳をとってくるにつれて役をやれっていうことになって役をやるようになったんですけどね。萩野のクラブ長のときには日本消防協会で表彰してもらって、村じゅうでお祝いしてもらったこともありましたよ。あれは、昭和四十六年のことでした。平成元年に、東京へ行って表彰してもらえるって言う話もあったんだけど、そうしたら天皇陛下が亡くなられたので、そういうのは控えましょうっていうことになって、東京へ行き損なっちゃった。表彰状は送ってきたから、大きな額があっちに掛けてあるんだけどね。

それから、足助町婦人消防クラブ全体のほうの役で副会長をやったり、いろいろとやって、最終的には会長をやりました。川面の青木さんという方が会長をやっておられたんだけど、六十になって、「もう私は六十で定年でやめだ。」なんて言って辞められたので、その後、私が引き続いて会長をやっておりました。平成三年から平成九年まで六年間かな。

仕事のほうは、警察の署長さんが理解のある方ばかりで「消防と警察は離すことができない、おんなじ立場だから。」って、そう言ってくださったのでやれたのですけどね。会社勤めの人だとなかなかやれなかったと思います。

私は、婦人消防の帳面はようやらんし、書記もようらんしね。お金は私、一切いじくっ

萩野婦人消防クラブが表彰されたときの祝賀会

たことないですけど、全部会計係の方がちゃんとやってくださるしね。連絡もちゃんとやってくださるし、みんなが責任を負ってよくやってくださいました。私はほとんど、ただ名前だけが会長だったんですけども、あとの子んたちがよくやって補助してくださったのでやれたんです。ほんとですよ。

ちょうどいい引き際だった

だんだんと新しい家には「かまど」がなくなってきて、徐々に火の用心の見回りもなくなってしまいました。消火器の詰め替えだとか、それから会員としてみんなに募集して、地震や雷の保険に入ってもらったりということもやっていました。それで助かった人も結構ありました。テレビとか電話だとかに雷が入って壊れてしまった人や、アイロンで畳を焦がした人とか、雷が落ちて炊飯器が壊れたとか、そんなことがありましたね。保険の掛金は、確か町のほうで半分補助してくださっていたんだと思いますよ。

私も「六十になったから、やめた。」って言ってやめたんですけど、そのときにちょうど愛知県から「婦人消防隊って言う組織をつくろう。」っていう話があったんです。婦人消防クラブを無くして…無くしてっていうことは無いんだけど、婦人消防隊っていうと若い人たちの団体になるので、それで、年金もつくようにするということだったんです。そういう制度が愛知県で今度は発足されたんですよ。消防隊になるって言われたので足助でいろいろと検討してみたけども、足助町じゃあ、その予算は無かったんだと思います。

私もちょうど六十になるから、足助としては消防隊なんて作る元気も無いしと思って、もう辞退しますってやめちゃったんです。それで、婦人消防が消えてしまいました。県のほうはそう言って辞退してきたんですけど、足助町のほうも、さぁって言って、あと会長を続いてやってくれる人はだあれも現れなかったのです。それで、私の代で終わってしまいました。申し訳ないと思っています。時代的にそういう流れになっちゃったので、ちょうどいい引き際だったと思っていますが。

寄せ書きしてもらった傘があるんですよ。これは足助屋敷（昔ながらの手仕事や年中行事を再現している生きた民俗資料館）で作ってもらった傘だそうです。「平成九年、三代目会長」と書いてあるから最後のときのですね。町長の小出甲子夫さんは「知事を迎えての「連合演習」あの号令は、皆忘れないでしょう。」と書いてくださってるね。

豊田の白浜公園で消防団の連合演習があったときに私が指揮をやったの。そうしたら、すっごい大きな声が出ちゃってね。知事さんがびっくりしちゃった。「男の分団に勝った。」とか言われてね。知事さんが、えらい褒めてくださったのよ。それで書いてあるんだね。いろいろとこうやって寄せ書きを書いてくださったんですよ。みんなが支えてくださったもんでなんとかことが終わったんですけどね。いい思い出としてね。

寄せ書きの傘

家族の理解

私がどんな仕事をして、どんなことをやっておったっていうのは、主人もあんまり知らないと思います。でも理解のあるほうですね。海外旅行もよく行ったし。婦人消防の関係でも、三回か四回くらい行ったかな。イタリアに行ったときにはね、全国の先生、看護婦、それから婦人消防の関係から、各団体の偉いさんばっかりが愛知県に集合してね。愛知県が主催で助成金が少しあると聞きました。

そうすると今度は向こうに行って、観光とは違うから向こうの人たちの団体と交流して研修。だから向こうの県庁を見学したり、留置場を見学したり、いろんなところへ行っていろんな人と言葉を交わしてね。そういう交流をさせてもらいました。

帰って来たら論文だか作文だか、それを書かされて出したんです。そうしたら今度は県のほうから本を作って送ってきてくださってね。そんなようなこともありました。イタリアとシンガポールに行ったかな。警察では、職場の気の合う人ら五、六人で積立しておいて中国に行きました。たいがい三日くらいしか休みがもらえないから、そう遠くへは行けなかったんですよ。

今が人生の一番いいとき

今でも萩野のトレーニングセンター（ふれあいセンター萩野）で月に二回、卓球をやっていますよ。太極拳が月に二回、パソコンも月に二回。先日開催された足助地区ふれあいまつりにも、自分宅のオリジナルカレンダーを作って出しました。習字も月に二回やっていますが、少しも上手に書けませんね。自分用の月めくりカレンダーは、みんな予定で埋まっています。趣味で布草履も作っていますよ。全部、古布を利用してね。みんなが「古い着物あげるわ。」って言ってくれるから。お城で使うので、わら草履も作ってます。寝る暇ももったいないくらい趣味が広げてあるんですよ。趣味多忙でね。行こうと思えば近場ならどこでも行けるし、今が自分の人生の一番いいときだから、やれるうちはね。

畑もやっていますよ。市営住宅が近いので、住宅の人たちに「どう?」って言っては、ほとんどあげてしまうのですよ。町の人たちからは、草一つも取るところがないなんて話を聞くことがありますが、そういうのは気のどくのように思ったりします。私たちは草が有り過ぎて困るんですけどね。

そんなことで、今、充実していますし、一所懸命生きて行きたいと思います。

【聞き手・高木伸泰（則定町）】

慣れちゃあ平気

山内　初代さん　（やまうち　はつよ）　足助町

昭和六年十二月十日生まれ（八十歳）

足助町田町。広瀬町生まれ。戦時中、広瀬の国民学校を卒業後、しばらく家業の農家の仕事に従事。十八歳の時、岡崎の「城東館」で住み込みしながら女中として働いた。

昭和二十七年に見合い話があり、「あさや旅館（足助町田町）」に嫁いできた。平成八年に旅館を廃業し、以後夫と二人で暮らす。

広瀬での子供時代

実家は、昔の広瀬の駅からちょっと離れとる所にあるね。私の家は、全部で八人兄弟。私は一番上。兄弟げんかもしたり、大勢だで一緒に遊んだりしたね。私が一番上だで、みんなの面倒を見とった。兄弟の世話は大勢居ったもんで大変だったね。そんとき兄弟は、四人だったね。近所の子も、自分の家の子と一緒になってね、よく遊びに来とったよ。昔はどこの家も兄弟が大勢居ったもんでね、大きい子が居ったり、小さい子が居ったりしたでね、みんなで遊んだ。ボール投げをやったりね、家の裏に竹藪があってね、そこで遊んだりしたね。どんぐり拾ったりね、おじゃめ（お手玉）っちゅうだか、おはじきもやったね。当時は幼稚園はなかったもんで、七歳くらいになるまで、学校に行くまでは、みんな家で遊んどったもんね。お友達と一緒に読み書きの勉強もしたよ。

ほれから国民学校に行った。今で言う、小学校。今、東広瀬こども園があるところに、昔は国民学校があっただよ。そんで、六年間行って、卒業して中学行く人も居(お)ったけれども、私は中学に行かんで二年くらいの間、青年学校っちゅうとこに行った。青年学校は今の石野中学校にあっただ。行きたい人が行くっちゅうようになっとって、毎日行くじゃない。一週間に二回か、よお行って三回だね。全然厳しくなかっただよ。裁縫習ったり編み物やったり、勉強習ったり、草刈ったりね。勉強は厳しくないだ。草刈りも日課の一つで勤労奉仕みたいなもん。ほいで一日過ぎちゃうだ。そんで青年学校に通っとる時に、うちがお百姓だでね、畑でね、とうもろこしだとか、ナスだとかいろいろなものを作る、お手伝いしとっただね。私が小さい頃はほとんどみんなそんな感じだっただよ。

戦争の影響はあんまりなかったね。田舎だもんで、防空壕もあんまり入らんかっただよ、私は。広瀬だもんで田舎だらあ、ほいだもんで、焼夷弾も落ちいひんし。全然恐い思いはせんかっただ。食べ物はね、お百姓だもんでさつまいもやなんかはうちで作っとったもんでね、そうえらい食べるものにも難儀せえへんかったよ。少なかったけどひもじい思いはせんかったね。服とかはおかしな、はげたようなの着とったけどね。

岡崎の城東館へ

昭和二十四年に、十八才の時に岡崎の城東館という所(ところ)に働きに行っただよ。城東館は母親の知り合いの人からの紹介でね。ほいで出かけて行ってきただ。働きに行くってなったとき、親は「女の子だで、別に働きに行かないといかんわけじゃないんだけど、やっぱり礼儀作法も覚わるもんで、修行に行っといでん。」って言った。

城東館に行ったときには、戦争はもう終わったもんで、まあはい働けたもんで。たまたま城東館は、焼けんだったの。周りは空襲で焼けたけどね、運よっこだけ焼けんかった。服やなんかも、どうかこうかふつうにね。よかった。ほいだもんで、ここ行ったじゃんね。

通いじゃなくて住み込みで働いとった。住み込みのが、仕事がよおやれるでね。

仕事は辛かったけれども

城東館ではお手伝いさんみたいな事をやっとっただよ。お客さんに料理を運んだり、お茶もってってあげたりする仕事だった。最初は辛かったもんで、やめようと思ったことも何回かあったけどね、それでもやっぱり礼儀とかが身に付くと思って、やめんじゃった。洗濯でも全部やるだもん、水で。お客さんの浴衣を乾かしてね、アイロンがけまでして。昔は二十枚でもどんだけでも手で洗って。ほいで、掃除したりもね、全然湯がないもんで、水だもん。冷たかった。ほれが順々に慣れてきてな。これも修行だと思って。ほいでいろいろと奥さん（女将さん）が細かいもんで。自分の家の女中さんを連れて、お嫁においでた人だった。いいとこの育ちだったもんで、お琴も持ってたし、お蔵が何個もあってね。お掃除せるでも、私たちは田舎から出てきたもんで何にも分からんかったけれど、掃除が済んだよって奥さんに言っても、チェックがえらい厳しくてね。そういう環境でやってたもんで、おかげさまでいろいろやれるようになったわ。うちで小さい頃からいろいろ手伝っとったもんで、失敗はせんかった。他の子は、お茶碗落としちゃあ割っちゃあしとったけどね。奥さんが厳しいもんで、来てもすぐやめてっちゃうんだわ。私は慣れちゃあ平気。他の子より長く続けとったもんで、一番大事にしてもらった。奥さんが、お客さんに「うちの娘です」って言ってくれて。

奥さんの子どもも優しくしてくれた。年はそう私とは違わんかったね。「姉ちゃん、姉ちゃん」って、来てくれた。

お給料は、たいへんはおくれんかったけども・・・三百円くらいだったかね。お客さんがチップっちゅうのをくれるもんで、箱に貯めといて、ほれを城東館での三百円と混ぜて。昔はお古をもらっただよ、みんなは。ほいだけども、私らは厳しいもんで、自分たちで買うしかなかった。下着買ったり、なんか買ったり。足袋はそんとき一足十円。でも、寝るとこもあるし、食事もどんなもんでも三回ただで食べさせてくれるで、お金はそう使わんかったけどね。

働いとったときは、全然休みがなかったもんで、家族には会えんかったね。自分の兄弟の下の子が学校上がったりすると、かばんを買ってやったりしたけども。

結婚、「あさや旅館」へ

お父さんとはね、見合いで知り合った。私は全然足助に身内がないの。ほいで、仲を取り持ってくれた人が、越戸に居(お)るおじいさん（旦那さんのお父さん）の妹さん（旦那さんの叔母にあたる人）、ほの人が世話してくれたの。叔母さんにどこへいくだって、聞いたらちょっと足助行くだよって。何も知らんでついてきただよ。見合いはね、あさや旅館へ来てね、ここでお父さんと食事した。最初はね、見合いしても、やだっちゅってうちに帰っちゃった。まあちょっと、城東館で働きたいなと思っとったし、まだ結婚は考えとらんかったもんで。そのあと二回くらい話があったけどね、やっぱり、やだっちゅって渋っちゃった。だけど叔母さんが、しょっちゅうね、お嫁さんに欲しいっちゅって。私がちょっとは、城東館に居(お)ったもんで、旅館の仕事に慣れとるもんで、ほいで欲しいって。ほいでしばらくやだっちゅったけどね、まあまあここらへんで、ちょっとね、結婚した方がいいかな、と思って考えちゃっただね。昔は女の人は結婚が早かったしね。結婚せんでおっても働くとこはそうそうないし、お裁縫やったりとかね、会社行くとかはよっぽどないもんね。ほれに、城東館に泊まりに来る人やなんかを見とってね。夫婦で来る人がおるでしょ、そういう人たちを見とってね、いずれかは結婚するなら山の中がいいかな、と思って。足助っちゅうとこわからんかったけど。広瀬は相当田舎だもんで比べてみたら、ここらへん（足助）はにぎやかかったもんでね。ちょっと都会へ出ていくように思った。でもね、城東館の人たちが、お嫁になかなか出さしてくれんかっただよ。まんだ働きゃええ、まんだ働きゃええって言ってね。まだ早いっちゅって。昔でいうと、遅い方だったんだけどね。ほんで、結婚が決まってから半年くらい準備してね、嫁入り道具っちゅうもんを。うちで母親が家具屋さんで一通り準備してくれた。鏡とか、茶箪笥(ちゃだんす)とか、女の人が不自由なく暮らせるようにね、一式揃えてもらった。ほんで、二十二

才で結婚しただよ。

ほいで、昭和二十七年一月二十六日に結婚したの。えらい寒かった。結婚式は夕方だった。わたしはトラックに乗ってきたような気がするけどね。化粧とかは、猿投の駅の前にあった美容院まで行って、やってもらった。ほいでもまあ立派な方だね。写真屋さんが来てね、撮ってくれた。けど、普通はあんまり撮らないね。写真が好きな人が撮ってもらうくらい。この、あさや旅館で結婚式してね、板さんは腕がいいもんで、料理をここで作ってくれて。結婚式は大勢居(お)ったけどね、ほやぁこの旅館いっぱいに人が来たもんで、全部で五十人くらいだね。おじいさん（旦那さんのお父さん）が町会議員だったもんで、いろいろ付き合いがあったで、割合(わりあい)と大勢来てくれたね。自分の兄弟もみんな呼んでね。叔父さんを呼んだり叔母さんを呼んだりね。ここ、真ん中の柱をとってね、宴会場にして。ほいでここずーっと畳になっとるもんで。全体がお座敷だもんで。三十畳くらいかね。今はいろんな造りがあるけどね、昔は全部つなげれたもんで。

結婚式

あさや旅館での日々

結婚式の次の日から、新婚旅行行かんで、すぐ仕事やっただ。だいたい城東館でやってきたからわかるもんで。ここでは女将だもんで、ちょっと違うけどね。城東館で難儀したもんで、いろいろ乗り越えてきたもんで、こっち（足助）に来たときはお父さんお母さん（旦那さんのお父さんとお母さん）が居なくてもやることはやれたわね。足助に嫁いで来てからも、ごはんは一回も焦がらかいたことはないよ。

女将の仕事はね、朝起きるのはね、平均にしてね、まあまあ六時頃。お客さんのお膳並べて、それからお客さんにご飯を出すっちゅうことだな。お客さんの食事は八時頃だね。自分たちもだいたいその時間にね、お客さんに出してからサッと朝ご飯食べるの。ご飯作るのは板場さん。私が入って来たときにね。板場さんは一人くらいしかおおへんくて、おじいさん(旦那さん)が手伝うしね。ほの板場さん一人おいでて、ほれから女中さんが2人くらいおる。その人達がだいたいのことはやってくれるの。あんまり私んたちがお手伝いすると、嫌がらっせる。

お客さんのご飯を出した後は下げてきて、洗い回しも・・・おおかたそうかね、やっぱり女中さん達が居(お)るもんで。あんまりね、やらへんけど。ほいだもんでね、今の女将さんはしゃべってみえるけど、昔の人は、なるべくご飯を炊いたり、おみおつけ作ったり、板場さんがやってくれっちゅって言やあ、下働きっちゃいかんけどね、私んたちは、ほういうのをやっとった。宴会やるのは夕方だもんだから、まあまあ着物を着て。手伝うけど、女中さんが間に合わん時は、お手伝いをさしてもらっとったね。

働いとるときは、もんぺはいたりしてね。ほれから、お座敷をちょっと手伝うっちゅうと、着物着てね。夕方までに着物を着させたり、自分も着たりして・・・。

宴会のようす

宴会の時は、最近の人はお客さんにお酒をついだり、なんかせらっせるけど、私んたちはぜんぜんそういうことないの。よそは知らんけど、私はぜんぜんお座敷行かん。ほいで、宴会の時は、芸子さんっちゅうだか、ああいう人が大変おっただなあ。足助の置屋が何軒かあるもんで。置屋っちゅうとね、ほういう料理屋さんでお手伝いしてくれるような人がね、何人か、居(お)るわけ。お客さんが姉ちゃん呼んでくれるっちゅうと、私ん

あさや座敷の宴会

たちが置屋さんに電話して、その人達がまかないをやっとくれるんだわ。そういう人を呼ぶとね、お酒やなんか、こっちで注いで温めてあげると、料理の注文をすりゃあ、芸子さんっちゅう人がね、もってってくれる。お酒にしようが料理にしようが、ほのね、お客さんが、あれが欲しい、これが欲しいっちゅうと、ほの人がお手伝いしてくれるの。なるべくよお動く人を料理屋さんで私んたちが、使っとっちゃったというのはご無礼だけど、動かんような人はあんまり使えへん。ほうせんと、また呼んでやってな、融通きいてやるもんでな。

宴会の後の片づけとかは、まあ私んたちもちょっとはやるけどね、やっぱりうちにちゃんと女中さんが居(お)るもんでね、ほいでここまで持ってきてくれるもんでね。洗い回しくらいはやるじゃんね。今は、あんまり動かんもん。昔の人はよお動いただ。今はこれ（お酒）を飲むような姉ちゃんを置かんと流行らんじゃんね。女中さんでも、三人使ったら一人くらいはどえらい飲む人とか。ほうすると、お座敷でな、一本飲みゃあ、倍の二本くらいは飲むような、女中さんも置かんと儲からんじゃん。よお飲まん人よりかは、飲んでくれる人の方がいいもんね。ほういう人もやっぱり、使うだもんで難しいよ。

昔はね、遅うまで起きとっても良かったけど、今は早いもんね。昔なんか夜中の十二時だろうが一時だろうが宴会があるとね、片づけてから寝る、旅館はね、料理屋さんはほかっといてもいいけど、料理旅館はね、朝はよから（早くから）ごはんしてあげないかんしね。

お客さんが泊まるもんで。片づけて、ほいで、お客さんの布団しいてあげてね、とにかくね、女中さんや、お手伝いさんが居(お)るもんでやってくれて、ほの間にね、ちゃんとね、手が回らんと、私もいくだけんね。ほれから寝るもんでね、寝るのは12時すぎだわね。

ほいで、二十人も三十人も泊まったことはないもんでね、うちは。よお泊まって二十人くらいだもんね。六部屋だったもんで。

ここでね、飲食店もやっとって、うどんとかお寿司とか、釜飯とか売っとった。私は何か販売するっちゅうことはそれが

初めてだったね。今までやったことないことだった。あん時は、うどんが一杯二十円だったでね、普通のにかけうどんちゅうだかね。香嵐渓があるで、よう流行っただよ。ほいで、停留所がこの旅館のすぐ近くだったもんでね、香嵐渓へ行った人がここへ来ちゃあ、寒いときなんかうどん買っちゃあ食べてくれたもんでね。やあっと（長い間）ここを通っとっただよ、バスが。国道が出来ちゃったで、通らんようになっちゃったけどね。

楽しかったことはね、まあまあ自分の物になるでね、お金も勘定せれるし、自分のものになったしね。舅（しゅうと）さんとこに持って行くとかそういうのじゃないで、うちはうちだけだったもんでね。売り上げを増やしゃあいいだもんでね。

苦労もせないかんけど、楽しいこともあるじゃん。ほいだで、今まだちょっと昔のことを思い出して、ああ若かったな、商売がやれて良かったな、て思うね。

大変だったことは…ほうだなあ、やっぱりよその人を使っとるで、ほれが苦に、ちょっといかんなあ。心配だったねえ。ほいで、お客さんがね、向こうの、川の方へ落ちちゃわんかと思ってね。手すりが昔のてすりだったもんでね。今は高くこうやっちゃってあるから安心だけどね。昔は宴会の時にね、酔っぱらってる人がひょいーって行っちゃって川に落ちにゃあいいけど、と思って。ほいつが心配だったの。ほいだで芸子さんに気をつけとってや、って、ほう言っとったね。

昔ね、足助町西町に「西盛座」っていう演芸場があってね。ほこで、浪曲やなんをやっただな。春日八郎っていう歌手が。昔で言うと地方巡業っていってね、色んなとこまわって営業しとる人が居（お）って。香嵐渓とか西町や本町、上田のほうでやっとった。足助に二軒あっただよ、劇場がね。そんで、私んところを使ってくれとって、そういう人達も、ここに泊まっただよ。

女将の仕事と子育て

子どもは三人。お客さんにあげるお汁など何でもできとるでね、ほいでほいつを子どもによそってあげとったね。子どもやなんかは見いへんもんでね。

苦労は、女将の仕事としてはたいがい少なかったかね。でも、子どもが喘息だったもんで、二十年くらい。ひどかったもんね、死にかけたくらい本当にひどくて。それが苦労した。ずっと喘息で小さい頃から難儀しとったもんで、旅館やっとるときも、発作があって、看病したりするときも難儀したわね。病院に寝泊まりしとったこともあったわ、足助病院へ連れてって。冬は特に、ちょっとほれが辛かったね。

廃業まで

旅館業自体は昭和四十六年頃までだったもんで、十八年間女将の仕事をやっておったわけだね。ほんでその後は、ここを下宿屋として、学生さんに使ってもらっとった。部屋がたくさんあるもんでね。大きい部屋はベニヤ板で仕切って使っとっただよ。四人は泊まれたでね。長い子で三年間下宿してくれただよ。最後の方は2人になっちゃったね。夏休みとかは自分の家から通ったりする人も居ったり、休みになると自分の家に帰ったりする人も居ったり。

料理旅館の時とは仕事が違ったね。あの時は、板さんが居ったもんで、私は料理はやらんかったけど。下宿屋の時は、私が一人で全部やっとった。朝ご飯作って食べさせてやったり、弁当をみんなに持たせてやったりね、冬なんかは昼頃に高等学校に届けてやったりもしたよ。昼頃持って行かんと、弁当が冷めてしまうもんでね。ほんで、みんなが帰ってきてから、夜ご飯を作って。みんなが一つの部屋に集まって食べただよ。多いときは十人くらい居ったんだよ。ここへ来て、ご飯だけ食べてくれるっちゅう人も居ったもんで。他の下宿屋では、ご飯まで作らんちゅうとこもあったもんでね、そういうとこから頼まれたりして。一食いくらっちゅうふうに決めて貰ったよ。ここらに下宿屋は二、三件あったね。旅館の時みたいに、布団敷いてあげるとかはなかった。

朝昼晩食事を食べさして、月に四千五百円。安いっちゅうだか、足助高校には近いもんで、空いたら、誰かがあそこの下宿屋が空いたよっちゅうもんで、中学校卒業した稲武の方の子とかが、下宿しに来た。部屋が空いたらよろしくって、早い

時期から頼みに来た人も居(お)ったね。廃業直前まで下宿屋ではなかったけど。五年間ほどやっとったよ。

下宿屋の後は、ずっと空き部屋状態でね。家族で暮らしとる。もう何もやっとらんよ。平成六年にね、役所に「あさや旅館」の営業をやめるっちゅう申請をした。七十六年間、やっておったんだね。やめてからはまだそうやっとにはなあへんわけだね、今。でもやっぱり懐かしいね。

あさや玄関前（写真は弟）

【聞き手・伊藤初音（平山町）】

仕事は七変化　～農林業から工業へ～

高木　健さん（たかき　けん）　則定町

昭和十四年二月四日生まれ（七十三歳）

盛岡中学校卒業。少年時代より家計を助けるため農林業に従事する。その後、社会の変化に伴い業種を変えながら起業する。

また、地域の風習の継承にも尽力。戦後途絶えていた「山の講」を復活させている。

子供時代の生活

もともとね、私は農家の一番すそっこですけども長男なんですわ。子供の時からうちで百姓をやってね。それで、誰に言われた訳じゃないけど、「跡とらにゃー」と自然に思ってね。そんなふうで大人になってきたちゅうのかねぇ。

父親が病弱でね。昔は病院や薬っていっても、あんまり良いものがあるわけでもなかったから、父親はずーっと仕事に出たことがないんですわ。覚えている限りでは私が小学校の二年生の時からね。

だけど、まぁ、戦争やらで父親のいない子も回りにいたんで、生きていてくれるだけで良かったですね。

父親が働けなかった分、母親が余計難儀して生計をたててね。姉が三人おって、私と一番上の姉とは十三歳違うんですよ。すぐ上の姉とも七つ違うんですね。姉たちが母親と一緒に家で莚（むしろ）をおったり、百姓をやったりしていました。田んぼの畦に

も小豆を蒔いて、これを売って生計をたててきとったんですよ。当然ながら私も小学校四年生から田んぼをうったり、畦を塗ったりというのをやってきたんですわ。

お金に苦労した中学時代

小豆の他にさつま芋なんかも作っておってね。中学校の頃は足助にあった青果市場まで朝早くに持って行って、それから学校に行ってたんですわ。四キロの長い道を歩いて。中学へも随分遅刻して行ったね。

夏休みには「海苔そだ」にする木を山から担ぎ出す仕事をやらしてもらってね。今、海苔は網で養殖をやっとるんだけど、その頃は「海苔そだ」でやってて、この辺の痩せた山の落葉樹も使っておったんですよ。山で木を伐る人がおって、私は伐った木を山から担ぎ出してね。そうすると商売の人が海岸の方に持って行くんですわ。

秋になると山で自然薯を探して、掘ったら足助の市場へ売りに行ったりしたね。冬は、割り木や炭を背中にしょって山から出したりしたね。学校がある時は背負子（しょいこ）を学校に置いておいて、帰りにね、山ん中にいる炭を焼いとる人のとこから自動車が行けるとこまでしょい出すんですよ。それを学校帰りに二回位やって金をとってね。それが自分のこづかいじゃなくて、一家の生計を立てるための手段だったんですわ。

一番嫌だったのはね、学級費。学級費が払えんかったのよね。学級費の前に払わないかんのが納税なんですわ。納税だけはどんなことをしても払わないかんもんね。そうすると学級費や給食費が払えない。給食費っていったって、あの頃はたいしたことなかったよ。自分で弁当を持って行くだったもんで。学校では味噌汁とかをちょこっと出してくれるだけだったんでね。でも、そんな金が払えんでね。「俺、金がないで払えん」とよう言わんでおっ

たら、先生が終(しま)いに、「おまえ廊下に立っとれ」って。

中学二年生の時にすぐ上の姉が嫁いだんですわ。その時は中学生の私が父親代理になって付いて行ったし、姉たちの子供が生まれた時も全部私がやったんですわ。産着やベビーダンスとか買ってね。自転車で今の挙母に行って注文してね。リヤカーを人に借りて自転車の後ろに付けて、ベビーダンスとかを積んで持って来て。中学生でも、姉の肩身が狭くなるという意識があったんだね。

だからほんとに難儀しました。体力もできた。ちょっとくらい風邪ひいても寝とれんかったしね。とにかく、勉強よりも何よりも金だった。金には随分苦労したね。私らが卒業する時、同級生は半分位高校へ入ったのかなぁ。私は家がそんなだったんで行けなくてね。行ける人はいいなぁ、と思いよったよ。

養豚業を始める

私は新制中学を昭和二十九年に卒業したんですわ。卒業してからも、夏場は百姓やって、冬は山へ入って木を伐ったりしておったんです。家にわりと竹薮があったもんで、夏から秋にかけては竹を伐ってね。竹はいい金になったんですわ。それから冬になるとお袋と二人で山に行って、落葉樹の雑木を伐って。この辺で言う割り木、薪にするんですね。昔でいったら八寸、今だと二十五センチくらいの大さに切って、家の前まで出して来て置いて、これを春休みに薪にして売ってね。

昔はみんな竈(かまど)で火を焚いてご飯をつくってたね。私は割り木を伐って、野良仕事をやっていれば、それでずーっと生計がたてれると思っておったんですわ。

それがね、昭和三十年頃からかな。割り木をしゅっちゅう買いに来てくれとった業者が、「世の中変わってきてなー、ガスの缶詰が出てきたもんなー」て言ってきたんですわ。カセットコンロじゃなくてプロパンガスね。ここらへんがガスになってきたときは二十キロボンベだったけど、それがだんだん普及してきて、割り木が売れなくなってきてね。そうしているう

ちに、私は豚を飼い始めたんですわ。

うちはおばあさんの代から鶏を飼っていたんですわ。軒先で飼っとったのを殖やしていって、多いときには二百羽位いたかな。安城から来ていた中学校の先生から、「農業はな、有畜農業をやらないかんぞ。」と言われていて、それもきっかけで、豚を飼うことにしたんですよ。

昭和三十二、三年の頃で、自転車で岡崎にある愛知県の種畜牧場まで行ってね。そこで血統書付きの種豚を買ってきて。七千三百円だったけね。当時の七千三百円ていうと、割り木を二トンのオート三輪に二杯売ったお金くらい。だからね、結構高かったんですよ。

鶏は卵を採って売るんです。毎日足助まで売りに行ってね。豚は種豚に子供を産まして、その子供を九ヶ月位育てて肉豚として売る、というやり方をしておったんですわ。

ある時、名古屋から割り木を買いに来る人から、こういう事を言われたんですわ。その人も随分苦労人だったらしくてね。「あのなー、商売はな、ボッコ屋でもいいで、ちびちび金を出してまとめて金を取る商売でないとあかんぞ。毎日ちびちび、ちびちび金の入る商売は、金が入るようでも絶対貯まらんで。」てね。それで、いろいろ考えてね。鶏は確かに餌をまとめて払って、お金はちびちび入ってくる。卵を毎日足助に行って売るので、毎日お金が入って生活は楽。目先はね。豚の方はちびちび餌代を払って、お金を取る時はまとめて入る。そうすると、ある程度お金がまとまって当てになるようになったんですわ。あの人の言ったとおりでね。だから豚一本にして鶏はやめちゃったんですわ。

豚は雑食でね、肉でも魚でも何でも食べるんですよ。名古屋で残飯を貰える口があってね。オート三輪を買って、名古屋から残飯を運んだんですよ。残飯を餌にすると、ガソリン代はかかるけど餌代はただだもんで。だから、豚では儲かるなという感覚をもったんですわ。豚の儲けで家も建てたし、車も買いましたよ。

鶏舎にて

でも、だんだんと社会が変わってきて。なんていうんですかね。その頃は正月やお祭り以外は一般の家庭では肉をあまり食べなかったんですよ。だけどそれがだんだんと西洋式になってきて、しょっちゅう肉を食べるようになると、脂の厚い肉というのは売れなくなってしまうんですわ。残飯で豚を飼うとたんぱく質の高い餌ばっかやるもんで、脂がすごく厚いんですよ。日本人はしょっちゅう食べないもんで、そういうのを好んでたんですけどね。でもしょっちゅう食べるようになるとくどくて、食べなくなって。それで肉の値段が一段と安くなっちゃってね。

そこへもってきて、矢作川を守る会という、女性五、六人位のグループができてね。川の水をすくって持って行っては分析するようになって。豚は二百頭くらいおったと思うけど、家より一段低い、川に近いところで飼っておったんですわ。だからどうしても糞尿なんかを川に流しておって。で、その巴川の水が汚れる、公害公害って。いち時は公害が流行語になるくらいだったね。浄化槽も結構金かけて作ったんだけど、とても矢作川の水質基準にあうようにできなくて。どっか、山の奥にでも移転しやよかったんだけど、そんな勇気もなくてね。

もうこんなことやっとっても仕方がないので、豚をやめて、何かいい商売がないかなと考えてね。とにかく豚では排泄物に困ったもんで、排泄物に困らん商売と思ったら、石屋さんか鉄工所か…。でも石屋さんの屑は売れないけど、鉄屑は売れてお金になるなと。だいたい私は機械が好きだったもんだで、鉄工所でもやろうかなぁと思ってね。本当に何にも知らんけど無茶苦茶飛び入りで仕事がないかと探しましてね。

豚舎

鉄工所を起業

昭和四十八年、三十四歳の時だったね。工作機械をつくる菅鉄工というメーカーが昔からあって、そこから独立した人が

安城の篠目という所で工作機械を作っておったんですわ。

夏のことで、今と違って冷房なんかないもんで、窓を開けて仕事をやってるじゃん。私も物好きだもんで車を止めて「何をやっとるだん?」て、窓から中で休んでおる人に声かけたらね。「自動車の部品を作る工作機械をつくっとるだ。」て。

それから何遍か寄ってるうちに、「俺は豚飼っておるけども、豚肉をたらふく食いたいか?」て聞いたら「そりゃ食いたい、焼肉やりたい。」と言うもんで「日にちと時間を指定してくれたら豚肉持ってくるで、たらふく食べさせてあげる。」て言ってね。「ほんなん、いいだか?いいだか?」 て言ってたけど、何遍も寄った後で心安くなってたもんでね。土曜日の晩くらいがいいってことで、豚半分を持って行って、食べさせてあげたんよ。

そんなのがきっかけで社長ともいろいろ話せるようになって。そこで「俺は豚飼っておるけど、実はこういう風で、公害で困っちゃっとる。それでこれからは鉄工所がいいと思っておるけどなんにも知らん。いろいろ教えてくれん?そのうち機械も自分で作りたいで。」て言ったら、「おまんがいいなら、いいよ。」と言ってくれてね。「じゃ、俺、邪魔しにくるで。一銭もいらんけど、飯だけ、ときがきたら食べさせてくれん。」てことになったんですわ。

豚飼いながら二、三ヶ月くらい通ったのかなぁ。図面だけ引くことを教えてもらって。それからいろいろ組立の手伝いやって、半年か…一年くらい通ったなぁ。そのうち機械を自分で組み立ててね。

その会社にしょっちゅう商社が機械のセールスに来とったもんで、社長が商社の人に「素人だけど、どっかで仕事がないか」て言ってくれて。モータリゼーションの余韻がまだあるうちで、下請けを探してる会社が結構いっぱいあったんでね。そういうとこを紹介してもらったんですわ。で、高木産業という名で自動車部品を旋盤で削る仕事を始めたんですよ。

でもねぇ、ずいぶん難儀もしたね。ドリルを研ぐのも知らなんだもんで、一晩ドリルを研いでると無くなっちゃったり、穴がなかなか開かなかったり。そんな馬鹿みたいなことをしてても、なんとか、自動車のクラッチボールを作れるようになってね。丸いボールが中にある部品なんですけど、それを得意としたんですよ。鉄屑もその頃、一トン四万円くらいで売れて

たし、クラッチボールもずいぶん作って、鉄工所もそこそこ儲かったんですよ。

そんなんで鉄工所をちょうど十年やったかな。流行の機械を買っては入れて。まぁ機械は高いけど、やってきゃ回るもんね。トータルで一億円位は設備投資したんじゃないかなぁ。コンピュータ付のＮＣ旋盤なんかも手がけて、従業員も若いのを入れてね。従業員は多いときで六人位いたかなぁ。まぁ若い従業員ていっても、暴走族みたいなのをやっとった奴しか来やへんもんで、頭たたいて教えてね。でも、まあまあになると引き抜かれちゃうんだよね。そのころはＮＣ旋盤なんて最先端だったもんで、それがやれると聞くと引き抜きに来るんだよね。

でもだんだんといろいろ変わってきてね。自動車もコストダウン、コストダウンで。専門的なことを言うと、旋盤で削るというのを切削というんだけどね。昔はネジもみんな切削して作っておったんだけど、今はヘッダーていってプレスで鉄線をぱかぱか打つと、溝まできれて出来てきちゃう。私の作っておった部品もそれに変わってきちゃってね。まぁ、ボールにこだわらんでそのままやっておればよかったんだけど、従業員の確保とかいろいろなこともあってね。当時は、軽薄短小といってね、軽くて、小さくて、薄くて、短い、という方に変わっていっておって。鉄鋼のほうは重厚長大ていったけど。で、まぁ、家族だけではできんもんで、電子部品関係の仕事に転向しようと思ったんですよ。

「髙木産業」の社名入りトラック

電子部品へ参入

電子部品に転向するのは難しくなかったよ。ひとつの社会の流れだったから。私がそっちへ変わったのが昭和五十九年か

な。この頃に法人設立して有限会社タカキ工業に社名を変更しました。

当時は繊維産業が不況になってきちゃって、小牧や一宮の繊維産業の女性労働者が電子部品の仕事をやるようになってきてね。むこうの女工さんたちの身の振り方がこうなってきたんだね。これがね、資本金が要らなんだんですよ。一台一千万くらいの機械が二台と一丁千五百円か二千円位のはんだごてを一人に一丁ずつでよかったんでね。

基板といって、はんだで部品を付けたのを作り始めたんですよ。パチンコの面基板だとか、難しい基板なんかもいろいろやったよ。パソコンなんかのＯＡ機器はやらなくて、工作機械のほうをやってたね。電気っていうのは目に見えないもんで、図面の解釈の仕方には随分難儀したし勉強もしましたよ。でも鉄の部品と違って軽いから、輸送にはそう難儀せんでね。鉄の部品のころは四トン車じゃないとあかなんだったけど、バンで結構走れたんですわ。ちょっと遠い所の取り引きだったんですけどね。

そんなんでずーと流れてきたんだけど、だんだん構造不況になってきて、工賃の安い韓国や台湾に流れていっちゃってね。それで私はまた自動車部品に戻ったんですよ。

再び自動車部品へ

平成七年に始めたんだけど、一年以上は電子部品と並行してたね。今は内職を主体にしてるんですよ。内職で組立をしてもらって、社内では検査と梱包だけにしてるんですわ。これは電子部品を作っていたときのノウハウがあったもんで、それを活かしてね。

今作っているものはちょっと特殊で、自動車のウォッシャーホースだね。フロントガラスまで洗剤を送るホースですわ。素材は、ビニールとゴム。同業者は少ないね。

現在のタカキ工業

これも生まれたときからの運命

まぁ、いろいろとそんなんで、七変化ですね、私は。でもね、仕事に飽いたとかそういうことではなくね。

若いうちは同級生や連れなんかに、「おまえはいいなぁ、おやじがおらんで。なんにも文句言う人がおらんで」と、しょっちゅう言われたんですわ。「俺は自分がやりたいと思ってもおやじがブレーキをかけやがるもんで、やりたい事がやれやへん」と、みんなそんなことばっかり言うたけどね。逆に私にはそういうことを言ってくれる人がおらんだけに、明日のことが分からんかったんだね。

起業後、一番苦しんだのは人脈のなさでした。盛岡中学では旧盛岡村の人脈しかなくて、せめて高校を出ておればそれなりの人脈ができ、大学へ行けばもっと広い人脈ができる。とにかく巾広い人脈がその人の人生を左右すると思うね。

今は息子にでも、自分が歩んできた道で「それは危険だで」とか「こういうことには気をつけないかんぞ」ちゅうことを言うんです。だけど私にはそれを言ってくれる人がおらんかったもんでね。行き着いたとこでどん詰まりしちゃってどうしようかしら、とならんように「十年くらい先を見てなー」と思って。新聞読んだり本読んだり一生懸命勉強して、今からの時代はこうなるんじゃないか、と見通しをつけてやってきたんです。

実際に今の時代は昭和五十年代後半からコンピュータの時代ですわ。今なんかコンピュータが当たり前で、うちの孫でも、教えんでも小さいうちからキーボードを全然見ないでやれるだわね。自動車のナビなんかでも、私らは説明書を見てたどたどと覚えたんだけれど、今の子供はそうじゃないもんね。画面見てちょんちょん、「あっ、これ押したらこうだ」ってみんなやってっちゃう。だから、そういう時代になるなぁという判断は間違ってなかったんだね。けども将来、これが商売として成り立つか成り立たんくなるか、そこまでは全然、どうやっても判らんかったんだよね。でも子供が四人もおったし、とにかく家族の生活を補わないかんかったもんで、つまずいてモタモタしておれんかったわけでね。

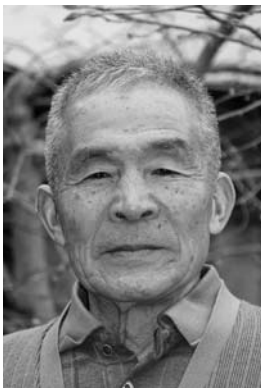
一つの仕事を伝統産業でやっていくのも一つの人生だし、私みたいになんにも判らんで間違え間違えで、つまずきつまず

き歩くのも人生で、人それぞれでね。それにもやっぱりそれなりの、その何て言うんですかね、生まれた時からの運命みたいなのがあるようなね。そんなふうに思うんですわ。

このような七変化の中で何も言わずに、どの仕事でもすぐに順応してついてきてくれた女房に感謝の気持ちで一杯です。

【聞き手・澤田暁枝（下川口町）】

いろいろやらしてもらったよ



河合　茂さん　（かわい　しげる）　富岡町

昭和三年二月四日生まれ（八十四歳）

富岡町生まれ。慶応元年（一八六五年）以降の男子跡継ぎとして生まれる。昭和十七年国民学校卒業後、一年間愛知県追進農場（現愛知県農業大学校）へ。農場での知識を活かし、常に何か新しい事がやりたい、そのために手間を省くことを心がけ、農業を始め養蚕業、木を生産していた。

追進（ついしん）農場の一年はそれから農業をやるかなりの基本になっとると思う

昭和三年ここに生まれただけど、ここの男の跡継ぎとすると慶応元年に生まれた人の後で生まれたのわしだったんで六十年ぐらいここのうちは男の子がなかったね。

小学校なんて入った覚えはないけど、算数の時間に先生が金魚の数を数えても点数が取れるし、学芸会をやらされて嫌だった覚えがある。入った時は足助村南部尋常高等小学校だったけど、その間に戦争があって昭和十六年に国民学校という名称になって、昭和十七年、国民学校の最初の卒業生だね。百姓をやるということで追進農場へ一年行ったんだけど、今は愛知県立農業大学校ちゅうことになっとってね。当時は十八歳以上の入場資格だっただけど、わしは十六歳で入ったね。ほいで二月生まれだもんで、一番ちびでね。年も背も小さかっただけど、そこの一年は新しく見ることが多かったもんで、農業を

やるかなりの基本になっとると思う。

追進農場に自分から行きたかったかな、そこらへんどうだったろうね。農業やるっちゅうことでね。今の勉強というのとはちょっと違ってね。実際に働いて覚えちゃえっちゅう。学科的な事も教えてくれたらしいんだけど、教えてくれるような先生、みんな兵隊に取られちゃったもんで、教えてくれるような人がなくなっちゃったのかね。ほんとによく動かされたけど、わしらには、初めて見ることをやったもんでね。ほとんどの基本を覚えちゃって、家畜も鶏から綿羊（毛糸を取る羊）、兎、牛、馬、豚、乳牛、黒牛いましたね。種蓄場だもんで、全部馬以外はほんとに用だったもんで、いろんなことが自然に覚わっちゃったわけね。

昔はね、有畜農業（家畜を積極的に取り入れた農業経営）って家畜を飼いながら農業をやれとるわけ。言うだけでなしに、やらされるもんで、わしなんか、入ってあんまりたたんうちに馬を使えっちゅうことで。馬なんかなぶったこともないし、朝、馬屋から出して、水を飲まして仕事に連れて行くんだけど、馬屋へ行ったら喰いつかれちゃって。馬もいろいろな人が使うもんで、わしはちびだもんで馬になめられて肩をくわえてさげあげちゃうじゃんね。ほんだもんで牧夫（世話する人）って専門の人が、あわててとんで来てくれてね。痛かったもんで晩に見たら歯の格好がついちゃってね。ほんで、そのあとは馬を使うことにはあててもらえんかったけどね。

農産加工の方も今で言うと、ケチャップ作ったり、種畜場に家畜おるもんで、肉の加工なんかも習う程度はやれたね。味噌、醤油、豆腐作るも覚えちゃったね。

追進農場で、どうせんでも覚わったっちゅう形でいろいろ覚えたんだけど、ほの中で、わしは直接かかわっただけど、さつまいもの栽培に特技のある先生がおって、「教えてやるから話、聞きに来んか」って言ってくれたらしくて。ほんでわしらの三人の部屋の三人と、もう一人、四人でさつまいもの話の作り方の話を夜、寄宿舎のすぐ隣のよな所に聞きーいっとっただけど、三人ともおらんくなっちゃったもんで急に点呼やられてね。ほんで、悪いことに、五回くらい全部話を聞いちゃっ

た後に、部屋長やっとったのがおらんもんで、点呼掛けられて、「何処行っとった」って、言われただけど、行ったとこはっきりしとるし、わしら別にとがめられなんだ。教えた先生は場長に叱られたって言っとったけど。

新しいこと好きにゃ好きだったのかな

◇さつまいも・・・安定収量がしたいだったちゅう事かね

この辺は寒い方だもんで、さつまいもはあんまりよー出来んかっただよね。ほれから技術もめちゃくちゃなもんだっただけど、さつまいも作りを完全に覚えたもんで、うちでやったら全然違うだわ。安定収量がしたいだったちゅう事で追進農場から帰って来ると、さつまいもは収入の基本になったね。

今まで作っとったのはね。出来損ないのよく出来なんだだわ。掘っても、掘っても芋がないっちゅうだったけど、ほりゃぁよく出来た。ほいから種芋、苗を作るのをしまっておくのがなかなか大変だった訳だけど、ほでもそれはどうぞこうぞ出来ておったもんで。ほんですごく出来て、なんやコツを教えてもらったもんでね。「そんなに早く植えてもだめだよー」って。温度がある程度ないとさつまいも、育たんでっちゅうことだったもんでね。ほんなようなことで、芋がよく採れたもんで、うちでもちょっと信用が出来ちゃった。ほいで芋に関しては文句言わんで親父もお袋も協力したわけ。ほんなことで、収量が年々よけ採れるし、二年目ぐらいにはもうかなり新しい品種もあったね。ほいで友達が三河一宮から送ってくれたりしたもんでね、ほやぁまぁ、全然、収量違っちゃって、ほんでまーはい、一年だった？　二年目ぐらいじゃないかな。供出（部落へ何十貫出せ）の割り当てが来るんだけど、部落へ来たやつほんな、「わし全部良きゃー出したるよー」ってそれくらいたくさん出来た。食べるものには戦後も苦労しなかったね。ほりゃみんなのためによかったんだよね。ほれがね、要領を教えてもらったもんで、どんなとこへ作っても出来るだね。

◇田んぼ・・・しょっちゅう進んどる

さつまいもの次は安定収量のために米と麦は採らにゃいかんだったけど、米のほうはね、追進でも先生が言いよった。「作り方なん教えてやるけど、おまえら家(うち)行ったって何も作らせて貰えんぞ」って。何でだと思ったけど、収入の基本だもんで変な事して家計的に収量が少なかったりすると良くなかったもんでね。わしは、ほでなくても、何か変えるっちゅうか、新しい事がやりたいと思っても暇がないもんで、暇を作るように、悪く言えば手抜きだけど、そんなことを考えておったね。

畦塗りなんかでもね、あれがなかなかえらい仕事だったけど、ほれにすごく時間がかかるもんで何とかしてっちゅう事でね。畦塗るのに一往復、何回も行ったり来たり土つけたり、なぜたりするだったけど、一往復、手間省くこと考えた。だいぶあれでも変わったと思うよね。終いには毎年何かをやっとったね。去年はこうふうに、今年はこうふうにと作り方がしょっちゅう変わるようになっちゃった気はする。考えたらしょっちゅう進んどるもんで、ほんでないと、新しいことがやってみれんじゃんね。何とかしてやろうと思って、田んぼで苗を作るんだっただけど、ちょっと障子紙かけて、畑で苗を作ったんだよね。乾性油（空気中で徐々に酸化して固まる油）があったよね。荏油(じんゆ)っちって、ほの油を塗っとくと水はじいちゃうもんで、いわゆる雨傘みたいにしちゃうわけ、ほいでそれを田んぼの苗にかけとった。今で言うビニールの代わりにだね。この油はね荏油(えのあぶら)とも言ってね、原料はエゴマで、食べれるだよ。青紫蘇(あおじそ)によく似たようなもの、紫蘇(しそ)科だと思う。これとね油桐(あぶらぎり)ちゅうのがあるだけどね、大きな実がなる、支那油桐(しなあぶらぎり)っちゅっとるけどね。こんなのを塗って障子紙を作りおっただよね。

ほんで、試験的にやっとるぐらいは調子よかったんだけど、ちょっとようけやったらね、高温障害を起こしちゃって。だけど変わった稲作ったよ。稲じゃないぐらいな稲が出来ちゃった。太い稲が・・・。ほでも米の粒は変わらんね。米はどんな稲になっても、藁でもね、草の萱(かや)っちゅうのがあるけど、あれみたいな感じの稲になっちゃった。苅るに大変なくらいの株だったけど、米は別に大きくはならんね。ほいで交配用に大きい米の原種があって、試験場行った連れに貰ったけど、だ

いぶ大きいかったね。面白いぞと思ったけどこぼれちゃって、しょうない。なぶるとバラバラになっちゃう、難しいもんだね。

ほれからね、何か新しいことや何かあると、部落でもお前やれやれっちゅう。ほから、肥料なんかでも配給でくれよっただけど、窒素、りん酸、加里、硫アンに過石に塩化加里あたりだとみんなわぁわぁ言って、みんなくれくれちって。面積によって分けたりしたんだけど、名前も知らんような肥料なんか来ることがあると、ほうするとみんな押し付けられちゃって。ほだけどなんとなく知ってたもんで、ほんで、大分よかったんだけどね。ほいから、役場なんかでも何かあると、講習だとか行ってくれっちゅう。よーけ受けよったもんで、大分勉強できたね。ほの代わり手弁当で行くだもんで、ほいだけどっかで、労力を稼ぎ出さんならんかったけど、新しい情報は入れさして貰えたもんでね。

ほんで田んぼやっとる頃、草刈機は郡内でも使い始めたのはトップだったらーなー。背負子(しょいこ)みたいなのだったね。草刈機の値段は仕事してくれる女の人の日給の百日分ぐらいだったもん。ほいで「こりゃいいぞ」と思って買ったけど、なかなかえらくてね。慣れん。ほいでも進んだかな、鎌で苅っとったのに比べたら全然効率が違うもんね。ほなこともあったもんで、米もね、初めはよくわからんかっただけど、二～三年やって、採れるもんでね、割り当てが来るだけど、みんな出し渋るだよね。だけど、「まあいい、わし出したるわ」ってなもんで、出して、おおかた「こんでいけば採れるなぁ」と思っていたら生産調整が来ちゃって、米も輸入されるようになったし、国内産だけじゃあやっていけんようになって、こりゃまぁいかんと思って、ほんで全部田んぼ止めちゃった。ほいで止めるっちったら役場でも信用してくれなんだけど、「止めちゃうよ」って止めてたら、蚕やらんかっちゅう話があって。

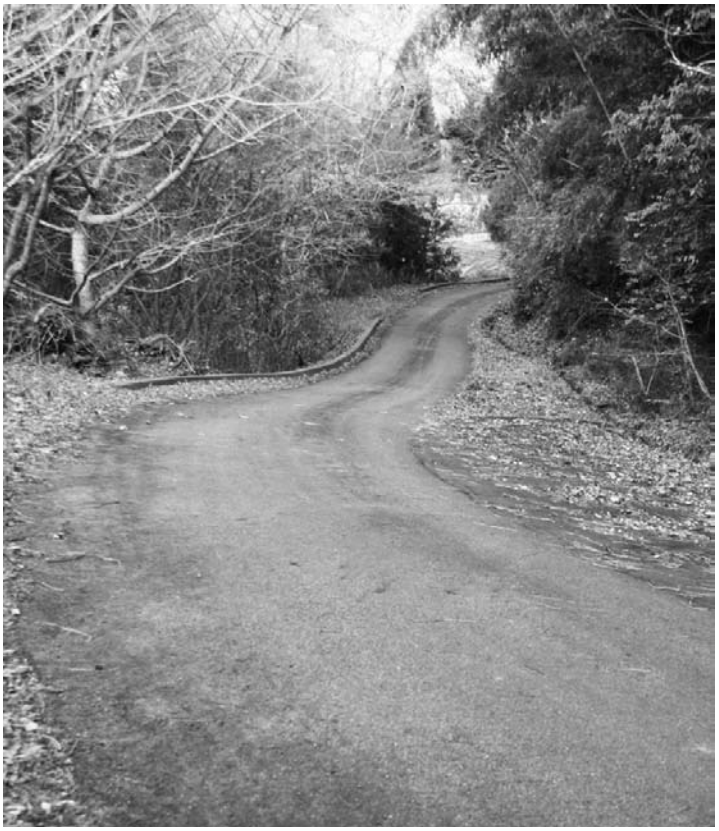
◇道路・・・なんもかんも前へ進まにゃ

ほの前にいろいろやったなぁ。道を作ったのはな、四十五年ぐらい前かな。うち、今はまあまあでしょう。だけど芋を採った頃は芋を運ぶが大変でね。古くは歩く道しかないこの上の裏の山を尾根づたいで部落のほうへ行っておったんだけど、幅

は一メートルから広いところで一メートル五十センチしかなかったよね。ほいで新しい県道が出来ちゃったでしょう。元の道、新しい県道で切れちゃったわけ。ほれが通れんくなってね。当時はほいで済んじゃっただね。うちの田んぼの淵歩いて、こんな坂、上がったり降りたりあれ何年ぐらいやっただろうね。

ほいで、今みたいに機械がないよね、手でやるしかなかっただもんね、何もかも。ほいで、牛がいたもんで、牛を何べんも使うようにしていろいろやってみたんだけど。道路はここのうちでは前から少しはなんか言っとったらしい。トンネル掘ったらどうだとか、そういう話もあったようだったけど結局何もしてないね。県道の向こうっ側の山におってくたびれちゃって、山で寝とって、「あれっ！この道路造りゃー、そうだなー」と思って。

ほだけど、なかなか簡単には、道路を造らせてくれんだって。一部は他の人の土地でね、土地を替えて貰うのが大変だったね。二年ぐらいかかったかな。田んぼも山も畑も同しぐらい山を貰うのに耕地を出したりね。ほいでも、お陰さんで先祖があっちやこっちに土地をちょっと持ったもんで、替えてもらって、初めは手で一応作って隣組の人と八人で二日ぐらい手伝って貰ったね。リヤカーが引いて歩ける幅だけが出来ちゃったもんね。ほいだもんで二メートルは絶対あったよ。距離は三百メートル、大体格好ついちゃったもんね。ほんで手堀で、崩すだけだもん。山は傾斜だら、こっちを切ってこっち出す。



自宅から県道に続く

半分山のほうを切らんでも出来たもんね。ほでも大変だったよ。今の人出来んけどね。田んぼも畑も鍬(くわ)でやっとった時代の人だもんでね。

◇蚕・・・ほいでも能率上げなしょうないもんでね

蚕やれっちってほんで、その頃栗も作っとっただけどね。ほんで絡んでくるんだよな。栗は山に植えとるもんでだいたい田んぼを埋めて桑畑作ったんだけど、山のほうの栗も勉強したんだけど。栗はね、一回だけ殺虫剤を上手にかけや、虫栗が出来んだけど。蚕を飼え飼えっちって、しょっちゅう蚕おるもんで薬撒けんじゃんね。だけど木が大きくなってくるもんで、ほで薬をしっかりかけよっちゅうことで、確かにちゃんとかけりゃ防御は出来たね。だけど栗は桑畑にせなきゃっちってほいつが出来んかったね。こりゃまあ、どうしようもないっちゅうことで、それで全部切っちゃった。青果市場から「栗どうした」っちって、電話がきたようだったもんで、ちょっと出荷が出来たと思うよ。新しいこと好きにゃ好きだったのかな、ほいでも能率上げなしょうないもんでね。

蚕始めたのは昭和四十七年だね。下の桑をあてにちーと飼ったら、飼いだした年の収繭量(しゅうけんりょう)は県で十番めだったね。機械のないうちに十番目で、次の年にはトップになっちゃったね。みんなで昔の改良した程度の飼い方をやってたんだけど、新しく機械も入れんかっちゅう、どっちかっちゅうとほういうことに良いほうだったもんで。ほしたら仲間が増えてきた。大勢じゃないけど、足助地区、藤岡地区、旭地区に機械を入れた人が五人になったね。専業養蚕家みたいに、ボンビック（壮蚕用多段循環式飼育装置）をいれたのが。一年おいて昭和四十八年ぐらいかな、うちが一番早かったね。

一年おいて蚕舎と畑を作ったね。ついでにやれっちゅうことで、ほんで、何かしらんと思ったら、「造成して」っちゅうもん、「ほりゃいいよ」って。やったらね、最初ん時はよく面倒見てむらえたし、ほいで、重機のオペ（オペレーター）がね、いいオペだったもんで、上手な畑を作ってくれたもんで、一気に畑を作ったら、蚕舎も一緒にやらんかっちゅうことだって、

「ほりゃーやってもいいよ」って、ほんで、蚕舎が出来たら蚕を飼わんかって、飼わんかっちっても桑は少しはあったけど、「大分あーへんよ」っちったら、桑畑を辞めた人があるで、もったいないで、使って飼えっちゅうことで。ほしたらね調子はいいんだよね。よーけ、繭出来ちゃって。

ほいでも蚕増えてきて、あとの物はみんな捨てちゃった。まぁ、蚕になったら、どうしようもないもんでね。最初は三回か四回、終いには九回ぐらい飼ったね。ほいで昭和五十一年には当時の農林大臣の安倍晋太郎さんより愛知県繭生産性向上コンクールで優秀賞を、昭五十八和年には正仁親王殿下より蚕桑技術の改良と経営の合理化に力を尽くしたっちゅうことで養蚕功労賞をもらったね。

ほだけど最初はね、新しいとこで病気がないもんで百パーセント繭になるわけ。ほいでもだんだん飼ううちに病気が残って、率が悪くなってきちゃってね。回数をやれっちってて、だいたい蚕は三回がいいとこだね。ほれをだんだん増やして終いには、病気が出ちゃうね。完全に消毒っちって言うけど、ほんなんだめだったね。片っぽで稚蚕がおるのに片っぽで、成熟したお蚕がおるもんでそんなんいいわけないね。初めは一トン、二トンっちゅうのに、掃うと今度は種代、蚕の飼育稚蚕の飼育代がよーけ出るじゃん、ほうすると種代と、飼育代払うと儲かるところが大体少なくなるね。

ほいでね繭はね、値段が五年ぐらいで上下しよっただわ。どこでどうなっとるだかわからんけど、わしら始めたら割と値段が続いてくれたもんで、終いには（昭和六十年代）ちょっと止めたなったぐらいだ。値段が少しでも上がっていくうちはよかったよね。上がらんくなってくるとね、こんだぁ必要経費なんちゃあ、なかなか減らいてはくれんもんね。ほしたら桑

昭和５８年養蚕功労賞を受賞

は病気が出だすね。根っこが腐っちゃう紋斑病（根を腐らせて、枯死させる。病原菌は隣接木の根へ接触伝播し、被害は徐々に広がる）っちゅうのが。ほいで薬なんかもいろいろやってみたんだけどやっぱ土壌の病気なんちゃあだめだったね。これなら良いだろうっていろいろ薬を使わされたけど、進行がやや遅れる程度だけだったね。

蘰を納めるのはね、最初は加茂蚕糸農業共同組合、今は豊田市近代の産業とくらし発見館になっとるかな。あそこでやってくれるうちはよかった。ほいから岡崎の三龍社へいって、岡崎もよかったね。ほいから高山社へいって終いには福島のほうまで蘰が行ったようだでな。わしは高山社へ行くまでぐらいだったかな。あとはね、宅急便で福島へ送ったとか何とか言っとったよ。ほの時分には病人が出ちゃったもんで、やれんくなっちゃった。

蚕は十五年ぐらいやったね。まぁ終いには蚕もね、桑の葉っぱでなくても飼えるようになっちゃったわけだもんね。人口飼料、外郎みたいなやつを食べて、ちゃんとやれば病気になーへんもんね。食べる葉っぱに菌がある訳だもんね。上手にやりゃあに、人工飼料いいだに、枯れーへんし、ほいで乾かんようにしておきさえすれば、ちょっとちっちゃいみたいだけど、人工飼料だと何かいろんなもんが入れたるもんで、かなりまではいいみたいだよ、サプリメントまで入っとるでね。いやほんとにあの蚕なんかが食べれるもんじゃないような物も入れてあるみたいに聞いておったけどね。

◇直売場・・・物を売るっちゅう事についての勉強が出来たね

こんなことしとるうちにね、野菜の直売場（富岡営農センター組合「とれたていちば」）の関係がね。公会堂ちゅうか、集会場に絡んでやれっちゅうような事で。ほいじゃあやることはいいけど、どういう風にやるだって。ちゃんとやるのか、御座なりでもいいし、どっちでもほいつ決めろっちってね。ほいたら、ほいじゃあ本気でやるっちゅうもんで、ちょうど桑は枯れた部分があったもんで、ほんなとこへなんかちーと作った。ほいでも部落の直売場は成功したね。なかなか売上あったもんね。場所はね南蛭沢の集会場辺り、信号の下で橋になった裏の辺りだね。今はもう道になったしね。村の人も亡くなっ

ちゃったな。ほいから直売場をやったもんで「あっ、商売っちゅうものはそういうもんか」っちゅう事もわかった。あんなん商売じゃないけど、売るっちゅう事についての勉強が出来たね。

◇絞（しぼ）・・・付加価値が高いと思って始めただけど

これはいつ頃から、始めたようや。森林関係では床柱の話があってね。蚕と一緒ぐらいからやっとると思うけど、山のほうはね、夏、切ったじゃだめだもんで、冬に木の始めの元を作る苗（挿し木）だよ。でこぼこの木が出来る種類、名前が絞っちゅうんだけど。一番いいのはあの天然絞りっちゅうだけど、杉や桧、他の木にもあるんだけど。話だけじゃない何とかしろっていったら、先やっとる人もあってね。今住んでる家（うち）を作ってから、家の横にガラス室やなんかハウス作って。ミスト室だね。冬はミスト室で主に苗を作っとったの。ほいで苗を作っては植えとっただけど、まぁ今は持っとるだけで売れんなっちゃったもん。付加価値が高いと思って始めただけど、一生懸命作った時分にゃ建築様式が変っちゃって需要がなくなっちゃったっちゅうこと。柱の出た建て物や床（とこ）を作る人なんか無くなってきちゃった。

今も残る杉の見本

竜巻杉

竜神

ほいで絞にはいろいろな模様があるわけ。これ何種類ぐらいあるだや。今ある種類がね、杉が打合（うちあい）、雲外（うんがい）、楳田（うめだ）、芳兵衛（よしべい）、三五（さんご）、黒（くろ）、中源（なかげん）、広河原（ひろがわら）、奥山（おくやま）、龍神（りゅうじん）、十種類と入絞（いりしぼ）で秀（ひい）ノ

手（て）、桧の俵絞（たわらしぼ）があるんで、桧も杉も、苗を作ったんだけどね。ほれに屋久杉もいれただよ。屋久杉はね、屋久島の母岩が花崗岩（かこうがん）で、ここ（足助地区）も花崗岩だもんで、ほんならいいかもしれんなっちゅうことで、最初百本買ったかな。ほいからあと五百本買って二百五十本ずつ分けて植えた人を知っとるけどね。

これとね、並行して海布丸太（かいふまるた）、足場丸太、細丸太（建築資材や京都の数寄屋造り、神社仏閣の修理に使用）もやったんだけどどっちももうダメになっちゃった。山の木全部だめだもん、しょうないね。

ほいでも、山の木が成長した時には、面白い板が出来ると思うよ。今も成長してるよ。

何か心に残っているもの

一番よかったっちゅうは、ほれでも元になったさつまいもかな。さつまいもは戦後になったらもう主になる食料だもんだね。採れたもんで、みんなのためによかったんだよね。作らしてくれや、一本の蔓（づる）でもどうだろう。ほんな、芋ばっかでさした芋が大きなっちゃって、掘るとき芋ばっかで砂ないぐらいだった。自信が出来たっちゅう事において、あっこらへんが一番いいとこじゃあなかったかな。まぁ、こりゃもうだめだぞっちゅう風になったらさっさと切り替えたもんで、失敗したもんちゅあ一個もないね。ありがたいことに、おかげさんで。

あぁ失敗したっちゃね、田んぼでね、田植えなんかせんで、除草剤を使って直播（じかまき）（苗を植えんで種をすぐ蒔いちゃう）したら、田植え止めちゃうことが出来るかなと思ってやったけど、そいつは失敗だったね。ちょっとした試験しかやらなんだけど直播はうまくいかなんだ。全然ちゅうことはないけど、挑戦するうちにはならんだな。あれで手が抜けたらいいなぁと思ったけどね。

春は蕨（わらび）、秋は銀杏

今はね、だんだんやれんくなっちゃったもんで、今生きとるのは、蕨が存外、お客さんに評価されとるもんで、春になると蕨を採って、こいで秋になると銀杏。

どこまでいけるかわからんけど、蕨もね、ほんなこと言ったら蕨に悪いけど、作るつもりでやった訳じゃないけど、畑を作る時にちょっと元の土がわりと浅いとこにあった土があったのかね。ほんで畑へ出るだけど、のり面のようなとこに出るうちは初めからよかっただよね。蕨わりと好んでくれる人があることはあった。ほれがだんだん上の畑へ出るようになっちゃうと、除草剤があるだろうけど、なんか考えにゃいかんかなぁと思っとったら、なんのことぁない、蕨の方が上の畑、作ったよりかもいいじゃんね。なんもせんでも出てくれて。

ほいから、みんなが見に来る人なんかもあるんだけど、「こんなとこで、蕨、採れすか」っちってみんな言うよ。うちの蕨は。ほういうとこに生えるもんで、製品にした時に違うのかもしれんと思う。蕨が倒れたのをそのままにしとるわけ。なぶらんどる。いろいろやってみて、ほーするとね、なんか半分なんかしたみたいになるわけ、あの倒れた古い蕨があると、ちょっと物が違うじゃないかと思う。長くてもやらかいし。うちの蕨がおいしい。背が大きくなってもやわらかい蕨ならおいしいと思う。

ほんでね、歩かんで取れると一番いいだけど歩いたとこはだめになっちゃう、出ないもんでね。ほんでね、歩くでもわしは最低限歩くこと決めとる。両方へね、手の届く、なるたけこれも遠く。

銀杏を選別する機械

採るのもね、初めは片っ端から採ったほうが早いような気がしたけど、この頃は両手で、右手で採って左手でまとめて、暇をみちゃ籠へ入れとるっちゅうにしたらね、何かね、規格品のように見えるような蕨みたい。ほれが揃えると味が違うとみえてね、今年みたいに売れた年ないね。

ほんでね、銀杏は農協さんに去年の終わりになったら、商品名をつけてくれちって言われちゃっておったけど。今年からは大きさだけでなしに商品名を入れるということにした。何という品種のL、M、Sか。大きいのが欲しいっちってよるだけど、目と手でやっとっちゃとてもかなわんもんで、何かないかなーと思ったら、機械があったもんで、ほれ面白いだよ。コロコロ二本回転しとる一本橋を渡ってくるとね、だんだん開いてきてポトッて落ちるんだよ。

出荷する銀杏

ほいで銀杏っちゃ、うちでも臭いがあんまり好まれんくなっちゃってほんで向こうでやるだけどね。すごいよ、除草効果があるだよ。潰す時に草の上なんかで潰したりしたら、沢山草枯れちゃうもん。

ほんだけど、食べちゃうやつがおるよ。外っかわの臭い、じゅるじゅるの実を。ほいだもんでね、何でこんなもんよー食べるなーっと思って恐る恐るちょっと噛んでみたらすごい甘いだに。さすがに飲み込まなんだけど。臭いがなきゃ、甘さだったらいい甘さだよ。すごく甘くもないし、ほんなら食べる訳だなーっと思ってほんで食べるやつはねー、ムジナに、あっハクビシンなんかも食べる。丸呑みだよ。二kgやそこら食べちゃうのじゃないかな。ほいで糞としてでたやつを食べるやつがおるだよ。いかにも糞だもんで、やりやがったなぁって思って、もうなぶらんだけど、うちに糞の部分がなくなってくる。何が食べる知らんけど。ほいから人間食べんし猿も食べんと思う。あと猪は食べんようだもんでありがたいです。猪なんかに食べられたらほやまあどうしようもないと思う。

農業は専門で今でも、これからもやっとるぐらいだね。やっとくといいだろうなーっちゅうよなこと話があるといつも行っちゃあ、やりよってもんでね。いろいろやらしてむらったけど、みんなそれぞれよかったもんね。お客さんはみんな覚えちゃってくれた、商品名ついとるっちったもんでね。とにかく喜んで買ってくれるっちゅうことで、ありがたいです。

【聞き手・加藤洋実（西山町）】

足助の香嵐渓は、お抹茶が最高に似合う場所

平成24年11月18日　助庵にて

成瀬　秀子さん（なるせ　ひでこ）　足助町

大正十五年七月一日生まれ（八十六歳）

十六才から茶華道のお稽古を始め、結婚後に自宅のお茶室で教室を開く。

茶道裏千家、講師名は成瀬宗秀。現在は、自宅の教室のほか、豊田市街の教室や足助高校でも茶華道を指導している。昭和三十三年からの名鉄「四季の沿線」のお茶会や、四十五年からの「もみじ祭り」のお茶会などにおいて、香嵐渓でのお茶会を主導する。

足助地区の巴川河畔に建つお茶室『助庵（じょあん）』の創設に尽力し、今も守り続けている。

戦時中 ― 死んでも名古屋でお稽古は続けたい

新田町に山ごぼう漬けのお店がありますね、そこの長女として産まれました。祖母や父にとっても可愛がられて幸せに育ちました。

祖母は私が学校を卒業したら、東京の料理学校にやりたかったみたいでした。だけど、私ね、その当時は東京なんて言ったら、世界の果てに行くような気分でね。それに私は事務員になりたかったもんだから、名古屋の商業学校に行きました。私のおじが名古屋におりましてね。その奥さんがお茶とお花の先生で、それで十六才の時分からずっとお茶とお花は習ってました。学校でもお茶とお花の授業がありましたよ。

終戦時分まで名古屋におって、学徒動員も挺身隊（ていしんたい）も経験しました。戦火の中を何度もくぐりました。おじさんの家も空襲

で焼かれて、それから転々として、名古屋では七回住むところを変わりました。お友だちに紹介していただいた家に移ったり、弟と一緒に下宿したこともあります。

挺身隊の時分には、私は住友金属の工場で飛行機のピストンを作っていたんですよ。現場で作業していましたらね、私の小学校時代に教えてくださった先生が、監督官でいらしたんですよ、ほんとに偶然。そんな偶然めったにあることじゃないですよね。で、私を見つけて、監督官につけてくださって、それから今度は事務の庶務課の方へ回してくださったの。

その頃にね、地震もあったんです。東南海地震って言ったんでしょうかね。線路もグラグラに曲がってしまうくらいひどい地震でした。私は庶務課のあった建物の二階に住まわせてもらってたんですけど、二階で机の下にもぐりました。そしたら、二階がスポンと下に落ちて、二階だけが残ったの。木造の建物でした。それで命が助かったの。

それから、警報がならない内に急に敵機がきたことがありましてね。その時は、隣に三菱があったんだけど、そこにいた足助の方が助けにきて、一緒に逃げてくださったの。きっと私がそこにいることを、足助の方だから知ってて来てくださったのね。腿のところに爆弾の破片が刺さって十センチくらい切れた程度で、命は助かりました。

そういう監督官に恵まれたことやら、何か色々皆さんに助けていただいてね、もうホントに命拾いしました。だけどみんなに「これだけ戦火が激しいから帰ってこい」って言われましたよ。だけど帰ってしまうと、お茶とお花から離れてしまうような気がして、『死んでも名古屋でお稽古は続けたい』と思いました。それで、私が名古屋にとどまって足助に帰らなかったものですから、父が「それなら一緒に死んであげるから」って、足助と名古屋を往復しながら私と一緒にいてくれました。

戦時中は、空襲があるから灯りが外に漏れるといけないでしょ。だからお勤め終わってから夜行くと、外はほんとに真っ暗。お稽古するときにも電気に風呂敷かぶして、暗いところでお稽古するんですよ。お稽古の日は、父が迎えに来てくれま

してね。「あー、今日も一日生き延びれたね」って言いながら、ご飯も作ってくれました。そういう風にして、父がほんとに支えてくれました。で、終戦になってから、しょうがないもんですからね、足助に帰ってきました。十九才のときに終戦でしたかね。足助には二十才で帰ってきました。

結婚してからもお稽古は続けさせてください

この辺には、兄の同級生が大勢いてね。私のおでこが広くって、名前も秀子でしょ、だから、どこにいても「デコ、デコ」って呼ばれてね、兄の同級生みんなに可愛がってもらいました。ほんとに、雨が降っても鼻が濡れんくらいデコだったから(笑)。それで、そのうちの一人と結婚しました。で、結婚しましてから、もうお稽古できないかなと思ってたんですけれど、結婚する時の条件で無理は言わないからお稽古は続けさせてくださいとお願いしました。結婚は二十二の時です。

結婚する一週間前に、嫁ぎ先のおかあさんが亡くなったの。急病で。結婚式は一週間遅れて、昼に結婚式をして、夜に初七日の法事をやりました。そんな人いないと思うけどね。私は、普通の人とはちょっと変わってるんだなと思いました。いいことも悪いこともね。忙しかったですね。

結婚式から五日目の日に、名古屋の方で花会があって、お約束したように、「行かしてください」とお願いして行きました。ずいぶん思い切ったことをやったと思うんですよ。でもね、そこで行かないと、そのまま辞めてしまうんじゃないかなと思ったもんだから。

おじいちゃん(義父)は、とっても難しい人だったんだけど、私のお稽古のことに関してはとても理解があったの。それで、それから二年三年、毎週毎週、名古屋に通いました。子供もできましたから大変でしたけどね。でもその頃、おじいちゃん(義父)が再婚して、奥さんになって来てくださった方が、ほんとにいい方で。そのおかげで、私は安気(あんき)に子供をおいてお稽古

に行くことができたんです。それだから、三人の子供もほとんど私なんか見なかったくらい。おじいちゃん（義父）とおばあちゃん（義母）で見てくれました。で、二人目の子が生まれた時も、お稽古はひと月休んだだけ。もう名古屋へお稽古に行きましたね。

お義父さんがお弟子さんを三人探してきてくれたの

ある日、おじいちゃん（義父）が、「そんだけお稽古して来るなら復習しないとおぼわらない。帰ってきて、覚えたことを復習するためには自分で教えないといけない」っておっしゃってね。おじいちゃんが、お釜と菓子器とお茶碗と、そういうお稽古に必要なお道具を買ってくださったんです。そして又、おじいちゃんが、自分がお弟子さんを探してきてやるって言って、お弟子さんを三人探してきてくれたの。それからは、帰ってくるとその人たちを呼んで、教えながら復習させてもらいました。ほんとに、今の私があるのはね、父がついていてくれたおかげ、それからおじいちゃん（義父）のおかげ、そして、おばあちゃん（義母）が子ども見とってくれたおかげ。ほんと、それがなかったら、私やれてなかったと思います。

私が嫁いだ成瀬家は白鳳時代から代々、足助八幡宮（あすけはちまんぐう）の宮司さんだったんです。明治になってから神官制度がなくなり、それを継承するということがなくなりました。それで、塩を運ぶ運送を、馬とトラックでやったんですね。主人の実家は、前は井筒亀（いづかめ）さんのとこにあったんですよ。カネサン運送店っていう運送店。だけど戦後、そういう運送会社やってる人はみんな足助貨物っていう貨物会社作っちゃったから。だから、個人ではできなかったんです。主人もおじいちゃんも、木材もやってたんですよ。それも終戦になってから、足助木材という会社になっちゃったの。小さな会社が全部合併して、足助木材、足助貨物。だから主人もおじいちゃんもそういう会社の役をやってました。

だから、その時には店は何にもやってなくてね。あそこは間口（まぐち）が七間（ななけん）あるんですよ。それで主人に、「間口二間（にけん）を私にく

ださい」ってお願いしたの。私がお稽古で使うお抹茶を買いに行くにしても、この辺では新しいお抹茶売ってるところがなかったんですよ。だから、その二間でお店作って、お抹茶をひいたり、お茶の道具をおいたり、それで自分が必要な時はすっと使えるようにと思ってね。そのお抹茶の店が、場所を移して今もあるカネサン茶舗の始まりなんですよ。あとの五間は日の出タクシーっていう会社を、それも仲間と作りましてね。車が三台置けるようにして。

あそこの今の井筒亀さんの土地はね、裏は川グロまで続いてたの。そこの川グロのところに、主人がお茶室を二つ造ってくれまして。それからそのお茶室でお稽古ができるようになりました。その時分には、ほんとにありがたいなと思うくらい、お弟子さんが大勢きてくれるようになって、本格的にやれるようになりましてね。だからまぁ、私の一番脂がのってた時代はその時分からでしょうね。二十七、八才くらいから五十代ね。

昭和20年代　初期のカネサン茶舗

香嵐渓でのお茶会

昭和三十三年に、名鉄が主催して『四季の沿線』のお茶会を始めたんです。沿線というのは、岡崎の桜・香嵐渓の紅葉・大滝の渓谷などですね。そういう愛知県の各地を、一番いい季節に回ってのお茶会です。そのときに、私に、香嵐渓でのお茶会をやってみないかというお話がありましてね。その時私まだ三十三才でしたから、そんなことようできないと思ったけれど、私の先生に相談しましたら、せっかくのお話だからやってみなさい、ということで。ほんとに若輩だったんですけれど。三年に一回くらい回ってきましたかね。そこで野外でのお茶会というものを初めて経験させていただいたんです。それ

で私も、こういうことをやるからにはと思いまして、春夏はお弟子さんを香嵐渓に連れて行って、お稽古をやりました。今の足助屋敷のあるところでは、自分の教室のお弟子さんだけのお茶会を何回もやったんですよ。

そのときに、巴川の足助屋敷側から見る景色よりも、対岸から見る景色の方がいいんじゃないかと思うようになりましてね。あそこにはまだ、むしろを敷いてお茶会をするような場所があまりなかったものだから、みんなで鍬を持って行って、掘って場所を作りました。お弟子さんたちもみんなやる気でね。未だにその頃のお弟子さんおりますよ。だんだんに場所を広げて、何回も何回もお茶会やりました。「ここはほんとに最高の景色だなぁ」って言って、もう楽しんでやりましたね。

そこが、今の『助庵』がある場所です。いつまでもこれやりたいなと思って、できたらここにひとつお茶室を造ってもらいたいなという気持ちがだんだん芽生えてきました。

昭和 40 年代　野外でのお稽古

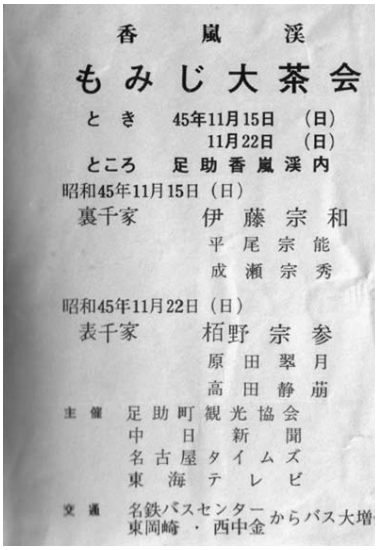
お茶一筋でやっていこう

何年かたって、名鉄の『四季の沿線』のお茶会は、名鉄が手をひいてしまったの。最後に残っていたのは香嵐渓と岡崎だけで、他の場所は、もうみんなだんだんすたれて、やる人がいなくなってしまったのね。香嵐渓はね、口はばったいようだけれども、私ががんばって、穴掘りながらでも続けてましたからずっと続いてたの。岡崎も桜で有名ですからね、続いていました。あとはみんなダメになってしまったの。

でもその後、今度は足助の観光協会ができまして、昭和四十五年に『もみじ祭り』のお茶会を始めてくれたんです。『もみじ祭り』の最初のお茶会は、昭和四十五年の十一月十五日でした。このときには私の叔父も、私に教えてくださった先生も来てくださいましてね。このときから『大茶会』ということをやるようになったんです。

だけど、この年の三月にね、私の主人が亡くなったんです。それもね、三月二十八日、千利休（せんのりきゅう）さんが亡くなった日に亡くなっています。その時に、『なんとか落ち着いてほかのことは考えないで、お茶一筋でやっていこう』と決心しちゃったのね。それから本格的に、自分の勉強とお弟子さんの指導を始めました。そして、秋の香嵐渓のお茶会も始めて。もし主人が亡くなったのが四十五年のときの十一月時分でしたら、お茶会はとてもできなかったと思いますけどね。

『もみじ祭り』のお茶会は、今年で四十三年続いております。最初の頃は、ほんとにほそぼそとお茶会をやっていました。お客さんも少なくてね。でも、やり始めると、すごく色んなアイデアが浮かんできて、ほんとに楽しくて。自分で考えることが嬉しくて、いろんなことをやりましたよ。私は野点（のだて）が大好きで。あちこちに赤い毛氈（もうせん）をひいて、お点前（てまえ）したこともあります。そうすると、紅葉が赤いし、毛氈も赤いし、あっちこっちが赤くて面白いかなと思ってね。竹を立てて釜をつるしてみたり、大きなすり鉢に釜をのせて野点をしたりもしました。野点というのはね、うちの中ではなくて、外でやれるのが楽しいの。この時分には、お客様も大勢来てくださってね。地面を自分たちで大きく掘って、色々な


香　嵐　渓
もみじ大茶会
とき　45年11月15日（日）
11月22日（日）
ところ　足助香嵐渓内
昭和45年11月15日（日）
裏千家　伊藤宗和
平尾宗能
成瀬宗秀
昭和45年11月22日（日）
表千家　栢野宗参
原田翠月
高田静萠
主催　足助町観光協会
中日新聞
名古屋タイムズ
東海テレビ
交通　名鉄バスセンター・東岡崎・西中金からバス大増

第１回　香嵐渓もみじ大茶会案内

昭和 48 年 11 月　香嵐渓もみじ大茶会

場所でやりました。掘って、掘って、また掘って。この当時はね、男のお弟子さんも多かったものだから。

第五回は一番派手にやったときですよ。みんなで記念茶会やろうかってことになって。このときは、ほんとにお客さんがいっぱいでした。八百人くらいお客さんが見えました。第六回では、香積寺（こうじゃくじ）から広場に向かう坂のところにずっと幕をひきまして、それでみなさんが降りてくるとお茶がいただけるという嗜好でやりました。

そうしてずっと、今の助庵の場所でもお茶会をやりたいという気があったわけ。それでこの頃からね、正式にあそこにお茶室造って、お茶会をやりたいっていうことで、動き始めました。

助庵の竣工

ええ、難儀しました。助庵ができるまで。「あんな道の悪いとこにはお茶室は建てれん」と反対されました。

だけど、足助屋敷の方へ向かう場所に造ると、人通りの多いとこだから見世物になってしまう。お茶会っていうのは見世物じゃない、静かにお茶をいただけるところがお茶室だ、ってみなさんにお願いしたの。静かなところで、まず足助へ来たらお茶を一服、という場所が作りたいという信念でしたね。それで屋敷の対岸の方へ造ってほしいということでお願いしたんですよ。だけど、なかなかそれをわかってもらえなかった。でも、私ごとでお願いするんではなくて、町のためにこうしたいと、そういう頭でお願いするから、協力する方はちゃんとしてくれましたね。未だに役場でＯＢやなんかで勤めてらっしゃる方とお話しすると、あの当時はこうだったな、ああだったな、ってお話が合います。で、こうして反対もあったけど押し切ってようやく造っていただいたのが、昭和五十一年です。

愛工大の浅野教授という方が設計してくださったんです。反対を押し切って造ったもんだから、みなさまのお金がかからないように、有り合わせの材料をもってきました。この助庵っていう名前はね、奈良の博物館長の石田茂作っていう先生につけていただいたんです。

その竣工式の前に、私は裏千家のお家元鵬雲斎宗室（ほうううんさいそうしつ）に「足助に助庵という茶室を造りました、その記念としてお軸を一本いただけませんか」と巻き紙でお手紙出したんです。鵬雲斎って言ったら世界中に知れ渡った人なんですけれどもね。今考えたら大胆なことをよくやったなと思います。そうしたら、普通だったら半年かかるところをひと月で「できましたから取りにいらっしゃい」とお返事をいただきました。十一月の三日に竣工式でしたが、十月の三十日に京都まで取りに行きました。よく間に合わせてくださいましたと思ってね。ここから『助庵』というものが始まったんです。

助庵を造るときに協力してくださった役場の方に、「造った以上は助庵をいい加減にしといてはいけない。あんなもん造ってって思われないように、ちゃんときれいにして草も取って、あの場所でよかったって言われるようにしてくれ」って言われましてね。で、私は夏になるとずっとあそこで当番して草取りもしました。秋になるとそこでお茶会をやってもらうようにして。それから十一月は毎日、うちの社中さんが交代で呈茶（ていちゃ）もするようになりました。今でも続いています。

今、みなさんが助庵をとっても大事にしていてくださるの。あそこから眺めた景色というのはどこから見るよりも最高なんです。川の水の流れがすーっときて、そして、赤い橋を通っていく。全部が見えるのね。だから、助庵にこられた方は、「ここにお茶室を作られてよかったですね」とおっしゃってくださるの。

助庵からの眺め　平成 12 年 11 月撮影

助庵が香嵐渓のお茶室の代名詞になれるような、そんな風にもっていきたい

だけど、だんだんお茶をやる人が減ってきてるんですよ。うちに来る人で一番古い人は五十五年続けてくれてます。だけど、その方も七十才を過ぎてますしね。そのあと、助庵を守っていってくれる人が続いてくれるのかどうか、心配で。何年か後には、『助庵の中はもうボロボロになってしまったわ、どこで何が建っとるかわからん』というようなことにならないようにと思って。なんだかね、今はそればっかり心配しております。私が今八十六だからね、この先何年やれるかわからないしね。

ここ足助の香嵐渓は、お抹茶が最高に似合う場所なの。そしてお茶室を造っていただいたからには、『助庵』が香嵐渓のお茶室の代名詞になれるような、そんな風にもっていきたいと思っています。

だけど、こういうことを続けていくにはね、暇がなきゃいけないの。私はおかげさまで今のところ、食べることも寝起きすることも息子夫婦に全部みとってもらって、不自由なくさせてもらってますので、ほんとにこれ一筋でやっていけますけどね。家庭があって、子供があって、これだけに誠心するというのはなかなか難しいことだと思います。そういう心配なしでやれるという人はあまりないと思うの。ある程度奉仕のつもりじゃないと存続しないと思いますね。

それに、お茶が好きな人、足助が好きな人、あの場所が好きな人、じゃないとやってけないんじゃないかしら。

十一月になったら毎日、日曜日以外はうちのお弟子さんがこれからまた毎日お呈茶します。あそこでゆっくり腰掛けて、お抹茶をいただきながら本でも読んでみてください。そうしたら、助庵のよさがわかるんじゃないかしら。そういうことが

対岸から見た助庵　平成12年11月撮影

できるのがあそこの場所なの。助庵は「ここでゆっくり一服しようかな」とそういう気持ちの場所ですから。ええ、だから、いっぺん来てみて。

こうして足助にいるからこそ

私はね、ほんとは外に出たかったわけ。主人も経理が好きだったのね。だから、名古屋に出て経理士になりたいって言ったんだけれども、色々事情があって私が踏みとどまらしちゃったもんだから、だから足助に住んじゃったんですけれどね。で、結局、出たい出たいと思ったけれども、最後は足助が一番いいなぁってことでしょうね。今はほんとに満足してます。私は今こうして足助にいたから、お茶とお花の稽古が続いたと思います。

都会の人はね、みなさんお弟子さんが少なくなっちゃうの。だけど足助の人は豊田にお嫁入りしても、岡崎にお嫁入りしても、足助に帰ってお稽古したいって通ってきてくれるの。稲武の方からでも小渡（おど）の方からでも来てくれる。それだけ安らぐ町っていうのかしら。空気が違うんです。ここは城下町だから、何か落ち着いてお稽古事ができる、そういう町だと思うの。だから、私は足助にいるからこそ、香嵐渓でお茶会もできて、発表することもできる、お稽古もできる。お弟子さんもいい人ばっかりでね、みんなのおかげで私生きておれるかなぁと思いますね。こんなに恵まれた人はそんなにいないんじゃないかしら。

お茶の方は豊橋に三河支部があるのね、だからお茶で何かあるというと豊橋へ、お花の方は名古屋がお家元だから名古屋へ飛んでいくの。ついこないだもね、名古屋でお花のお家元の会合して、それからひとりで新幹線に乗って静岡まで行って、お茶の会合に参加したんです。みなさんが「お元気でいいですね」っておっしゃるけど、ほんとは体中湿布だらけよ。だけど不思議とね、着物を着て歩くとサッサッと歩けちゃうもんだから。足助から一歩出ると、痛くても痛くないような顔して

歩くし、名古屋に行くときは、衣装がなくてもあるような顔して行く。

「こんだけ毎日出とるなら、名古屋で一間（ひとま）うちを借りたら」ってよく言われます。だけどバスに乗って足助に戻ってくると、さっと空気が変わるのがわかるの。そうするとホッとする。「だから私は、どんなにえらくてもどんな遅くなっても、足助に帰っていくのよ」ってそう答えるの。

足助にいると、小さい時からの知り合いの人なんかは、私のこと「ひでちゃん、ひでちゃん」って呼んでくれる。だからなんていうかね、気取らなくてもいいの。ここにいるとね、気持ちが素顔のままでおれるわけ。

ここでね、たくさんの人に導かれて、助けられて、続けてこられたんだと思います。

本当に感謝しています。

【聞き手・岡村ゆかり（平戸橋町）】

お茶室のあるご自宅で
平成 12 年 10 月撮影

みんなが枝を張って、花を咲かせてくれる

井野口　よし子さん（いのくち　よしこ）　足助町

昭和九年五月十八日生まれ（七十八歳）

足助生まれ。小学校六年生の時に石野に引っ越し、新制石野中学校を卒業。卒業後、足助に戻る。テルミ美容室で見習いをし、美容師国家免許を取得。シスター美容室を開業した。現在は、娘さんに世代交代をし、したあ美容室になった。今は、お店のお手伝いや家事手伝いをしている。

美容師への道、そして職業婦人となって

中学を卒業する頃、足助の友達に会いに来た帰り、親戚のテルミ美容院に立ち寄ったの。義理の姉にあたる美容師の先生から「いつからお店に来るの？」と聞かれびっくり。卒業後の就職先は他で決まっていたんだけど、何も言えずに家に帰ったんだわね。父親に話したら、「就職先には断りに話に行くから、お前はテルミ美容院に行くように」と言われ、美容師になるよう決められたわけ。

それからは、テルミ美容室で見習いをしながら、通信教育で勉強して、国家試験を受けて、それで美容師になった。通信だから、学校から送ってくる課題に回答して送るわけ。そうすると単位が取れる。国家試験に受からないと美容師になれないし、店が持てないからね。本科が一年、実習が一年、二年目で国家試験を受ける資格ができる。厳しいよ。美容師でない

と接客しちゃいかん、お客さんの頭に直に触れちゃいかん、それから、医者みたいな勉強もしたんだよ。衛生法規とか消毒、環境衛生、ものすごいあるんだよ。私たちは暇なく働いた。家庭のことをやりながら、毎日睡眠不足だったよ。

修行中は辛くて、お嫁さん作りの修行も、時代によっては本当にもう忙しくてね。自分の結婚式の前にも、稲武の結婚式の仕事があったからそっちに泊まって、一日おいて自分の結婚式やって、結婚式のあとに、また一日おいて、仕事でお嫁さんを作ってた。新婚旅行は行っとれなんだね。私たちの馴れ初めは、たまたま私が美容師の修行中に、足助に下宿していた主人が映画に誘ってくれたのがきっかけ。昔は、お見合いが多かったんだけどね。私の結婚式の時は、式の関係は親が話し合って決めてたね。それから、先生に振袖作ってもらって、かつらも先生が支度してくれて、自分は、お人形さんのように着せてもらったんだよ。

井野口さんの花嫁姿

私は職業婦人だったから、朝、主人を送り出す。子どものことをやって学校に出す。そういうことはもちろんで、仕事もしなくちゃいけなかった。急に仕事が早い時間に入って、うちのことをできない時は、家族に理解してもらうとか、従業員に応援してもらったね。

今は、時間で働いてお休みがあるからいいね。楽になったのは、従業員の働く時間が決まってから。十二時間も働いちゃいかん、八時間働いたら休憩とか決まって、朝の始まる時間も夜の時間も決まったから、ほんだけ楽にはなったね。

当時は辛い事もあったけど、今があるのは先生、親のおかげ、感謝してます。

美容技術の移り変わり

私が美容の世界に入った当時は、芸子さんは髪に油をつけてコテで伸ばして、店のおばあさんたちが日本髪を結われた。

私の先生たちはそれを習っていたけど、私たちの時代はお嫁さんの髪を作る方しかやらんかった。もちろん、髪を伸ばしたり、下準備はしたけどね。私が自分でお店を始めてからは、今度はかつらの時代で、自分で岡崎まで講習に行って習って、自分で結ったかつらをお嫁さんに合わせてあげてたよ。

そのうち、コールドパーマっていうのが出てきて、これは、一液っていう癖をつける薬と二液っていう定着する液を濡れた髪に付けて巻くものなんだけど、これだと、毛先だけじゃなくて根元までパーマをかけれるようになった。その次に、今度はドライヤーができて、コテでやってたことが、乾かしながらセットができるようになってきた。そうすると、次にピンカールというのが出てくる。新しい技術ができると、東京まで行って、研修部で習ってくることもあったの。講習は常にあったね。時代がどんどん変わるから、常に新しいことを覚えんといかんかった。

美容っていうのは、先端というほどでもないけど、新しいものがどんどん開発されていて、足助あたりだと岡崎に講習を受けに行くんだけど、東京から先生が見えて、そこで覚えて、お客さんに新しい技術をやってあげていたよ。

今でも都会は進んどるよね。ここにいても、まあまあのことは出来てきたはずだけど、今の若い人たちのやることは、理解に苦しむようなこともあるね。

お嫁さんをつくる

私の仕事の中で、花嫁さんを綺麗に作ってあげるのは一番の喜びだったね。時代に応じて、お嫁さんも変わってきたんだよ。昔はかつらがなかったから、短く髪切ってる人はアイロンで伸ばして、油をつけて、かもじ（つけ毛）をつけて、髪を結ったね。最近はかつらがあって仕事が楽なんだけど、かつらが出てきたときは、かつらを結うことを習わなあかんかったね。

見習いをやってた時は時代が派手じゃなかったから、結婚式だとお嫁さんは袖の短い黒い留袖、今のお母さんたちが結婚式で着ている、ああいうのが結婚式で使われた。お嫁さんは日本髪をやらないで、洋髪、セットくらいで花をつけて、お嫁

に行くんだったね。私が結婚する頃から振袖を着るようになって、振袖のときは高島田のかつらをつけたね。呉服屋さんの娘さんだと、振袖を作ってお嫁に出してあげてたね。その後は、白装束の上に打掛、綿帽子になったんだ。その頃は、角隠しって言ったけどね。綿帽子でも角隠しでも、昔は外に出るときにかぶってたけど、今は家の中でもそれが定番になってるね。

うちでも振袖を作って、貸衣装もやってたの。でも、衣装の手入れが大変で、貸衣装屋さんに名古屋から来てもらってどれがいいか見てもらうようにしたの。その後は、お客さんを名古屋に連れて行って、衣装を見てもらうように変わっていったわ。今は、会館の中で借りるようになったね。

昔は、お嫁さんがうちの美容院に来てくれて、ここでお嫁さんを作って、それでまた「でだち」とかあるから家に帰られる。お嫁さんの格好をして仏さんを参って、お菓子を振舞ったりするの。その次の時代は、お嫁さんの家に行く「出張」が多くなったね。それから、だんだん娘さんたちも便利を覚えたね。直接、会館に行ってお嫁さんを作って、親戚も会館に来てもらって済ますようになったんだわ。

昔のおばあさんたちには、「お嫁さんについていく時は派手にしちゃいかん、地味に控えめにしていけ。」って言われたね。私が、お嫁さんの裾をもったり、転ばないように後ろをついていくとかしたね。もっと丁寧だとお嫁さんの手を添えて歩いたりしてたね。

お嫁さんに付き添う

お嫁さんの世話は、全部仲人さんがやるものだったんだけど、だんだん「頼まれ仲人」さんになってきて、お嫁さんの世話をして貰えん場合があるから、そうすると美容師に頼まれてね。技術の点で、自分たちは美容師なんだけど、私達がお嫁さんの世話もするようになっていったんだわ。

結婚式

式場は八幡さんが多かったね。足助神社で式をやって、披露宴は料理屋さんだね。そういうのを全部うちでやっていた時代は大変だったと思うよ。「三々九度」と言ってお婿さんとお嫁さんが盃をかわしたり、親戚の人が「高砂屋～」って歌ったりしてたよね。それから、だんだん派手になって、農協さんに結婚式場ができて、ここで結婚式も披露宴もやれるようになったんだわ。足助で結婚式をやる人はほとんどここでやられたね。写真屋さんもうちも式場まで出張してたわ。でも、美容院でお嫁さんを作って、家へ一度帰ってから式場にいく人もいたね。昔は大勢支度させていただいたよ。お色直しがあるとね、私たちが一日中ついていたりとか、町内でやるときは時間見て飛んで行ったり、連絡が来たら飛んで行ったりね。でも、そういうことにはやっぱりそれなりに費用もかかるでしょう。

だから、結婚式も、だんだん簡単になってきとるね。かつらつけて、車乗って、見慣れない衣装つけていくのも大変だもんね。会館でやるようになって、だんだんそういうことが楽になって、最近は、新婚旅行に行くにもホテルからいけるとかね、だんだん都会へ都会へと変わってきてる。

結婚式が終わると、新婚生活は一家団欒だね。新婚旅行に行かない時は、女の人は式が終わって披露が終わると、着物を脱いで、お嫁さんをこわして、割烹を着て、台所に立つんだよ。それがいい嫁さん、出来た嫁さん。お嫁に入って、家事を教えてもらって覚えてね。何もわからない人は全部教えてもらってね。うちのことをよく手伝っていた人は、「あれやって」って言われれば「はい」ってできたけどね。

空き地があると、若い人たちの家を建てるってこともあった。二人で住めることは、安気でよかったと思うよ。

それと、結婚の前には仲人さんを立てて、良い日を決めて結納の道具とか持って行ったんだわね。例えば、結納金として百万円もっていくと、お嫁さんの方は、タンスから着物から全部用意してお嫁に行くわけ。その荷物のトラックが三台もあったなんていう話もあったね。それから、お嫁に行く前に「お袴料」っていって、お婿さんの着物を作って持っていくとかいう風習もあったね。

仲人さん

仲人さんってのは、今はやらなくなった人もあるよね。昔はね、紹介で一緒になったでしょ。真ん中に仲人さんっていう人があって、こちらの都合の悪いことがあって別れたいってときには、仲人さんはあっち行ってこっち行って話を付けてくれた。喧嘩した場合は、仲裁したり、二人が具合が悪かったりしたときにあいだに入ったりね。

「この娘さんどうですか?」って持ってくるのも仲人さん。お互いに仲人さんをたてて結婚式をやるわけ。特に、家を重んじてるとそういうふうになるね。会社勤めの人にも「頼まれ仲人さん」っていうのがあったね。結婚する時に、相手の人に挨拶に行ってもらうために、会社の上司の人に頼むんだわ。

昔は、結婚年齢も二十三っていうと、遅いねって感じだったね。もっと早いと十八くらいでお嫁に行ったりしたね。お見合いはちゃんと着物着て、親もついて行ったね。「二人でちょっと歩いてきたら」なんていうのもあったね。

従業員と

従業員が七人にいて、住み込みの従業員もいたりしたから、にぎやかかったね。今になって「結婚しても困らないのは、先生のおかげです」って言ってくれる人がある。自分が辛抱したおかげだよね。辛抱できなくてやめる子もいるよ。体力的

にも一日立ってる仕事で、暇なときは暇なときの仕事があるわけ。

それから、親から離れて生活する従業員もいたから、私は、辛い時には、そういう面倒もみてあげなきゃいかん。でも、自分に子どもがあったから、自然にやってあげれたけどね。

みんな五年六年はいたね。昔の言い方で言うと、五年は奉公。お礼奉公を一年二年。近所の子も五年くらいはここで一緒に生活して、六年目から自宅から通う。親族からいい縁談があって巣立っていく子もいたね。うちの方も、縁談があったりしたら、面倒見てあげないかんしね。

私が六十になったときに、みんなが来てくれて「還暦おめでとう」なんて、席を設けて楽しい宴会をやってくれたね。主人が亡くなった時も一斉に来て、お参りしてくれて。良いこともある。一緒に辛い思いしたからね。今、そういう子達が、忘れんで来てくれる。

一番古い子は、ここで一緒に定年くらいの年まで働いたよ。ご主人が勤めを辞められる頃で、それを機会にやめてね。二番目の子は、終戦の年に生まれた子で、開業して今は息子さんが引き継いでる。その次の子も豊田で始めてるね。みんな、美容師という資格を持ってお嫁入りするでしょ。そういう人を探して結婚する人もいるし、たまたまご縁があってお嫁に行く人もいた。ご主人が美容院を始めさせてくれる人もいるし、安城のほうへ移っていった子もいる。この前、香嵐渓に来て寄ってくれたね。友達と来て、「あたし、先生がいたから今があるの」って言ってくれてね。

従業員と一緒に

昔はお嫁に行くのが優先だったね。うちの美容院に入ってから、美容学校に通信教育レポートを送って、試験を受けて資格を取る。習い始めたからには取りたいんだけど、途中で結婚の方に行く子もいたね。

六十のお祝いをやってくれた時は、自分が太い幹のような気分で、みんなが枝を張って、花を咲かせてくれる。みんな成功してうれしい。良い時代だったね。やっぱり、お客さんに信用されるまで一生懸命やらないといけないね。苦労して、自分たちの力で、お金を借りて店を始めるわけだから。みんな、一生懸命やってきたから、今があると思ってる。

【聞き手・柴田華世（河合町）】

激動八十九年
―動ける時は動かにゃぁあかん・頭をつかわなくちゃあいかん―

板倉　晋蔵さん　（いたくら　しんぞう）　白倉町

大正十二年二月二日生まれ（八十九歳）

中立生まれ。阿摺中部尋常高等小学校卒業。昭和二十二年白倉に養子に入ってから百姓一筋。区長、会社勤めを経験し、最先端の農機具を使い作業の効率化を目指す。昨年から機械作業は長男に任せ現在は畑で四季の野菜作りを楽しむ。畑をうつのに昔の下駄備中（げたびっちゅう）もゲートボール・グランドゴルフと共に健康増進に一役かっている。

はじめに

八十九歳に二月二日になったで九十歳に近い。わしは、晋蔵ちゅう名前だけんども、中立の在所で新しい蔵が建った時に生まれたむんで、新しい蔵って付けようと思ったがこうゆう「晋」の字にしたって。

今、ゲートボールとグランドゴルフに、足助中学校の横にある、グランドまで車で行っておる。昨日も行って、グランドゴルフでホールインワンだよ。トヨタを辞めてからトラックにしちゃって。百姓はトラックがなくちゃあくれんもんでね。ここにおるとね。自動車がなけりゃぁどっこも行けんむんねぇ。車の運転はね。今度書き換えが出来りゃあ九十三まで乗れるだよ。結構、受かるだらぁと思っとるが。

今、白倉も、道が出来てよおなっとるだが、一番最初に来た時「きつね坂」って言ってねぇ。ほっそーい道でねぇ。「やい、どえらい所(とこ)だが、どうしょう」と思った。「やっ、今すぐ向こうまで自動車の通る道が出来てきておる」と言われたが、ほんの小口まで道が開けとるだけだった。

在所の中立はね。道路はあった。あの時分、蚕を飼いよって蚕を運ぶのにトラックが出入りせよった。腕白坊主の時にゃあ、蚕積めぇ来たトラックの後ろからよじ登ってね。さあ降りるのに困ちゃって思い切ってダアーッと飛び降りた。白倉へ来た時、蚕を飼った後が、かすかにあったかなぁ。風呂は下の川から汲みよった。水は尊いもんだったわ。

幼少期・少年時代

五人兄弟で一番のすそっ子で生まれて、現在は、上の兄弟はみんな死んでしまって、わし一人残っておる。まんず、二歳にならんうちに母親が死んじゃって写真も無いので、母親のことは全然知らん。ほれで、まる二歳から四、五歳までのことはわからん。小学校一年生に上がった時、同級生が男、十八人、女、十六人の三十四人おっただが、その中で一番背(せい)が低かった。運動会で小さいほうから走って、五番目だった。昼食の時は、皆、お母さんやお父さんと嬉しそうに食べておったが、わしは小さな弁当箱で、梅干し一(しと)つ入れてもらって、片隅で一人(しとり)食べた。何で自分だけが、お母さんがないのかなぁと寂しく思ったなあ。

昼からの競技で、算術競争っていうのがあってねぇ。足し算が二問、引き算が二問、チャッチャと書いて一回り走る。だんとつで一番。算数は、大、大、大好き。小学校三年生の時に、長靴を買ってくれて、それを学校まで二・五キロあっただが、そこを天気のいい日も、悪い日も、毎日履いて通った。ほれで、体操の時間に長靴を脱いでやると、足がえらい軽くなって、まぁそれからよぉ走れるようになってね。五年生の時にゃあ、六年生の仲間に入って他校の選手ちゅって方々(ほうぼう)の学校に行った記憶がある。

高等二年までねぇ。八年間、一日も休まんで行った。あの時分じゃあねぇ、褒美を結構、よおけくれてねぇ。阿摺村、東加茂郡、学校の、三所からは八年間の精勤賞、成績の方で、仏教会、学校からと五つも貰ちゃって、家へ持って帰ったら、えらい喜んでくれたけどねぇ。

高浜・薬屋奉公時代

まあそんな風で高等の卒業式が済んで一週間も家ん、おらなんで、今度、高浜の山脇膵盛堂って薬局へ勤めた。父親に連れられて行っただ。

ほの時分、先輩が二人おったが、最初入った年は、朝、早よぉ起きて、店の掃除をして、朝食を済ますと、店番をやるだった。二年目から訪問販売って各家庭へ回って、午前中注文を取って、昼から配達ちゅうことで、最初行った日にねぇ。「山脇です。何か御用はありませんか」っちゅう、次の家も次の家も断わられちゃった。まあいやんなっちゃうなーと思って。また四十軒くらい回って、たぁった、一件の注文だったで、よお覚えとるけんども、「湯の花」っていう、風呂に入れる薬だった。店に来て親方に「喋ることは下手だか、なんだか、まあ、全然注文あれへんで、商売に向かんで、まあ辞める」って言ったら「今、辞めんでもいい．一件でもあったじゃないか。明日行ってみよ。まっとたくさんあるに」って言われた。次の日、庭にきれいな花壇の家があって「きれいだねぇ。これは何ちゅう花ですか」って聞いたら説明してくれた。ほで、次の花は何だってこっちが聞かんでもいろいろ説明してくれた。「これ見とると際が気分が明るくなるねぇ」なんて話いとったら注文を三いろやってくれて。盆栽が段にしてあった家で松の具合のいい、しとなりに感心しとったら、二いろ注文してくれた。だんだん「身体の内でこういうとこが痛いが、それにいい薬をもって来てくれ」なんて言われて。薬がどうあれこうあれ、最初から「御用ありませんか」って言うよりも何か、うまい話をせなあいかんと思った。薬やるだで、人間の身体は、どういうもんかちゅうこと、病気はどんなものがあるかっちゅうことを、勉強せにゃあいかんと思った。夜、お客が少ない時間

に、本を読んだ。高浜は瓦職人がラジオで、野球を聞きながら仕事しとった。野球のことも勉強した。今も野球は好きで欠かさんように聞いとるけどねぇ。ほれと映画もあの時分に松竹、日活、東映なんてね。週刊誌を、ひと月遅れで安う売っただ。それを買って来ちゃあ見て、主役じゃあなくて脇役までも覚えとって、話をよぉせりよった。しまいにゃあ、わしを待っとって話(はな)いてくれる人もあった。自転車で、岐阜の、下呂や高山、古川、船津(ふなつ)も行った。古川と船津の間はバスと競争してね。追い越されてもねえ。バス停でバスが、停まっとる間に、グングン走っちゃって、船津に着いたの、バスより、わしのが早かったでねぇ。薬局を辞めた時六百円の退職金をくれた。貯めとった千四百円と合わせて二千円定期にして家(うち)へ帰った。戦争から帰って来てみたら、金の価値っちゃあ、みな無(の)なって、なんにもならなんだ。はがきが、ほの時分は、一銭五厘(いっせんごりん)で買えとったのが、十円になっちまった。

戦争時代

昭和十八年、二十歳(はたち)の時、徴兵検査があって甲種合格になった。十二月五日に中部八部隊に入隊した。一月七日に上官が「班長の洗濯や、靴を磨いた者があるかっ」て。ほんなこたぁ全然気が付かんでみんなやった者がなかっただねぇ。たら「一列に並べっ」て並べさせて「お年玉をやるっ」なんて何をくれるしゃんと思たらスリッパで片方からピシャンピシャンと叩いて。とんでもないお年玉だった。

2008.1　85歳
あけまして
おめでとうございます
昔・痛いビンタの
お年玉
今・孫からうれしい
雪だるまのお年玉

一月五日から貨物列車に乗せられて、福岡県の門司まで行った。門司から貨物船を人間が乗れるように改良した、六甲丸という六千トンの船に、わしら二千人の兵隊が乗った。他の貨物船が二隻前、六甲丸を真ん中に、後ろ、二隻と五隻の船団だった。船がやられた時に、救命胴衣を着けて、海へ飛び込む訓練を、一日に二回ぐらいやったかなぁ。北斗丸ちゅう大き

な船だったが「やられたぁー」という声に、皆、びいっくりして、救命胴衣も着けんで、甲板に飛びだいちゃったね。船の上ばっかりで、足が地に着いとるか着いてないか、フワフワしとった。三、四日でなんともないようになったが。

辛亥(しんがい)で初年兵の教育を受けた。ある日、上官から皆に「この中で衛生兵になるのはないかっ」って言われ手を挙げた。「水野っ、衛生兵になれっ」って言われて次の日、広東に行って教育を受けた。軍医が講義をしちゃあ次の日に試験があるだよ。消灯になると、灯りがついとったトイレの前で夜中じゅう勉強しよった。教育の成績は、百八十人中、十二番だった。薬局におって、人間の身体やなんかを、見たり、本で勉強しとったのが良かった。戦場じゃあ、マラリアや腸チフスにかかって、たくさんの戦友が目の前で死んでった。

八月十五日。本部から使者が来て「まぁ、戦争は終わった」ちゅうもんだい、終わったっちゃあ、どんなことかと思った。引き揚げ船を待っている間に支那人の部落へ行ってね。できもんの奴には、膿みの部分を取って、携帯煉料を塗ってやったり、熱のある奴に、マラリアの薬を飲ませたりなんかしてやった。そうするとお礼に、ゴカッピーっちゅう、上等な酒を飲ませてくれたり、さつま芋や、たばこをくれたりした。持って帰ってみんなで分けた。

少しして、腸チフスで連隊長と副官が隔離された。「そこに行って看護せよっ」てわしに命令が下っちゃった。熱にうなされる者の看病を一月(ひと)やったかなぁ。えらかったなあ。

2012.8　　89歳
一反五畝の田んぼ

昭和二十一年、四月二十二日、内地へ帰って来た。家に着いてから熱が続いた。マラリアの薬も飲んでもあかん。回虫の薬を飲んだら治った。ご飯も食べれるようになった。

下駄備中(げたびっちゅう)に始まる農作業の効率化

昭和二十二年、四月十八日。まあ、忘れんだが、家内のお父さんが来て、「ま

あ財産がこれだけある。田んぼも畑も、ある程度ある。藪もある。」って。親父さんが、藪に惚れちゃって。「藪、家も、ちいとばかの藪があるが大分楽をしたで。ほやあ、いいとこだと思うでどうだやぁ」なんちゅって。「いいようにしておくれん」って言ったら、はいそこに、決めちゃわれて、その日に、結婚式はいつにするって。わしのすぐ上の兄貴が五月八日に出かいたで、五月八日がよかろうと。まあ、四月の二十二日帰ってから五月の八日まで、二十日足らずだった。

五月だむんでね。田植えの準備をせにゃぁあかん。今まで全然、持ったことのないような大備中で、田んぼをうつ。一反五畝のとこをうつだが、最初の日に、いっぺんにまめが両手に出来ちゃって。痛い痛い。ほいでも、やらにゃあしょうがないと思って、我慢してやったが、まめがつぶれちゃあ、なお痛い。一週間かかったねぇ。まだ他に沼田があったがとてもえらくて、在所の兄さんに頼んで、うってもらった。二年目になって、楽そうに、下駄備中でうっとる人を見て、すぐ、鍛冶屋で作ってもらった。やってみたら結構いい。大備中でやることを思うと、深かぁもうてるし時間も半分の四日くらいでやれた。トヨタへ出てから、耕運機買うまで、下駄備中を四年ぐらいやったかなぁ。

区長時代

昭和三十六年、三十八年と区長をやらせてもらった。特に、昭和三十六年の伊勢湾台風で道路の、抜け場が三か所あってね。補助金だけじゃあ、なおらんで、村の人の協力がいったし、その補修工事の請負い人と交渉もいった。若い者はみんな会社に行くようになって出れるのは、年の多い者ばっかだった。都合の悪い人もあったりで大変だった。寄合いが、年に百二十五日もあった。畑の手入れも、ろくにやれんで、草が生えちゃって。小学校のＰＴＡ、中学校のＰＴＡ、衛生組合長、仏教会の役員、とても全部なんちゅうことはえらかった。その年から、生産組合長に会計、納税関係をやってもらうようにした。

下駄備中

トヨタの会社時代

昭和三十九年に、ちょうど、トヨタが期間工を募集しとった。期間工から間もなく臨時工になった。一番最初に通う時にゃあ、則定まで歩いて行って、則定から岡崎行きのバスに乗って、松平橋で豊田行きのバスに乗り換える。豊田から大樹寺行きの電車に乗って、トヨタ本社前で降りた。トヨタの工場まで行くのに、一時間五十分ばか掛かりよったなあ。今度、自転車で行っただ。自転車だと一時間も掛からんで行ける。自転車で行くにねぇ。あの時分、舗装がしてなかったむんで、自動車が通ると、どえらい砂埃が、ブゥァアーと来て、目が開いておれんくらいだった。二年、自転車で通って。ほれからオートバイの免許を取った。オートバイは速くていいだが、冬向き、寒くて、腹が、えらい冷えた。ほの加減か、胃潰瘍になっちゃってねぇ。二年の間に三度(さんど)入院しちゃった。職場を保全に異動した。そこでベルトコンベアを造ったり、修理をしたり。プレスで使ういろんな道具を作った。その職場でパーツフィダー（供給装置）の効率化の創意工夫で賞金二万円もらった。五十七歳の時には、その創意工夫したものをさらに改良して本社工場、元町工場、高岡工場、堤工場やらの、七つの工場の代表の中で銀賞をとった。

その年、マラソンにも参加した。毎年車体部でやる行事だった。若い人のほうが、ちょっと距離が長かった。三十五歳以上の四十人の仲間に入って走った。七番目に入った。六番まで褒美があったけんども、「こんな、歳の多いのが、よぉ頑張った。特別に賞を出さなぁいかん」と部長の一言で、ポットをもらった。今まで練習もしっこなしで走ったけんど、こうなりゃあ、まあいっぺん、頑張ってやらぁかなぁと思って、家に帰ってから毎日走った。だが、当日、雨が降って、中止になっちゃった。結局走らんじゃった。

夏は夫婦で抑制きゅうりの栽培

昭和五十八年に、会社を辞めるまで、抑制きゅうりもやっとった。七、八、九と三月(みつき)の間、一日に二度切らんと大きさが揃

わん。ほれで、切ることも、つるのことも家内がやっとってくれた。わしが、会社から帰ってから、切ってあるきゅうりを、背負子(しょいこ)で、しょって来る。しょって来にゃあ、いかん所ばっかだむんでね。背おいで来て、こんだぁ、大きさを揃えて、目方を量って、箱へ詰める。やっとると十二時になっちゃいよった。はい朝五時には起きて、市場に持って行く。ほれから会社に行く。たまならいいけど、毎日だと会社で、溶接をやっとっても居眠(いね)ぶっちゃって、ズッボーンと金型に、穴を空けちゃって駄目にしたことがちょいちょいあったけどもねぇ。家内が六十になって、老人クラブへ入って、きゅうりは止めた。楽になった。

森林組合の理事として

トヨタを辞めて、六十歳から六十六歳まで、足助町の森林組合の理事を一期三年で、二期六年勤めた。こんな事があった。東北から来た作業員が、切った木の下敷きになって、死んじまった。この作業員を紹介した人が、見舞金を請求してきた。組合はお金が無くて困っちゃっただ。森林組合は、ほの時分は、山持ちだけが集まっとったむんでね。ほんなことがあってから、交渉人となって、解決に向かう役が必要だっちゅうことで、役場の助役が理事になっただ。

光生アルミの会社へ

ほれから、光生アルミっていうアルミの会社へ行った。アルミを溶かす仕事で炉が四つあったかなぁ。炉にカスが溜まると駄目になっちゃうむんで、仕事の最後に炉を掃除せにゃぁあかん。これがえらかった。熱い熱い。そんな仕事を七十五までやった。

お宮さんの階段を作って

2012年11月落葉のお宮さん

七十二才の時、子どもたちが、金婚式の祝いをしてくれた。伊豆の城ケ島の七階建のホテルだった。ずっと前から、金婚式の祝いに、何か記念になることをと思っとった。ちょうど、峠にある、村の神さんの、石段が崩れちゃっとって、年寄りが上るのが難儀だったむんで、そこを村で、やるといい、やるといいって言っとっても、なかなか、やれなんだ。この際、金婚式の祝いにやってやろうかなぁって思った。家内も喜んで賛成してくれた。ほうして、石段を造ってもらった。三百万って言われとったが、最終的には二百八十万で済んだ。上り下りの楽なように手摺りも付けた。村の衆も、よおやっとくれたっちゅって喜んでくれた。

家内はねえ、足助屋敷でわらぞうりを作っとった。一日中座って六足。履きやすいちゅって、値段がちょっと高くても方々から買いに来てくれる人があっただよ。ほれが、わしが、七十五歳前に家内が、大腸がんになって入院しちゃっただ。わしも光生アルミを辞めた。その二年後に家内は手術をしたけんど、又、四年ぐらい経ってだいぶ悪うなって、平成十六年の九月十日に死んじゃった。ほの時、わしも、一緒に死んじゃおうかしらんと思ったが、そんなとろい事してもいかんかなと思ってねぇ。

金婚式での記念撮影

一人暮らしになった。百姓は、田んぼをうつとか、機械を使ってやることは、倅が休みに来てやってくれただが。七十五で会社を辞めた半年の間に、肥えちゃった。体重が十キロ増えちゃったむん。ほうしたら、まぁ、動作は鈍く、

走るなんちゅうことは全然出来やぁへん。前のことを思って、やれるような気になって、ちょっとやって見るが、すぐくたばっちゃう。どうしょうもない。力がのうなっちゃった。

農機具について

大備中、下駄備中、耕運機もねぇ、この村で一番初めに買った。籾を取って、玄米にするちゅう、こなしをやるのに籾摺り機械とかね。乾燥機と、田植え機、コンバインといろいろ買って。それをやりながらうつ、耕す方を、耕運機から、トラクターにしただが。耕運機だと二、三日かかりよったが、トラクターだと一日でやれるようになった。今の若い衆じゃぁ、昔のような手細工の、備中なんかちゅうのは、全然やる気になってくれんだらぁと思うけんどトラクターにしてよかったと思う。こっちが何とも言わんでも、倅が百姓をやる気になってくれた。今年は、草刈機で母田（ぼた）の草刈りも、むらが出来て難しい肥えふりも、どこもかも全部やってくれた。ちいとばっかの百姓で、機械を買うちゅうこたぁ。考えてみりゃあ、とろくさいようなことだけんど、楽にやれるほうがいいかと思って。米を買って、食って、楽は楽だけんどね。テレビばっか見ておって動けんくなっちゃう。

1996年9月　73歳
長男に稲刈機（コンバイン）の扱い方を指南中

下駄備中が一番

去年ふっとねぇ。下駄備中を思い出（だ）いてやっただよ。今んとこ、畑（はた）で、

2012年9月　89歳　近くの畑で下駄備中の使い方を説明中

野菜だけ、わしが作っとるが、備中でうつより深こううてるし、うったとこ踏まんでいいし。まっと早よぉ出いてやりゃぁよかった。耕運機だとある程度面積がないといかんが狭い所だったら下駄備中が一番いいじゃあないかと思うね。下駄備中を使っとるのはここら辺では、まず、わしだけかなあ。体力的にもこたえんだね。下駄備中はねぇ。うつ時の姿勢がいい。胸を広げて自然に体操が出来る。鍬でうつと、腰が痛ぁなってね。秋はこないだ白菜を蒔いたが9月になってから大根とか、法蓮草を蒔くようになるだね。

長生きの秘訣

ほでもいいことに、ゲートボールとグランドゴルフやっとるけんどもねぇ。あれは、ようしたもんで、その割に力も何もいらんとみえてやっとる時は何ともない。ほれとねぇ、メンバーが女性の方が多い。五十九名のうちで男が二十六名、女が三十三名。ゲーム中や終わった後に、話がいろいろやれるのが一番いいような気がする。今が一番幸せじゃあないかなぁと思う。前はねぇ、自分の事より人の事で何とか、みんなに気に入るようにやれるかどうかを心配しながらやっておったが、今は何も苦労はない。幸せだなぁって思っとる。これからも軽トラを運転して、みんなの所へ出て行こうかなって思っとる。身体の痛い所もないし。なんでもねぇ、人間なんて欲を言やぁ切りはない。長生きをするにゃあ動かにゃぁあかん。動ける時は動かにゃぁあかん。頭を使わなくちゃぁいかん。

「こりゃあだめだ」と思っても、まわりの人が、いい人があって、必ず励ましてくれる。

【聞き手・山井由利子（古瀬間町）】

長男とお宮さんで

金蔵連（ごんぞうれ）に生きて

矢澤　八重子さん　（やざわ　やえこ）　御内町

大正十五年一月十日生まれ（八十六歳）

御内本郷から金蔵連に嫁がれて七十年。三人のお子さんを育てながら、矢澤家の礎を築いて来られた。野菜作りの名人でチャレンジ精神旺盛な八重子さんはいつまでも若々しく、可愛い方である。御内住民からの信頼も厚く、歴史・伝承においても生き字引的な存在である。

見初められて

大東亜戦争が始まって昭和十七年三月二十八日、十七歳で嫁に来たんだよ。ここのお母さんにこの子が良いって言われて。

文金高島田に髪を結い、小袖を着て塗り下駄を履き、祖母や村の人たちに見送られ、涙ながらに家を出たのは、もう夕方だったよ。それから、四kmの道を歩いて、やっとの思いで金蔵連に着くと、すっかり日も暮れて、空には星も出ていたなあ。昔は、嫁は勝手口から家に入るんだったよ。ご先祖様をお参りしてから座敷に座ると、両方の親族が互いに挨拶してね、それから酒宴が始まるの。歌ったり踊ったりしてにぎやかに一晩中飲み明かし、食事が終わり、

新婚の頃

生け茶を差し上げる頃には、もうすっかり朝日が昇っていたねえ。良い気分で歌を歌いながら帰られる方もあったよ。

髪を解いておぐるにすると、ああ、もう娘の髪型には戻れないんだなと寂しさがこみ上げてきてね。でも、酒宴の片付けがあるものだから、そんな感傷に浸ってもおれず、村の人に手伝って貰ってお碗を拭くのだけど、眠かったねえ。

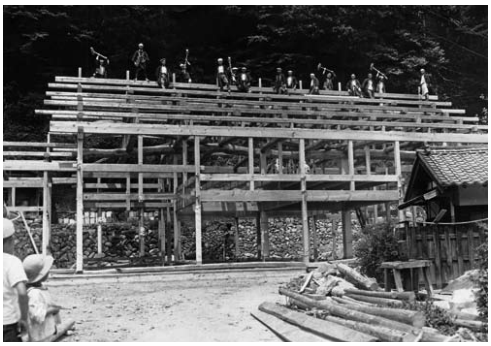
何にも知らずに嫁に来たけど、ここのお母さんがわたしを可愛がり、教え導いてくださったから、今日まで来られたと思うよ。村の人たちがみんな良い人だったことも、ありがたかった。

あの時分でもねえ、新婚旅行には行ったよ。伊勢と勝浦にね。足助まで自転車で行くのだけど、当時は牛や馬に運送車を牽かせて木を出してたから、道路に荷車の轍（わだち）があってね、車輪がちょっとはまると転がっちゃうの。お父さんと一緒に転がってねえ（笑い）。足助からはバスに乗って、名古屋からは電車でね。

大きなお腹を抱えて

出産はみんな家。お腹が痛くなったって、お父さんが足助まで産婆さんを呼びに行ってくれただよね。産婆さんは貨物トラックに乗せてきて貰ったんだと思うよ。二人の子は村定さんのおばさん。昔のおばあさんだね。三人目は中立のいしやんっていう人が来てくれて、自分の部屋で生んだんだよ。部屋には床が切ってあってね、後産はそこへ埋（い）けるの。方々へ埋けたりしたら、獣が来て食べてしまうから、親がそうしてくれただよね。昔は実家に帰るなんてことはなかったよ。だから、一月（ひとつき）もゆっくりしてはいられなかったね。寝てても一週間くらいだった。よくあれで、何ともなかったねえ、お陰様で三人とも安産だったからありがたかったわ。

この家を造るという時に三人目ができててね、「大きなお腹して大工さんたちのおさんど



本屋普請

ん（炊事）なんか、ようやりません。」って言ったの。本屋普請はやめてもらうか、それでなけりゃ、子供を堕ろすってね。だけど、家を建てるというめでたい時に、そんなことはできんって言われてねえ…。

仕事衆が寝泊まりする小屋作りから始まったのだけれど、大工さんが四人に山から立木を切り出す杣（そま）さん、柱や板に引く木挽（こび）きさん、この六人はいつもみえたね。その他に、敷石を敷く石屋さん、建具を作る指物屋さん、壁を塗る左官さんなど、常には十人程が寝泊まりして仕事をしてみえた。みんな、襟に「矢澤家」と染め抜かれた揃いの法被を着てね。食事の世話をするのはわたし一人。みんなのご飯を五升釜で炊いたりおかずを作ったり…。釜を掛けたり外したりするのは妊婦でなくても大変な仕事。朝昼晩、作っては片付け、作っては片付けの繰り返しで、お腹が張って動けなくなってしまうことも度々。それでも仕方がないもん、頑張ってやったよ。あんな状態でよく流産しなかったものだね。仕事衆は、暮れの三十日に帰られたと思うと、明けて二日にはもう仕事始め。わたしに正月はなかったねえ。

子供の面倒は見てやれなかった

二十四年頃かなあ、政伸が生まれる時には小屋を建てていてね。長介が四歳くらいかなあ…。ずっと大工さんたちが入ってみえたから、食事の世話が続いて、二十六年からは本屋普請でしょう。だから、長介なんかねえ、だいたい見てやれなかったのよ。わたしは本当に見てやれなかったわ…。生まれてからずっと。お母さんが子守の好きな人だったから、遊ばせてくれたり作（さく）さ（金蔵連の屋号参照）へおんで行ってくれたりしてね。お父さんが小学校、中学校とＰＴＡ会長だったから、父兄参観日にはお父さんが行くでしょう。そうすると、わたしは行けないじゃない。どうかして、名古屋のお姉さんが見てくれると、学芸会くらいは行けたけど。それは、今でも思い出すと悲しいね。

足助の町に出るのは年に二、三回。パーマをかけに行く時くらいだったよ。その時分にはいくら持って行ったかしらん。お金を貰っても、やっぱり、たまに行くから、子供に何か買ってやりたいでしょう。だから、昼はうどんの一番安い物を食

べて、そうやって何かしら買ってきてやっただね。わたしの物は何から何まで全部お父さん。自分の物は何にも買ったことはなかった。だけど、無性に買ってくるわけじゃないよ。山崎屋の人に見て貰っては、必要な物を買ってきてくれるんだった。それに、家のお父さんはわたしを外に出すことが嫌いでね。在所へ法事や何かで行っても、「そう笑っちゃあいかん、しゃべっちゃあいかん。」って怒るのよ。楽しそうに話したり仲良くしたりしていると。婦人会があって、会合に行くでしょう。そうすると、すぐに電話を寄こして「矢澤八重子さん、用事があるから帰って下さい。」そういう人だった。わたしのことがよっぽど大事だっただねえ（笑）。

あの頃は男がえらいいばっててね、男より先にご飯を食べてはいけない、お風呂も入ってはいけない。そうだったから、仕事で埃になってもお風呂に入らず待ってるの。そうすると、十二時くらいになって、帰ってくるんだけど、酔っぱらってるからお風呂になんか入れないでしょう。だから、結局、沸かしただけで入らないで寝てしまう。そういうこともあったよね。女の人は今じゃ考えられないような難儀をしたんだよ。

それに、男の人たちは飲むことが好きでね。わたしも本当に悲しかったことは、さあというと、みんな家に来て飲まれるのね。雨が降ると農休みにしてしまって。だけど、わたしだけは酒をつけたり何なり酒の肴作ってあげないといかんでしょう。そんな風だったから、わたしの休みは全然なかった。やっぱり、これだけの村だから、昔はよその村との交流はないでしょう。だから、何だっていうと集まっては話が弾むの。あそこの嫁はどうのこうのってね。みんな年が同じくらいだったから良かったんじゃない。

わたしたち女は子供がいるから一生懸命で子供のことをしたり、家のことをやっ

仕事に励む

たりして、自分の楽しみなどは浮かばなかったね。全然、考えなかった。お嫁さんは動いていれば良かったものね、昔は。繕い物でも自分の物はできなかった。だけど、方々の女の人たちと比べると、この金蔵連の人は良かった方だと思うよ。もっと、難儀をせられた人たちは大勢あるもの。でも、その時分はよそのことなんかわからないから、ただ、毎日毎日を何にも考えずに、一生懸命やっただよね。旦那さんに言ってもしょうがないし、怒ってもどうしようもないから誰にも何にも言わなかった。

悲しいことがあれば風呂場へ行ってから泣くんだったね。やっぱり、若いから心が敏感でしょう。だから、ちょっとしたことでも気が付くのね。そうすると、泣けてくるじゃない。だけど、泣くとこがないからお風呂へ入った時にわんわん泣く。そういうことがよくあったねえ。わたしは怒ったり、叱ったり、けんかしたりすることが大嫌い。見るのも嫌い。だから、家の人にも自分の子供にも怒ることはなかったね。

義母の介護を十三年

中（なか）の九十二歳のおばあさんが亡くなって、百か日のお参りがあったの。そこで、お母さんが脳梗塞で倒れてね。七十二歳くらいだった。この家ができてからだったから、部屋に寝かせたものの、入院させた方が良いということになって、足助病院に入院させたのね。だけど、しばらくすると、家に帰りたいって言うもので、家へ連れてきて看たんだけど、おしっこが出なくなってね。家政婦さんに二年くらい看てもらったね。昔のことだから電気がないでしょう、火鉢に火をおこし、湯を沸かしては処置してくださった。

そうすると、また、家政婦さんのご飯を作らないといかんでしょう。そうして、十三年だったねえ…。八十五歳で亡くなったから。だけど、卵ご飯をあげると、結構一膳くらいは食べられた。食べる気持ちがあったから、あれだけ生きられただよね。食べられなかったらもっと早かったよねえ…。

自分の子のように看病したよ。お母さんと一緒に中間で寝たり、食べさせてあげたり、お風呂に入れてあげたりねえ。部屋からここの居間まではんでみえて、そこからは土間だったから、おんであげたのね。お風呂に行くと、戸につかまって、しゅうっと一緒に倒れてしまうから、危なくてねえ。だから、ちょいと下ろしてあげて、入らしてあげただよ。もしかのことがあってはいけないと思って心配するでしょう。汗だくで、どきどきしながら一緒に入って洗ってあげた。わたしは服を着ていたけどね。

それだけ看ると情がわいて、お母さんが亡くなってから一、二年くらいは泣けて泣けて、小屋の方でわあわあ泣いていたよ。だけど、ちょうどその頃、飛行機事故があって、若い人たちが随分亡くなって…。その時、あんな若い人でも亡くなってしまうのだから、いつまでも悲しんでいてはいけないと思ったら踏ん切りが着いたね。

義母との穏やかな日

働くことしかないと思って

それなのに、続いてお父さんも亡くなってしまって…。長介と政伸と和子、みんな結婚させてくれたから良かったものの、五十歳は早すぎるよね。とっても信心深い人で、お寺さんのお参りも欠かさない人だったのに、あっけなく逝ってしまった。二月時分に入院して三月（みつき）ばかりだった。子供たちも交代で泊まって看てくれたんだけど…。とっても残念だった。悲しかったよね。お父さんが亡くなってからは、まだ若かったけど、長介が一生懸命やってくれた。お父さんがいるうちは役場の仕事ばっかりで何にもしなかったけど、亡くなってからは家のことも全部やってくれた。わたしの兄弟も多かったから、みんなが助けてくれたよ。立て続けに大切な人が二人もいなくなって、残された自分は働くことしかないと思った。それで、山の下刈りに田圃、畑仕事にと、それまで以上に一生懸命働いたよ。家の田圃の田植えが終わると、作（さく）さの田植えもしてあげた。

その頃、作さの忠彦さんも八重子さんも郡有林（東加茂模範造林組合）の事務所の管理をしてみえたから、元屋敷（もとやしき）の美智子さんとよく植えてあげたよ。息子さん一家が戻られ、やられるようになってからは行かなかったけどね。

八重子さんが目の手術をした時には、名古屋まで行って看病したよ。子供さんたちがまだ学校だったし、忠彦さんも事務所から手が引けなかったから。健一じいちゃんの法事の時も、八重子さんが家をきれいにしたいけど、心臓がえらいって言うから、前の日、日が暮れるまで石垣の草をきれいに取ってあげたよ。忠彦さんに「まだおっただかや、悪かったなあ。まあ、帰っとくれん。」って言われて帰ってきた。八重子さんとは小さい時からのお友達だし、血がつながっているものねえ。少しでも手助けしてあげたかったんだよ。元屋敷（もとやしき）の美智子さんもよく手伝ってくれた。

八重子さんの体調も良くなってからは、忠彦さんと八重子さんとわたしとで、毎年、農協や東部老人クラブの旅行に行ったよ。二泊三日で四国に行ったこともあったね。大勢集まって行く旅行は本当に楽しかった。お父さんが亡くなってからは、毎年、兄弟が旅行に連れて行ってくれてね。十五人程で行くのだったけど、これも楽しみだったね。今はみんな年を取って行けなくなってしまったけれど…。友達も誘ってくれて、あちこち出かけたよ。昭和六十年頃が一番よく出かけたねえ。

思い出の兄弟旅行

若い頃の夢

高等小学校の時、わたしも女学校へ行って先生になりたいな、子供たちは良いなって考えてた。だけど、その頃は戦時中で、学校から、出征する人を送りに行ったり戦死された方のお参りに行ったりして、勉強するという状況ではなかったねえ。結婚して金蔵連へ来てからは、裁縫をやりたいと思ってたよ。それと、金蔵連中の女の人に家へ来てもらって、一緒にご飯を

炊いて食べたり話し合ったりする。そういうことがやりたかったね、一番。女が楽しむ。それがわたしの夢だったけど、結局、家々でやることがいろいろあって、そういうことはなかなかできなかった。それが今でも残念だね。

信念をもって

昔、秋山静子さんという人が今東光さんとの対談（婦人クラブ）で、「諦める」ことと「無」ということが一番大事だって言ってみえた。昨日のことは昨日で終わらせて、明日に持ち越さないと。苦しいと、自分のことを業だとか何だとか言う人があるじゃない。「わたしはこれだけの業を背負ってきた」何て言う人が。わたしはそういうことは絶対思わないね。なるようにしかならんってね。くよくよしたってどうにもならんものねえ。くよくよして、自分でいくら泣いても叫んでもどうにもならん。それは感じてきたね。それに、誰かがああ言った、こう言ったって言う人があるじゃない。だけど、人がそう思っていれば、どうしようもないものねえ。人が何と言ったって、わたしはこうだでいいわって、そう思う。今の自分の置かれた環境のあるがままを受け入れること、人と比べて多くを望まないことを信念としてこれまでやってきたよ。だから、人にもあれこれ余分なことは言わない。それでも、人に言ってあげたいと思うことはあるよね。言ってあげた方が為になるなと思う時は言うよ。全然、黙っているわけじゃあないけどね。

もう一つは「あと五分の頑張り」。これで終わりと思えばもうそれで終わり。嫌だなと思っても、もうちょっと頑張るともっとできることもある。残りの五分の向かい方が大事だと思うよ。嫌でも何でもそう自分に言い聞かせてやってきたから、今までやってこられたんだと思うよ。

このことは、毎日、山の下刈りや田や畑の仕事をする中で、強く思うようになったね。今、やるべきこと、自分にできることを精一杯やって、あとは自然の力に任せる。何でもそうじゃない。野菜作りでも仕事でも人間関係でも、みんな同じだと思うよ。

野菜は連作を嫌うから三年、間を置かないといけない。だから、あちらこちらと考えて、種を蒔いたり苗を植えたりするんだけど、これはなかなか大変なこと。それに、時を間違えずに蒔くこともね。だけど、四季折々の野菜がないとたるいからあれこれ考えて作ってるよ。できた野菜で漬け物やお総菜を作ることも楽しいね。お世話になっている人や親しい人、訪ねて来てくれた人に、わたしの作った野菜を食べて貰うのも嬉しい。それに、新しいことに挑戦することも楽しみの一つ。今年は何を新たに作ろうかなとやってみる。上手くいく時もそうでない時もあるけど、手応えが得られるのは、また、次への意欲につながるものね。

野菜なんて買ってくればいくらでもあるけど、わたしが作った物をみんなが「美味しい。美味しい。」と言って食べてくれることが嬉しい。「おばさんの作る野菜は太陽の匂いがする。お店に売ってる物とは全然味が違う。」ってね。そうすると、今度は何を作ろうと、また、やる気が涌いてくるよ。この頃は孫たちが来ては畑を打ったり草を抜いたりしてくれるようになってね。それも、嬉しいことだね。朝、お天道様と一緒に起きて、一日外で働ける健康がありがたい。だけど、以前は、野菜をきれいにしてあげるのがわたしの主義だったけど、この頃は体がいうことをきかなくて、土をはらったくらいであげなくてはならないことが悲しい。加齢には勝てず、もう、やめようかなと思うこともあるよ。野菜に負けてるね。でも、外に出てれば気が休まる。小さな草花でも咲いてれば、可愛いなあと愛でるのも楽しい。

今から十数年前、地域バス「あいまーる」ができてからは、車の運転のできないわたしたちも、毎週、病院や買い物に行けるようになったんだよ。病院では暫く会えなかった方々とお話が弾み、友達と町へ出て、コーヒーを飲んだりお昼を食べたり。一日楽しんだみんなの手には荷物が一杯。バスを降りる時には「またね。」と笑顔が一杯。昔では考えられなかった

畑に精出す八重子さん

この楽しさ。長生きして良かったってしみじみ感じるよ。

春になれば競って花が咲き、小鳥も訪れる。時は穏やかに流れ、どの家もゆったりと暮らしている。わたしはそんな金蔵連に生きてきて本当に幸せだと思っているよ。先日も、孫やひ孫と一緒に伊勢参りに行ってきたんだよ。伊勢はお父さんと行った思い出の土地だもの、懐かしかったよ。この頃は、表でひ孫とサッカーをしたり虫を捕ったりして遊ぶこともあるよ。みんなが大事にしてくれるから幸せだね。

ひ孫とポーズ

ちょっと　ふざけて

金蔵連の屋号

4

作さ（さく）	新家（あらや）	西（にし）	中（なか）	東（ひがし）
藤澤	矢澤	矢澤	矢澤	矢澤
卓美	鉛藏	貞雄	鏡一	長介

元屋敷（もとやしき）
伊藤
茂弘

【聞き手・藤澤和子（御内町）】

九死に一生、山仕事も店も俺の一代

藤原　總助さん（ふじわら　そうすけ）　足助町

大正十四年五月三日生まれ（八十七歳）

大見新田に育ち、十六歳で海軍志願兵となり北千島から南ニューギニアまで主に駆逐艦に乗艦。多くの戦いに参戦し生還。終戦後は山師として木の出しを得意として、八十歳まで働く。現在は昭和四十五年に始めた「喫茶店のんびり」を奥さんと営んでいる。

子供の頃の思いで

我々が生まれた大正や昭和の始めごろは不景気で、百姓屋は皆炭を焼いとった。今と考えたら全然分からんかも知れんが、貧乏人が多くて、皆が炭を焼いたりして現金収入を得ておった。

教科書が昭和十年で変わりサイタ、サイタ、サクラガサイタになったが、俺らの頃は一年生の国語は、ハナ、ハト、マメ、マス、ミノカサ、カラカサ、カラスガイマス、スズメガイマスだった。算数の教科書は七銭だったが教科書を買えない子もいた。

家は大見新田という東大見からズーット上がった所に有って山の上だ、そこで炭を焼いていた。大見の学校は家から一里以上あって一時間以上はかかって通っとった。おばあさんが毎日わら草履を作ってくれたが山道なので、すぐに磨り減って無くなったしまうんだわ、それで、裸足で通っていく事も多かたっし、道も悪かったが、痛いなんて思った事は一度もなかっ

たな。六年生時分になると帰りが遅くなって、提灯を持って通っていた。五の沢峠と言う所に杉林があって、その杉林が暗くて、タヌキが出るとかいろんな事言われて怖かった覚えがある。当時は今よりも雪が多く降って、年に一回か二回は学校に行けんかったことも有った。

千日草履が出来てからは雨降りでも調子良かった。わら草履は水の中に入ったらすぐ無くなっちゃうけど、水の中に入っても良かったね。調子良かったが、すぐに鼻緒が取れちゃって針金で縛ったり勘考して履いとった。

昭和十三年に修学旅行に行って名古屋の東山ホテルっていうとこに泊まって、もう一泊は伊勢だった。小遣いが二円だったと覚えている。名古屋では汎太平洋平和博覧会というのをやっていてそれを見に行った。見るもの見るものどれも珍しくて、その時にはもう耕運機のような機械があった気がした。高等科の時の修学旅行は京都と奈良に行って、京都の動物園や金閣寺だとか五、六ヶ所を回った。旅行は楽しかったが、お金が無くて行けん子が子あった。可哀想だったな。皆が出かけて一人残った「教室で自習していたがとても悲しかった」と後の同級会の度に話しておった。

俺の家も貧しかったので、山で炭を焼いて生計を立てとった。炭焼きは炭窯を作るのに一ヶ月は掛かったので、その間の生活費は炭問屋が立て替えてくれて、炭が出来ると問屋に納めた。高等二年の時には、親父が二百円ほど金をためて東大見から稲橋（今の稲武）へ行き、自分で山を買って炭を焼いていたので、俺は稲武尋常高等小学校の高等科に通い卒業した。井山と言う所に炭焼き小屋と住む小屋も作って炭を焼いていたので、そこにから学校に通っとった。

ここも学校までは随分かかった。そこでは焼いた炭を問屋に高く買ってもらい、千五百円くらい儲けて足助に帰ってきた。昭和十五年には現在の所に家を二千八百円で新築した。

海軍に志願

高等科を出て一年は親父の手伝いをしておった。炭焼きの手伝いをしていた昭和十六年はロシアに勝ち支那事変で中国に

も勝って、日本は神国であると有頂天になってた頃だ。十二月八日には連合国に宣戦布告となった。
その頃の若い衆は皆、兵隊に行くか徴用工員になるかどちらかで、女の子でも女子挺身隊とかで皆、軍需工場に出て行ったんだ。
炭焼いとってもつまらんから俺は「兵隊に行く」って言って、親父に相談したら「どうせ遅かれ早かれ兵隊には行かなきゃならんから、行ってこいや」と言われた。
俺は海軍志願兵募集のポスターを見て志願することにした。
海軍志願兵は五年経てば帰ってこれると言う事だったので、五年経ちゃ二十一歳で、志願したら徴兵より若いうちに帰ってこれると考えてね、その時には日本が負けるなんて思ってもいなかった。役場に行き志願書を貰い、その場で願書を出したら、年が明けてまもなく兵隊検査の通知が来た。検査を受けて甲種合格となり昭和十七年五月二日に呉海兵団へ入団する事になった。
呉に出発した日、その時には賀茂に籍が有って、金蔵連(ごんぞうれ)で親父が炭を焼いていたので御内(みうち)の小学校の人や足助でも近所の人達が皆で送ってくれたんだ。御内の小学校の子供たちは二キロぐらい有ると思うが電橋(でんばし)の所まで送ってくれたのを今でも良く覚えとる。
足助八幡宮の境内にも埋め尽くすほどの兵隊送りで小学生から青年団、婦人会や役場の職員、部落の人達が送ってくれただ。「藤原君万歳、万歳」と言って送ってくれたが、十六歳でまだ子供だったので一寸恥ずかしかった。でも、お礼の言葉もまあまあ言えた。
岡崎から軍用列車で呉に向かう途中、皆持っていた寄せ書きの旗を汽車の窓から振ると畑や田んぼで百姓やっている人達が答えてくれた。万歳、万歳と見送ってくれ、中には手を合わせて拝んでくれる人も見えた。

海軍の兵隊として

入団して四等水兵になり、三ヶ月の新兵教育を受け卒業して三等水兵になった。航空母艦「準鷹」に乗ったんだが、訓練中に弾薬庫の扉、金庫の扉の様に分厚いのに指を挟まれて負傷し下ろされた。軽傷だったのですぐに治り、敷設艦ウ６０９に乗っただ。敷設艦は海中に一定に深さで機雷を置いていく軍艦で、俺が乗ったのは商船を改造した船で、船尾に穴を開けて投下口を作り、機雷をトントン、トントンと置いていく船だ。

昭和十八年五月ごろ日清戦争時大本営が有った広島県の宇品って言う所から千人の陸軍の兵隊と糧食、兵器、弾薬を積んで、太平洋の南、ヤルート島に向かって出港した。一週間たってヤルート島が見え、皆が上陸準備をしている時に敵潜水艦の攻撃を受けた。どえらな音がしたと思ったら魚雷が当たった。乗っていた艦は商船を改造した船だから鉄板が薄いだね、船内の仕切りも軍艦（破損で浸水してもその部分だけで浸水を止める構造）のようになってないし、荷物を沢山積んで重かったので、すぐに水が入ってきて瞬く間に沈んでしまった、二、三分の事だ。

俺は丁度食事を終わる時だった、夢中で上甲板に上がって行ったんだが、皆がラッタル（梯子段）にワーッと行くんでなかなか出れん、上甲板に出た時分には既に後甲板は沈んで、もう泳いでいる人が見えた。

艦が横倒しになったので、舷側が滑り台のような急勾配になり、飛び込もうと思ったが飛び込めなくて、サーッとそこを滑って下だったが、次から次へと皆滑ってくるわけだ。後ろから同じように滑ってきた兵隊に嫌と言うほど強く踏み込まれ、海中深く押し込まれた。

水兵に成り立ての頃

周りが泡ばっかりだと言う事は覚えている。白い泡ばかりの海中の上の方がかすかに明るく見えたので犬掻きで泳いで水面に出た。苦しかったが、吸った空気の旨かった事は今でも忘れられない。そんな時、天皇陛下万歳なんて事は思わんかったが母親の事を思った。

何とか上に出たが、出た所が太平洋の真ん中で海には大きなうねりが有って、うねりの上に出た時には皆が泳いでいるのが見えた。

船が沈むと何か浮いていると聞いていたので、辺りを探したら波の間にブイがみえた。そこに行こうと思うがうねりで、俺も下がるがブイも下がるということでなかなか行かれんかった。やっとたどり着いたら二、三人の先客がいた。仲の良い友達も一緒に泳いでいたんだが、ブイの二メートル位まで来たが、力尽きて沈んでしまった。もう少し頑張れば助かったのにその人の運命かと思った。

陸軍の人達は上陸する準備でゲートルを巻いて靴を履き、完全武装をしていたので泳ぐには難儀をしたんだと思う、だいぶ死んだ。自分たちは軍歌を歌いながら互いに励ましあって泳いでいた。護衛の駆逐艦が少し離れた所に居たが、その艦も自衛のために爆雷を落としながら回りをぐるぐる回っているだけで、二、三時間たってようやく助けられた。日本時間で、三時頃は夕食で、夕日が沈む。助けられた時はまだ明るかったが島についた時分にはちょっと暗かった。助けられた時と陸上に上がった時はうれしかったな。助かった人は陸海軍合わせて三百名程度だったので千人くらいは亡くなったと思う。

生還後の任務

半月ほど経って内地向けの艦が出たのでそれに乗って帰る途中、海軍普通科練習生の募集が有ったんで応募しようと思ったが、学校に入るのにもどんな学校と言う事も分からんかった。いろいろな科目があったが、普通科に合格し入学した。この学校も本当は半年のところ三ヶ月半で卒業した。学校を出ると、章持ちということでさくらのマークが胸に着く、それか

らが大変だった。

当時、日本には軍艦が三百、四百隻くらいはあった。俺は舞鶴軍港で駆逐艦（くちくかん）「霞（かすみ）」（魚雷を主兵装とし、敵の大艦を襲撃することを任務とした高速水上艦艇）に乗艦し水雷発射管射手として勤務し、小樽から北千島の占守島（しむしゅ）にかなりの兵隊を送った。トラック島、仏印（ふついん）（仏領インドシナ）のカラム島、マニラ、ニューギニア、ラバウル、レイテ島、サンホセ、ボルネオなど多くの作戦に従事した。南方は暑い寒いが無いので、秋だか、春だか季節が分からんとこだった。軍港は国内では大湊、横須賀、舞鶴、呉、佐世保そして、台湾のマカホという所からトラック島だった。トラック島は安全なとこだった、ラバウルもまだ良かった頃だ。十八年くらいはまだ五分五分くらいに戦っていたが、日本は飛行機がやられると後が無い、やられると後が続かん。

ラバウルにも二回くらい行ったかな、夜、敵の飛行機が来ても撃つわけにはいかん。こちらが撃ちゃ、所在が分かってしまうので港に隠れておった。ラバウルに着いた時には眼鏡で見ると海岸に土人が見える、これが真っ黒でえらい黒かったな、女の子達が海で洗濯みたいなことをしているのが珍しくて、一生懸命見とった。

一番長く居たのがマニラ、ここは死に物狂いだった。あそこではたびたび、敵機の空襲を受けた。多少の損傷は有ったが艦は無事に任務を遂行できた。しかし、各作戦で三人や五人の死傷者は出た。日本がだんだん負けて、レイテ島作戦では二十人くらい死んだことがある。自分たちの乗った艦はすぐに魚雷を発射出来るように「起動弁開け」の号令で、起動弁を開いて発射できる状態で夜中に先頭位置で行くと、前の海が真っ赤に焼けていて、近くに行くとそれは「山城」って言う戦艦だった。レイテ湾で真っ赤に燃えている船の傍を通って敵艦を探したが、敵の船は島影に隠れ発見できなかったので、マニラに帰った。俺らは帰ってこれたが、この戦いでやられた船もだいぶあって、戦艦「武蔵」、「山城」など日本の軍艦が多数沈んだ。

レイテで海軍の戦争は終わったけど、大事な所だから陸軍はレイテに兵隊を送ったんだ。マニラから戦艦のほとんどは帰っ

たが駆逐艦とか海防艦（小型護衛艦）とかの小さい船は残っていて、輸送をやっていた。この輸送が又、駄目な輸送で、俺らはマニラや満州から来た精鋭を積んでレイテ島行くんだが、レイテの辺りには敵の空母がいてグラマンとかロッキードと言う艦載機が次ぎから次に来るんで、皆やられちゃう。

十九年の暮れには制空権はアメリカに取られ、軍艦は殆ど内地に帰ってしまったが、マニラからレイテ島まで満州の兵隊を四隻の輸送船に乗せて二回護衛したが、二度目の時、目的地まで着いたのは俺の乗った艦一隻だけでそれも港が浅いので座礁してしまったが沈まなかった。他の艦は皆沈んでしまった。

毎日夜間は爆撃に曝され、レイテで船が二十七隻沈み、朝見たら船のマストだけがマニラ港に何本も立っていたという話も聞いた。そして、レイテ島に兵士を運ぶにも船も無くなってしまいどこかに移動になった。

いつ頃だったか覚えていないが、マニラからバシー海峡を通って呉軍港に向かって航行した。この時通過したバシー海峡（フィリッピンと台湾の間）は船の墓場と言われ、日本から行ったり来たりする船は必ず通る所だが、潜水艦がうようよ居るので、魚雷を落としながら通った。後に聞いた話では、南方から内地に帰る船や満州からフィリッピンへ輸送する船が敵の魚雷攻撃を受けて三十万人以上が死んだと言う事だった。

乗っていた船は4月少し前にマニラから帰って無事に港に着くことが出来た。グアム島とか硫黄等とかが玉砕したのは、帰港してまもなくだったと思う。

最後の出撃

昭和二十年四月一日アメリカ軍が沖縄本島に上陸、その日に連合艦隊ってその頃はもう無いのに大本営より「四月八日未明を期して沖縄に突入せよ」との命令があったが、四百隻も五百隻もあるところへ十隻ばかり行ってもどうしようもない。「弾が無くなったら切り込め」と言われても、駆逐艦には小銃も無ければ何にもない。嘉手納沖に密集している米軍艦隊を突破

して海岸に乗り上げ陸の砲台として撃ちまくり、弾丸が無くなったら上陸して敵の陣地に切り込むという手はずで、老兵や病兵は退艦させ、乗員は三百人ちょっとになったが、皆んな死に場所が出来たと張り切っていて、その晩は飲めや歌えの大騒ぎだった。中には髪の毛を封筒に入れて遺書を書く人もいた。この時分でも皆、日本は負けるとは思って無かった。

菊水特別水上特攻隊の他に特攻機も毎日行きよった。俺は今まで何回も海戦に出たが船も自分もなんとも無かったので、今度も又、大丈夫と思い遺書も書かず飲んでばかりいた。　この頃の軍人は死ぬことは恐れていなかったし、自分もむしろ軍人の誉れと思っていた。

俺の菊水特別水上特攻隊は四月六日、日暮れに柱島錨地（艦隊訓練で錨を降ろす所）を出撃、十隻の軍艦がよるなんて事はなかったので気分を良くして戦艦「大和」を真ん中に出かけたんだ。十隻で出撃する姿はほんとに立派だった。出かける時はまだ明るかったので、日本が埋めた機雷がものすごく入ってる所を一列で避けながら慎重に通過した頃、駆逐艦「朝霜」が機関の故障で戦列を離れた。　大和は排水トンが六万四千屯、長さが二七〇メートル、俺らの駆逐艦は二千屯ぐらいだ。長さは一二〇メートル、比べたら、まるで小さな漁船のようだった。これが連合艦隊の最後の反撃となってしまった。

戦闘と大和の沈没

七日の朝、大隈半島の海峡を通過する頃から敵機が艦隊の上空を一機二機旋回するのが見えた。敵は艦隊の行動を出港する時から分かっていたらしい。敵の潜水艦や航空機に監視されながら沖縄に向かって突き進んでいくと、十二時頃空襲警報の号令があり、敵機が群雀のように数キロ先に見えた。百数十機の第一波が襲い掛かってきた。我々は水雷科なので魚雷の発射管のなかに入ってしまうが、飛行機には用がないので、出て砲術科の手伝いをする事になる。最初に駆逐艦「浜風」が真っ二つになって轟沈し、巡洋艦「矢矧（やはぎ）」が火災を起こし、俺が乗った、駆逐艦「霞」も魚雷ではなかったが、直撃弾を受け機関室に浸水し、喫水一メートルくらいで浮いていたが、航行不能になって止まっちゃっただ。

駆逐艦や巡洋艦が皆やられて、大和への攻撃が主となった。大和も第二波の敵襲を受けてからは速力が落ちた。霞はもう傷ついているので、敵は余り爆弾攻撃はして来なかった。それでも、爆弾を落としたあと身軽になった爆撃機が機銃掃射でバリバリと次から次ぎと襲撃してきた。乗っている船の上には雲が掛かっていて雲の間から飛行機が突然出てきてすぐ近くにくるから眼鏡を掛けた敵の操縦者が嘲笑うように我々を見てるのが見えるんだ。でも下から撃ってもなかなか弾が当たらなんだ。

俺は水雷科で機銃は扱わないのでもっぱら機銃の玉運びをやっていた。俺の一メートル位前を走っていた戦友が突然ばったり倒れたので、今度は俺かと首をすくめたが大丈夫だった。甲板は血が流れ滑るので、滑り止めに砂を撒いた。死んだ兵隊がごろごろして、実に悲惨な有様だった。二波三波と攻撃され、攻撃の間に砲身が真っ赤に焼けたのをホースで水を掛けて冷やしたり、負傷者を運んだりしていた。死闘は二時間半ほどの間に五回位続いた。

我々の船は大和から二千メートルくらいの所にいたが、誰かが大和が沈むぞと言ったので、大和の方を見たがその時は撃つ煙と当たる煙でマストが少し見えるくらいで艦は見えなかった。まもなく、艦の中央辺りから煙の柱が高く昇り大爆発を起こしたのが分かったが、音は自分の船の音で分からなかった。大和は沈まんと思っていたんだが、まもなく真ん中二つに折れて沈んでいった。俺は沈んでいく大和の船首と船尾をかすかに見た。

誰かが「帽振れ」と叫んだので、皆で帽子を振ってお別れをしたことは感無量だった。帽子を振るのは船で亡くなった人は水葬で後部の甲板で棺桶を作りそれに練習用の弾を錘に付けて海に沈めるんだが、最後のお別れに帽子を振ってさようなら、大和の時も最後のお別れだった。大和が沈んだら敵機も引き上げていったので見方の船に救助され、乗っていた霞は魚雷で沈めて佐世保軍港に帰った。

終戦

水雷科の章持ちは横須賀の水雷学校へ転勤との伝達で、水雷学校へ入校し射保隊の訓練を受けた。射保隊というのは内火艇って言う小さな漁船くらいの船での両側に直径六〇センチの長さ一〇メートル位有る魚雷を抱えて敵艦に体当たりし、これを撃沈する水上特別攻撃隊の事で、今思えば、とんでもない作戦だった。

訓練の後、俺は静岡県の大瀬崎に配置されたが、中には反対側の真鶴に行った兵もいた。そこで海岸に防空壕を掘っている内に終戦となり、残務整理といって十人位しか居らなんだが、その基地に有る物を海に沈めたり、漁師の網を干すような所を臨時の兵舎に借りていたので元に戻して返したり、米なんかは皆持って帰させた。

そんな事をして九月半ばに家に帰ってきたが、帰っても食料は無く、食べる物を探す毎日だった。日本全国食糧難の時代で誰も一人で立ち上がらな成らん時代があったんだ。

俺の一代じゃ三年半は短いかも知れんが、兵隊が一番印象に残っている事だ。

山の仕事

昭和二十年のうちに帰ってきたが、軍隊で習った事なんか何にもならん。その頃は木炭車と言うのが有って、それの燃料を皆作っていて、家は皆が切ったのを山からして出しておった。俺は無芸大食だし百姓もいくらも無いので、材木を切ったり出いたりしていた。子供の頃馬鹿にされたので、兵隊から帰ったら炭焼きだけはやらんと思っていた。それで山師に入ったが、だいたい山師なんてわがままで気分の悪いやつが人と付き合いできんで、そういうやつが山師やっとるだ。

木馬（きんま）を使った仕事は三十年代までだな、木馬は木の橇（そり）で幅一メートル長さ三メートルくらい、その橇に丸太を自分の背丈より高く積んで縄で曳く、木馬道（きんまみち）っていう木を並べた道を作って山から木を下ろすんだ。

木が少なきゃ木馬道は弱い道を作るが、多いと木馬に三立米くらいは積むで、巾四尺（約一、二メートル）以上の立派な

道が要った。木馬に沢山積んで二杯曳いて行くと昔のトラックに一杯になった。
木馬で谷を渡るには桟橋を作るんだが、狭い所は全部掘って道を作るのはえらいもんで、片桟といって片側だけ乗せる桟橋を作るわけだ。道は盤木を並べてあるが、同じ高さだとカーブが切れん、そいで、カーブを切る所は一本高くしておく、梶棒でグーッと切るんだが一寸高くして、そこに乗った時に切ると抵抗が少ないので回る。ぐりっと回るときなんかは高い木を何本かならべて乗った時分に、一気に回る。素人が作った道と、自分たちが敷いて作った道とじゃ違って、素人が作った道だとこの道は引きにくいと言う道もあった。
重い物を運ぶから桟橋に支えの柱を立てるんだが、下に石でもあればいいが弱いと重くてもぐってしまう訳だ、何か充て板をつくらないかん。弱いと木馬が外れてしまうような事故もあった。
女房に後で押させるんだが、これ以上出んという力を出さにゃ引っ張れん。木馬引きは二十五ぐらいから三十二、三まで、若い時じゃなきゃやれん。
山の仕事では木馬引きが一番金になったが危険が伴う仕事だ、山の仕事は何時も大変だ。俺はやらなんだけど仲間の中には木馬を引いて足が滑って大怪我したり、亡くなった人もいる。木馬も上がってくるのには、道具やらカスガイを積んだのを引っ張って上がってくるのでこれも随分重くて大変だった。
賀茂の山には多く行ったな、山に小屋を作って木馬を引いた。その頃は歩いて金蔵連の奥の郡有林にいったり、田之尻の奥や阿蔵の学有林を出した事もある。山の小屋は簡単に作って女房も飯炊きをやっとった。頼まれれば木を切って出す、出すって事は、山から落としてきて、木馬道から全部作って受けるだ。俺は切るのは得意じゃないので人に頼んで出すことをする。昭和三十五年くらいまではこの辺にいた。
足助屋敷に木馬を作ったのは去年（平成二十四年）の八月だ、テレビでどこかの博物館にあるのを見て「足助でも見せたいな」と店で話しとったら。常連のお客さんが丸太を寄付してくれたので作った。久々の仕事だったが、体が覚えていてす

ぐに出来た。

昭和三十五年ごろ、その時分からは豊橋にある大きな材木会社が、五千石（一石＝〇、二八平方メートルで　直径三十センチメートル・長さ四メートルの木一本くらい）、一万石と山を買ってくれたので、家を離れ旅に渡る事に成った。

長野県だとか静岡県、滋賀県へ組み立て式の小屋を持ってそれをトラックに積んでは移動した。

セン（木を運ぶ道具）から機械から全部でトラック三杯になった。　静岡なんかは三万石以上あったで、一年以上かかった。滋賀県の山は二回行った。そんな事を十何年やっていた。

店を始めてからは森林組合の仕事をして夏は下刈り、冬は間伐とか伐採だわ。一人じゃできんもんで、五、六人で集まって山に集合、一町歩いくらで請負って、人工（にんく）で割るわけだ。足助の材木屋さんの山も二年くらい入っていて、材木を出いちゃった後、植え込みをやった。まじめにやっとれば一年中仕事がある、山師にはいろんな仕事がある。木馬引きを二十五からやったんで、足が丈夫になったかも知れん、今でも足は丈夫だ。

木馬を使って木材の木出し

喫茶店を始めてから

結婚したのは俺が二十五、阿蔵の生まれの女房が二十歳だった。

昭和四十五年ごろに中学が出来たが、その造成の土砂で前の道とここの間にあった谷が埋められ平らになった。そのころ、

長女が高校ぐらいなるし、あんまり旅に出とってはいかんと思って、旅の仕事を辞めて帰ってきた。足助生コンでしばらく働いたが、給料取りは合わんので辞めた。

四十五年にみんなの勧めで今の店をやりだした。店には山の主人とか奥さんとかが話しをしに集まってくる。気分良くやれば繁盛する。店の名前「のんびり」は長女が「この名前がいい」と付けてくれた。最初ごろ、五十年代には秋は随分はやっただ。あんまり忙しいので、財布を持って立っている観光客に、来てくれなければ良いがと思った事も有ったぐらいだ。

商売と言うのも大変で最初のうちは良かった、なかなか忙しかったけど、観光客がだんだん弁当もって来るようになって、成り立つのは十年くらいかな。

店には人を頼んでいたし、飲食店で男の俺に用は無いだわ、兵隊から帰ってサラリーマンにならんかった、フリーなので役はだいぶやらしてもらったよ。消防から何から、だいぶ奉仕した。

商売もだんだんだめになるので、山の仕事をしたが、一人ではあんまり仕事にならん。人を頼むとそこで一万円取れる

今も奥さんと営んでいる喫茶店　のんびり

のが一万五千円になるんで、親方として五十年からはズーット人を頼んでやっていた。
八十歳まで森林組合に籍があった。八十になってもうアカンと思って辞めた。
振り返って、俺には青春時代が無かったなと思った。しかし、一命を捧げ、九死に一生を得て八十七歳まで生き延びたのは、出征の時の足助八幡宮のご加護の賜物と深く感謝をしています。

【聞き手・深見博子（近岡町）】

信用を第一にみんなで一緒にやり抜けてきて、今がある。

加藤　綾子さん（かとう　あやこ）　足助町

大正十年五月二十日生まれ（九十一歳）

東加茂郡阿摺村小町生まれ。二十歳で菓子職人に嫁ぎ、夫の出征中は義母と留守宅を守る。夫の復員後、本町で老舗菓子店「加東家」を開業。夫亡き後は社長として店を支えた。

阿摺村小町で生まれ育つ

私は、大正十年五月二十日の生まれ。だから九十一歳だわ。九十一歳まで生きるなんていう気はしなかったけれども、毎日毎日、働いている間に、九十一歳まで生きちゃっただな。今、この家に住んでいるのはひ孫を入れて六人だね。子どもは三人いて、長女、長男、そしてこの加東家をやっているのが次男。長女が昭和二十二年、長男が昭和二十三年、次男が昭和二十五年生まれだね。

私が生まれ育ったのは、阿摺村の小町で、子どものないところへ初めて生まれたので、大事にしてもらって育ったらしいんだわ。

小町では、家から学校までが遠くてね。学校は、阿摺北部尋常高等小学校といって、北部は御蔵、中部が大蔵、南部が

新盛尋常高等小学校で運動会などは三校が合同でやったものだった。昭和三年に小学校一年生になって、それからは戦争だわ。昭和六年に、満州事変が始まって、昭和七年に上海の廟行鎮で、爆弾三勇士が爆弾を抱えて鉄条網をくぐった、ということがあってね。私たちも学校で、運動会のダンスの時に三人で組んで、

「廟行鎮の敵の陣、我の友隊　すでに攻む」

と歌いながら、爆弾を抱えて鉄条網に突っ込んでいくというのがあったんだわ。爆弾三勇士は、三人とも九州の人みたいだったな。そんなことが始まりで、昭和十二年に支那事変があって、大東亜戦争になって、若い人がかわいそうなことになったんだよ。食べるものもなくて。

名古屋で三年間、和裁修行

私は小学校の高等科を卒業してから、名古屋の東区高岳に三年間、和裁を習いに行ったんだわ。本当は女学校に行きたかったのだけど、私の下に弟が三人もいて、親が難儀しているのを見ていたから気の毒だと思って、手に職をつけるために和裁を習うことにしたんだわ。名古屋に行くのは今だと、外国へ行くような気持ちだったね。

私が和裁を習ったのは個人の家で、私のほかにも五、六人住み込みの人がいて、通いの人も七、八人いた。下宿先に、金城学院に通っている九州出身の子がいてね。その子の両親は朝鮮に渡って、向こうで先生をしてみえた。私たちの小遣いは三円で、その子の仕送りは三十円だった。それがショックでね。そんなこともあって、高岳から小町に帰ってきた。和裁はもっと習っておけばよかったのだけど。あの頃は、松竹映画の「愛染かつら」が流行っていたな。

私が高岳に行っておったときに、東区の武平町と東新町の間に、今の愛知県庁があった。孫娘に県庁ができた時期を調べてもらったら、昭和十三年ということだった。戦争前だった覚えはあった。市役所の方が先にできていたのは覚えがある。

昭和八年に市役所、昭和十二年に国鉄名古屋駅ができた。当時の名古屋駅は東洋一だという評判だった。それで、名古屋

駅を見に行ったら、駅の前はまだ砂の山で。そんなことを覚えておるな。

戦争中の昭和十九年八月に、学童疎開で高岳小学校の児童がこの近くのお寺に疎開してきていたんだわ。（注1）私はその頃は、結婚して西町に住んでいた。食べ物がない時だったので、空いている土地を開墾してさつまいもを植えて、できたいもは蒸して、干したものを学童疎開で来ていた二、三人の子にあげたら喜んでいた。その子たちは、親と別れて来ているからかわいそうだなと思ってね。どこから来ているのと聞いたら、高岳のことを言うので、これもご縁だなと驚いた。子どもたちの父兄が足助にみえた時には、「ああ〇〇の奥さんだ」などと思うこともあったね。今の時代からは、戦争の事は想像がつかないけど、子どもたちは、学童疎開をしていて疎開先から家に帰っていったら、空襲に遭って死んでしまったということもあったでな。本当に、あの戦争はむごいことだった。

結婚後、夫が出征

私が昭和十五年に結婚した時は、ここの家は西町で下駄や雑貨、ランプの芯となるホヤを扱う店をお義母さんがやっていた。その頃の足助では、電気がなくてランプを使っている地域があったからね。私が生まれた小町（こちょう）では、ランプは使っていなかった。

西町でやっていた店は「加藤商店」といって、お義父さんが生きていた頃は、酒も扱っていた。当時、お義父さんが書いた店の看板が、そこに立てかけてあるよ。今とは字も違う。

夫の正四（まさし）は大正三年生まれで、私より七歳上でね。三歳の時に実母が亡くなって、子どものいなかったここの家にもらわれてきた。正四（まさし）は、菓子職人になりたいと言って、最初は岡崎の「旭軒元直（あさひけんもとなお）」で修行した。

実父は「家に職人を招いて技術を身につけてはどうか」と提案したけど、お義母さんは外に出すことにした。夫は、名古屋や一宮、津島の店を転々として技術を磨いて、昭和十年には、半年ほど東京でケーキ作りの修行もした。お義母さんは、

よくまあ、たった一人の子どもを遠くに修行に出したなと思うよ。

その後、粉専門の問屋さんの紹介で熱田の店で働くようになり、結婚した時は「きよめ餅」で職人をしておった。夫は絵を描くことが上手で、ケーキのデザインなども描いていた。手先が器用で、とにかく研究熱心な人だった。

結婚した翌年の昭和十六年に、夫に召集令状が来たんだわ。その召集令状が来た時というのが、戦争が始まる寸前のことで、夜の十時時分に、今からすぐに役所に来てほしいという電話があって。

その当時、家には電話がなくて、すぐ近くの在所に電話がかかってきて、役所に行ったら、こうこうと電気がついていて、「ご苦労さんですが、これは召集令状です」ということで紙を渡された。それで、「今度の召集は、内緒だから、誰にも言わんでくれ」ということで。

それまでの召集は、八幡さん（足助八幡宮）にみんなが集まって、見送ってもらったけど、今度は内緒だから、軍服を着て来てはいかん、私服で来い、家に帰っても近所にも誰にも召集のことを言ってはいかんということだった。

今回の召集は内地の防空だという話で、夫は、最初は浜松に入隊したわけ。大東亜戦争が始まる前のことで、七月に召集があって、九月か十月には名古屋港の防備になった。そこから、どこか戦地へ行かされることになって、北朝鮮のロシアに近い方にあった羅津（らしん）という港に行ったんだけど、うちは運が悪くて、そこから南方のラバウルへ行ってしまったんだわ。

後になって、戦地から帰ってみえた九久（くぎゅう）の人から、「加藤さんは羅津（らしん）で夏服を着ていたから、きっと南方に行ったと思う」と聞かされて。それからは、音信不通になって、夫がどこに行ったのか全然わからなかった。そうしたら、そのうちに手紙が来るようになって、ラバウルの近くのブーゲンビル島に行ったことがわかった。島に着く時に、魚雷にやられて海に放り出されて、六時間も泳いでいたということだった。夫はその時、二十八歳か二十九歳だったな。

そのうちに、負け戦になってしまって、音信不通にもなってしまって。ブーゲンビル島からラバウルは見えるくらいの距離にあって、ラバウルには兵糧庫（ひょうろうこ）があったんだわ。でも、海を隔てているばかりに、あちらに食べ物があるとわかっていて

も取りに行く事ができなくて。アメリカさんもこんなところにほかっておけば死ぬからということで、こちらばかりに攻めてきたわけ。ブーゲンビル島では、食べ物がなくて餓死した人が多くいたということだった。夫も食うや食わずの状態だったらしい。

戦争中の足助の様子

私が、はじめて敵の飛行機を見たのは、そこの郵便局のところに、音も無く高い所に二機飛んで来て、ピカッと白く光ったときだった。みんなで、「あれは何かな?」と話していて、後で、名古屋への空襲の偵察に来たB29だったらしいとわかった。敵の飛行機二機が名古屋を初めて空襲したのは、昭和十九年のことだった。飛行機はみな、富士山を目標にして入ってくるから、ここは、通り道だったからね。防空壕も掘ったよ。このあたりだと、飯盛山の近くに掘った。その当時は、男の人は戦争に行ってしまって、残っているのはおじいさんや女や子どもだけだったから、防空壕を掘って、土が落ちて来ないように止めたのはどうやってやったのかなと今でも思うよ。

片道の燃料しかない飛行機に乗って行って、勝てるような相手じゃなかったな。ガソリンがないので、わたしたちも松根油(しょうこんゆ)といってね、松の根を掘って油をとった。そんなものでは追っつかないわね。勤労奉仕で松の割り木を山から下ろしに行ったり。笑い話みたいだけど、竹やり訓練をしたりね。敵が飛行機から、パラシュートで降りてきてひょろひょろしているところを、竹やりで突くようになんて。やれそうにもないことだからね。勝ち目はないわね。

空襲で名古屋城が燃えた時、木造だったから、組んであった大きな木がみな燃えて、その灰がこの辺にも降ってきたことを覚えておる。空襲で燃えたのは、名古屋城だけではなかったけどね。名古屋で一番最初に爆撃を受けたのは、大曽根にあった三菱の工場だったね。その時に、大分やられたね。県庁は焼夷弾(しょういだん)ではどうにもならなかったみたいだけど、多少のことは、修理して今でも使っておるだな。まあ、昔のことだな。

厳しかった義母

夫が戦争に行っている間は、お義母さんが毎晩、毎晩、観音経をお参りしておくれるわけだ。私も二十歳になるかならないかの時で、若くて欲がないもので、一緒にお参りをしている間に眠くなっちゃって。その時分に、お義母さんが使っていた数珠を今でもずっと持っているよ。亡くなった時もお棺には入れてあげなかった。それというのも、この数珠には、どれだけ観音経がつまっているかわからないからという思いからだった。

家の人には、おばあちゃんが死んで、「早く、お棺に数珠を入れてあげりん」という人があるかもしれないけど、「この数珠は家宝だから残しておいて」と言っている。この数珠にはどれだけ功徳がつまっておるかわからん。それくらい、一生懸命に思っておるだわ。だから、何かことがあると「ああ、お願いします」といって、数珠をさすってな。

ここの家はお義父さんが、若死にだったから、お義母さんは一人で、頑張ってみえたから、そりゃ、きついだ。お義父さんが死んだのは、お義母さんが三十四歳の時で、子どもはいなかった。お義母さんの在所である一軒おいた隣には、子どもが五人いてね。大正六年にお母さんが四人の男の子を残して亡くなったの。明治四十年に一番上の子どもが生まれて、次の人が明治四十二年生まれ、三番目の人は死んで、夫が大正三年生まれで、その下に大正五年生まれの人がいた。

お義母さんは「ろく」という人で、夫のお母さんが「ろくさんには子どもがいないから、正四(まさし)をもらってほしい」と遺言をして亡くなったから、在所の子どもをもらって育てた。私もだんだん年をとって、いろいろと思うと、乳飲み子や子どもを四人も置いて死んだ人は、本当にかわいそうだな、死にきれなかっただろうなと思う。だから、善光寺の盆供養には、その人の俗名と、ろくさん、夫の三人の名前を書いて、供養をしてもらっているの。私が生きている間は、供養してあげようと思ってね。

ろくさんは、頭の良い人で、何事もきちんとやらないと気の済まない人だった。「かとうや(加藤商店)の嫁は三日も、もたん」と近所の人が言っている声が、お義母さんの耳にも入っておった。根性のある人だったから、人にそんなことを言われてお

るだから、嫁を出ては行かせんということで、私もえらかったけど、お義母さんの辛抱もえらかったと思う。私は若くて、子どもみたいなものだったから、どちらもえらかった。昔は一度、敷居をまたいで出たら、二度と婚家から出て来てはいけないと言われて嫁に出たものだったからね。

私は在所が百姓家だから、夫が戦争に行っている留守には、いつも米を少しとか、家にあるものを持ってきてくれておった。私が在所にお客に行くと、母親は私のことをわかっているから何か言うと心配するので、えらいということは何も言わなかったよ。でも、何も言わなくても母親にはわかるじゃん。在所にはお祖父さんとお祖母さんもいて、お祖母さんは子どものいない人だったから、「早く帰ってあげないと、お義母さんが一人で気の毒だから」と私を追い帰すようなことを言うわけ。母親は黙っていたけど、私を一晩でも、少しでも長く家に置いておいてやりたいという気持ちがあったんだな。

夫の復員

夫は昭和二十一年の三月二日に、家に帰って来たんだけど、栄養失調でね。その年の確か二月の二十三日頃に、まだ帰って来ない人は、軍部の人が相談に乗ってくれる、という連絡があってね。昭和二十年に、在外邦人引揚げ相談所が開設されて、軍部の人が小学校に出張してきてくれた。

私を入れて三人で相談に行ったんだけど、私以外の二人はマレー半島に行っていて、「ここの人たちは皆、元気で帰って来ますよ」と言われたんだわ。それで、私の番になったら、「ああ、ここは皆、餓死してしまって、一割か一割五分の人しか残っていないから、もう諦めてください」と言われて。

家に帰ってきて、お義母さんに小学校での話をしたんだけど、近所の抱き地蔵さんに伺ったら、お地蔵さんが上がるじゃん。抱き地蔵さんは石でできていて、座布団の上に座っておられる。お地蔵さんに伺いごとをする時には、まず心経を読んで「こういうことがお聞きしたいので教えてください。答えがこうなら上がってください」と言って、お地蔵さんに手を添

える。そうすると、石でできた重いお地蔵さんが座布団から上がるわけ。伺いことをしても、お地蔵さんが座布団から上がらないこともある。その抱き地蔵さんは、学校下のお地蔵さんといって、今でも足助小学校の下にあるよ。

お地蔵さんに伺ってから三日くらいして、横浜で投函された手紙が家に届いて、夫が生きていることがわかった。ブーゲンビル島にいた人は皆、栄養失調だから病院船で帰して、重症の人が第一便で帰って来て、その人に託した手紙が届いたということだった。それから、二、三日して、夫が帰って来たんだけど、痩せていてね、本当にこの人が自分の夫かしらと思ったほどで。

夫は九州の佐世保に着いて、そこから汽車に乗って、名古屋まで来て、甚目寺町の婦人会の人たちが、お風呂を沸かしてくれて、入れてもらって、ＤＤＴという虱用の白い粉を髪の毛が真っ白になるくらい振ってもらって、軍服も新しいものを着せてもらって、帰ってきたんだけど、よく帰って来れたなと思うくらい痩せていてね。だから、「かとうやさん（加藤商店）の息子さんは、帰ってきたけど、亡くなったげな」という噂がたったくらいでね。

このあたりはバス停から近いからいいけど、田舎の方では、バスを降りて家まで歩いて、夜中に家に着いて、戸をどんどん叩いても、家の人が起きなくて、そのうちに表口で死んでいたという話も聞いた。だから、家の人たちの気持ちもたまらんかったと思うね。でも、あんなに痩せてひょろひょろとしていたら死ねちゃうな、とも思ってね。当時は、あちこちで、そんなことがあっただよ。

家でも三月に帰ってきて、すぐに何でも食べさせてはいけないということで、最初のうちは、離乳食みたいなものを食べさせたりした。夫は寿命があって、帰って来れたわけで、それから昭和四十八年に亡くなるまで、頑張ってやってきたわけだけど、本当に涙ながらに話すようなことだったね。

夫は戦争から帰ってきてからは、ブーゲンビル島のことを家で話すことはなかった。東京にいる戦友が「加藤さん、ブーゲンビル島に遺骨収集に行こう」と誘ってくれても、心臓が悪いこともあって、行くことはなかった。

加東家菓子店の誕生

本町の加東家

昭和二十一年の三月に夫が戦地から帰ってきて、その年の八月か九月に、喫茶店を始めるから菓子を作ってもらえないかと訪ねてみえた方があった。とにかく、食料がないので、菓子の材料がない。砂糖もなくてサッカリンしかなかった。それでも、じゃがいもはあっただな。夫は職人で一刻な人だったから、じゃがいもを潰したような菓子は作りたくないと最初は断ったけど、どうしてもということで、じゃがいもを使った菓子を作った。

じゃがいもを潰して漉すと真っ白になる。そこに食紅を少し入れて、花の形にすると、見たこともないような生菓子になった。職人として腕は良いからね。菓子の材料を布巾で、ちょこちょこっとひねると、花や鳥の形になる。出来たお菓子を持っていったら、喫茶店のお客さんが喜んでくれて、それで委託販売をすることになった。

そのうち、パンを作ろうかということになって、左官屋さんを呼んでパン窯を作ってもらって、パンができるようになった。その時分は、イースト菌などなかったから、酒種を使っただな。小麦を持って行って製粉所で製粉してもらって、それでパンを作ってうちで売るようになったら、めずらしかったから、みなさん喜んでくれてね。そのうちに、いもでつくった水あめを餡にした最中を作って、今の香嵐渓にあった「香嵐亭」という旅館に卸したりした。

ある時、お客さんが最中をお土産にしたいので、包装してくれと言われた。ところが、包装紙も縛る紐もない。そうしたら、お義母さんが、しべ紙という障子紙に包んだらと言って持ってきてくれた。紐は竹皮を裂いたものを使って、包装して持って行った。お客さんは、「これでいい。これでいい」と喜んでくださったけど、私は情けないな、包装紙になるような

紙がないといかんなと思った。それが、菓子店のはじまり。その時分は売り上げが毎日、二千円くらいあって、忙しくてね。

そうやって作って売ったお菓子の売り上げを資金にして、昭和二十五年にここの家を買って店を始めたんだわ。店をやるには西町より、この本町の方が良いということでここへ越して来て、店の名前も「加藤商店」から『加東家』にした。「加藤」から『加東』にしたのは、「藤」では和菓子店には堅苦しいという理由からだった。『家』は洋菓子店の「不二家」を参考にしてつけた。

店を始めて五年後の昭和三十年には、棟続きのここを買い増しもした。大家さんからも棟続きだから、「加東家さんに買ってもらうのが良い」ということで二度目の購入をして、今の家があるわけだな。

床柱に残る刀傷

ここは江戸時代に建てられた家で、元は造り酒屋の白木屋宗七邸だった。天保七年（一八三六年）には百姓一揆にあって、百姓衆が乗り込んできた。ここの座敷の床柱の刀傷は、その時「米を出せ、金を出せ」と言って、襲ってきた百姓衆が切りつけたものだね。一揆では、西町や本町の酒屋や米屋、紙屋も襲われた。（注2）ここを買った当時、近所に住んでいたおじいさんから、この座敷の天袋には金箔が貼ってあるから采払いをかけてはいかんと教えてもらったから、私は采払いをかけたことはないね。そのおじいさんは、腰紙の貼り方も教え教えてくれた。私は腰紙を貼る事も、障子貼りも、屋根の雨漏りの修理も何でも自分でやったよ。夫は高い所が嫌いな人だったからね。

今、この家のあたりは、足助町並み伝統的建造物群保存地区になっている。ここの茶室は、玄々斉の設計によるもので、京都にある茶室と同じ形の花明窓があり、靴脱ぎ石と敷石の飛び石は鞍馬の石で、水に塗れると赤くなる。今は枯れてしまったけど、庭には白くちなしも植えてあった。

茶室の花明窓

義母、夫の死を乗り越えて

昭和四十年代は、農協の結婚式場ができて、引き出物の生菓子やお祝いの砂糖の準備で忙しかった。夜遅くまで、菓子の箱を数えることもあった。

そんな中、昭和四十八年に夫が急死した。長女は名古屋の保健センターに勤めていて、長男は東京の会社に就職して一年目、次男は一宮の店で三年修行して、家に戻ってきて一年目のことだった。お義母さんのろくさんが一ヶ月の入院後、八一歳で亡くなって、わずか一〇五日か一一〇日後のことだったから、近所の人からは「あんたは運の悪い人だね。あの気難しいおばあさんに仕えて、おばあさんを見送ってやれやれしたと思ったら、すぐに旦那が逝ってしまうなんて」と言われたこともあった。いろいろ知っている人には、そう思えたかもしれないけど仕方ないな。

お義母さんはすごい信仰家だったから、いろいろとたいへんだったよ。「正四(まさし)が戦地から帰って来なかったら、仏門に入ろうと思っていた。子どもがいない嫁さんを家に置いておくわけにはいかないから」と口にしたこともあった。厳しい人だったね。それでも、あのお義母さんに仕えたから、今の私があるのかなとも思う。二人でいる時など、水を一杯飲むのも、遠慮したくらいだったからね。

夫が亡くなった日は、お義母さんのお骨収めをするために永平寺に出かける予定だった。家では毎年、六月に店の従業員の慰安旅行をしていた。慰安旅行も兼ねて、お骨収めに出かけようとバス停に向かう前、少し時間があったので、私は仏間を掃いていた。夫は普段、私に優しい言葉をかけるような人ではなかったのに、その日は「何だ、お前は、まだそんなことをしているのか。お前はいつも働きすぎるから、肥えれんだかや」と労ってくれて、それが最後の言葉になった。それまで、そんなことを言われたことはなかったからね。その時は死ぬなんて思わなかったけど、最後に私を労ってくれたんだな。

私たちは午前七時十分のバスに乗る予定で、心臓が悪い夫は、急がなくてもいいようにと、私より一足先に家を出ていった。バス停で、お義母さんのお骨を横に置いてバスを待っている間に、夫は心臓発作であっけなく亡くなってしまった。亡

くなったのがバスや電車に乗る前だったのは、お義母さんが守っていてくれたからかなと思う。

名古屋に勤めに出ていた娘は、六時三十分のバスに乗って出かけていった後のことで、連絡したら職場に着いてすぐ、タクシーで帰ってきた。娘が保健センターに行き始めた頃、心臓の良い先生がいるからということで、夫を診てもらったことがある。娘は医者から、お父さんは家で何をしているのかと聞かれて、仕事をしていると答えたら、「あの心臓で、よく仕事をしているな」と医者がびっくりするくらい心臓が肥大していた。すでに、パンクするような心臓だったみたいだね。亡くなった時は、数えの六十歳だった。

それから、店をやっていくのは大変だった。菓子を作る技術は、次男が修行から帰ってきたら家で教えればよいと思っていた矢先にお父さんが亡くなってしまったからね。職人さんは、昭和三十四年の伊勢湾台風の年に中学を卒業して入ってくれたトシさんという人と、昭和三十九年と昭和四十年に入ったパートのおばさんと、昭和四十六年に入った人が二人いてくれた。この人たちは、夫が亡くなってからもずっと長くおっておくれた。パートで来てくれていた近所の人たちも、奥さんが一人では気の毒だからと、夜遅くまで菓子箱を包むのを手伝ってくれたりした。みんなよく働く衆で、よく働いてくれた。みんなで一緒にやり抜けてきて、今があるということだね。

夫は生前、トシさんの結婚のことを気にかけていたから、私がお嫁さんを取り持って、昭和四十九年に結婚式をした。それからは、昭和五十年に長男、昭和五十一年に長女、昭和五十二年に次男と三年続けて結婚式があった。その間には、一周忌や三回忌の法事があり、孫の誕生が続いたりして、身動きが取れないくらい忙しい時期があった。

夫が亡くなった後、私は社長にならざるを得なくなって、店は信用第一でやってきたけど、よくやってこれたなと思う。おかげがあって、こんなに痩せていても、病気もしなかったのは有難いことだった。平成五年に名義変更をするまでは、私も店の仕事をしていた。

現在の加東家（かとうや）

昔の事を思うと、今では足助も人通りが少ないもんね。昔のことを知っている身からすると寂しいよ。今、店をやっている孫は東京で菓子の学校に二年、行ったんだわ。学校を出てから、個人の店の和菓子屋さんに四年おって、それから、洋菓子屋さんに一年おったんだわ。孫は東京へ行く時に、夫が戦地で作った箸を持って行ったんだわ。

うちの夫は、ブーゲンビル島に行っている間に、たぶん捕虜になって食べ物をもらうようになってからのことだと思うけど、檳榔樹（びんろうじゅ）という堅い木で作った箸を使っていた。箸は戦争から帰ってきてから、ずっと、しまってあった。

孫が小学五年生になった頃のことだと思うけど、男の子だから、戦争の話をすると喜んで聞いていてね。おじいさんが戦争に行っている間に向こうで作ってきた箸だというと、「これ、ぼくが使ってご飯を食べてもいいか」と聞いてきた。「いいよ。この箸でご飯を食べて、一生懸命勉強しておじいさんのように立派な人になってくれたらいいよ」と言って、家でその箸を使ってご飯を食べさせていたら、東京の学校へ行く時もその箸を持っていった。

檳榔樹で作られた箸

箸は東京へ持って行ったけれど、家に持って帰ってくることはないと思っていたら、持って帰って来たでね。片方がよく減っているけど、未だにご飯を食べている。よく持って帰ってきたな、感心だなと思う。

革表紙の帳面　「應宝惠」

先日、テレビの取材で昔のものを探していたら、夫が「應宝惠（おぼえ）」として、大事にしていた革の表紙の帳面が出てきた。東京でケーキの修行をしていた頃に、学校で習ったことを書いたもので、菓子の材料や器具の使い方が小さな字で障子紙に丁寧に書いてある。配合はその都度違うから、上に上にと何度も書きかえた障子紙が幾重にも貼り重ねてある。この帳面は、「火事があったら、何が何でもこれだけは持って出せ」と言って、非常持ち出し袋に入れてあった。帳面を孫に見せて、「おじいさんはこのくらい熱心にやっていたんだよ」と話した。まあ、虎の巻だな。

夫はテレビを見ていても、配合など「はっ」と思いつくことがあるとすぐに書きとめていた。器用な人で色付けにもこだわって、とても難しい人だった。和菓子は見て味わって、食べて味わう。見たときに「あっ、おいしそうだな」と思えるものでないといかん。このお菓子には、この器というものもある。たとえば、「光琳（こうりん）の菊」という名前のお菓子では、菊か梅か判じることができるようなものを作らないといかん。尾形光琳（おがたこうりん）が描いた菊のように見えないといかんということだね。

今、孫は和菓子なども新しいものをつくると私に見せにくるし、「お菓子の名前は何にしたらいいか」と相談にも来る。新しいものを作ったときには、仏壇に飾っておいても言うし、そういうことをやってくれるからいいかなと思う。孫に言いたいことは、「正直に。人には親切に。人に信用してもらえないような人になってはいかん」ということだね。店をやっていくには、信用と信頼が大事だからね。悪いことをしたら悪いことが廻ってくる。

お店をやるについて、夫が生前、帳面に書き写していた格言が五十くらいあった。その中のひとつに、「言うは水に描く聞くは石に刻む」というのがある。言う人は水に描くように、何気なく言う。聞いた人は石に刻むように、決して忘れない、そんなふうに受けとめる人もあるということだね。いい言葉だと思う。

私は自分でやるべきことは、やったと思っているからね。後は、何事もなく具合よく暮らしていけるようにやっていってくれれば有難い。本当にいろいろとあっただよ。

【聞き手・鈴木明美（越戸町）】

（注1）学童疎開・・・名古屋市では昭和九年八月に、国民学校初等科在学中の学童が愛知県・岐阜県・三重県に集団疎開し、東区の高岳国民学校の学童二七五人は東加茂郡足助町（当時）に疎開した。
「戦争に関する資料調査委員会（愛知県・名古屋市）インターネット戦争資料展
http://www.pref.aichi.jp//kennmin-soumu/chosakai/kuusyu/kuusyu.html

（注2）加茂一揆・・・天保七年（一八三六）九月二一日から五日間にわたった百姓一揆。足助地区では、九月二三日に商家が打ち壊しにあった。一揆衆が打ち壊したのは、西町の造り酒屋・山田屋与茂八宅、穀屋・木市屋仁兵衛宅、本町の紙屋・鈴木利兵衛宅家、酒屋・上田屋善左衛門宅、造り酒屋・白木屋宗七宅である。一揆衆は二五日に岡崎藩兵に鎮圧された。『図説　豊田・加茂の歴史＜上巻＞』参照

山ノ中立で生き続ける

内藤　剛（つよし）さん　山ノ中立町

昭和九年八月十八日生まれ（七十九歳）

山ノ中立生まれ。この家で育ち、家を継ぎ、現在もここに暮らす。中学校を卒業後、家業の田畑作業や炭焼きなどを手伝う。途中トヨタ自動車期間工になるが、一期でやめ、その後は、森林組合の労務班などをやりながら暮らしてきた。

山ノ中立に生まれた

俺んちの親父は金沢村っちゅうとこ、今でいう大見連区と御内だね、そこで職員みたいなことをやっとったらしい。親父は春時分が一番忙しかったらしく、仕事で半月や一か月くらい泊まり込んで予算やらくんでおって、春だと農作業の準備やらんといかんし、父親が留守しとって、長男もおらんし、俺らは小さいし、母親は難儀をしたらしいよ。

戦争時分の食べ物

三年生から五年生くらいの時分が戦争中だったかな。幸いに俺んとこは、田畑があったもんで、なんとか食べれとっただ。でも、戦時中は、節約、節約で、贅沢は敵だっちゅうことだったもんで、まずかったぞ、そりゃ。でも、まあ、腹がふくれ

りゃよかっただ。

畑じゃ、かぼちゃとか、サツマイモとか大豆とかつくれたね。その時分はうまいまずいよりも大量にとれるものをつくったでね。サツマイモはふかし芋とか、ご飯の中へも四角に切って入れて食べただ。そりゃあ、ばかに好きじゃなかったな。大豆をうでて（茹でて）、ご飯の代わりの嵩ましに入れたりね。あとは、木の芽を食ったね。「りょうぶ」っていう、サルスベリに似た木の肌でね、その芽が柔らかくて、匂いもなくて、いいほうだったがね。それから、「ふしぐろ」とかいう名前だと思ったがな、これも芽を食べとった。味もそっけもないような葉っぱだったけど。あとは、「タラ」の芽とか「とうだい」の芽とかあっただかもしれんが、あんまり覚えがないね。てんぷらにあげるとか、知恵がなかっただね。てんぷらなんて当時はなかったな。油がなかっただ。いっぺん、うでて、水を捨てちゃって、そうやっちゃあ、なんでも食べとった。灰汁をぬくだね。味噌汁の中に入れたり、おしたしだね。サツマイモの葉っぱは今でも食べる人もあるだけど、あれはおいしかったね。うまいとこ煮て、炒ったのはごちそうだったね。

通学のお楽しみ

通学路に松林があってね、マツタケがよく出よってね。毎朝、マツタケを採っちゃあ学校に行きよった。毎日採るだけど、なくならんかっただな。中には大きなマツタケを採るやつがおってね。筆箱の中に入れてふたきせて、学校にもっていっちゃあ、得意になって。学校におる間はカバンの中に入れて隠しといて、家にもってきたんだよね。晩方は採れんちゅうことだもんで、朝に採っただね。学校はいい匂いがしたとおもうが、昔の先生はなんとも言わなんだ。

帰りは同じ道をまともに帰ってこなんだ。近回りっていっとったが、急なところを飛び降りちゃあ歩いていったもんで、道になっちゃっとるだ。こんなようなとこばっか通って、遊びながら帰ったもんだ。

まあちょっと大きくなってからはね、わざわざ県道のほうを回って帰ってくると、御内の金蔵連の奥に郡有林があってね、

いまじゃあ県有林かな。名古屋貨物って名古屋からくるトラックがそこから材木を載せちゃあいくだ。地道だもんで、グウグウ、かなり下のほうからくるでも音がするだね。すごいスピードで走ってくるわけじゃないだ。おれらがこっちで待っとって、トラックが来ると後ろへ飛び乗るだった。一年生でも二年生でも、ぶら下がって遊ぶのが楽しみだった。運転手はなんも言わんかったし。手が外れて転んで怪我したような子もおったが、トラックはスピード出せえへんし、たいした怪我にもならんかった。トラックはガソリン車で、そのガソリンを燃やす匂いがほんといい匂いだった。

毎日、毎日、手伝い・・・・

みんな手伝いだわ。嫌だったね。妹や弟が小さいころは子守(こもり)をやるだった。九つか十くらいのときだもんで、連れと遊びたくてしょうがないじゃんね。川遊びやグミ採りとか。だけど、子がおると、みんなと一緒に遊べんもんで、泣いてもわめいてもほかっといて遊んどった。ほしたら、親に「守(も)りをしろ、守りをしろ」って言われ、いやおうなしに子をおぶせられて帯で縛りつけられて、半泣きになって遊びに行くもんだった。

畑と田んぼも手伝っとった。昔は道がないもんで、田んぼから何を寄せるにも、背負子(しょいこ)に全部しょってあがってこないかん。背負子に稲とか全部「たねる」っていって縛り付けるだけどに、うまくようやらんだ、子どもだもんで。親が縛ってしょわせてくれる。小さい時から、しょっちゅう重い荷物しょわされてやったでね。ほいだもんで、背がひとならんだった（人並みに大きくならなかった）。

小学校のうちは、朝起きて、まず掃除をやるが毎日の日課だった。朝は早かっ

自宅から見る夕日は絶景

たね、暗いうちに起きるだったね。掃いて、ぞうきんをかけて、ほれから、朝ご飯食べて、支度して学校に行ったっちゅう毎日だった。三十分や一時間くらいはかかっとったよ。毎日やっとるうちに癖になっちゃった。

中学に入ると違う仕事。牛を飼っとったもんで、牛にエサやったり。いつも二頭はおりよったね。雌の牛に種をつけちゃあ子を産ませて、その子を売るのが現金収入だったもんね。休みのときは、牛屋の掃除。きれいにしたところに敷き藁を投げ入れて、中に敷き詰めるだ。そこで牛がおるもんで、敷き藁とフンと混ざっちゃって。日が経つにつれてだんだん、だんだん、だんだんたまっちゃって、牛が上にあがっちゃって。そうなると、親が「まやごい」ちゅって、まや（馬屋）の肥えっちゅう意味だと思うけどがね、それを牛屋から出す。牛屋の後ろに、そういうもんを積むとこがあってね。そこへ運び出す、その仕事をかなりやったね。一週間でやりゃあきれいだったけど、もっとためとったよ。牛はフンと小便と一緒のとこへやるもんで、くちゃくちゃになるだ。まあ、臭かったでなあ。ほいで、この「まやごえ」は田んぼに運ぶだったよ。

中学になってからはお蚕も手伝ったな。春蚕（はるこ）と秋蚕（しゅうこ）と二回飼っとった。桑摘みは毎朝やるだったね。桑畑まではうちから五、六分くらい。朝摘んでくりゃ、一日もつ。一回背負子で運べばすんだ。俺一人じゃないもんね、家族みんなで摘んだもんね。大きな籠をしょってって、いっぱい摘んで帰ってきて、うちにいっぱい広げるだ。早く広げんと乾かんもんで。濡れたやつをお蚕にやっちゃいかんちゅうて。朝は露がついとるでね。とにかく、一晩中お蚕が桑の葉を食っとるもんね。朝になるとエサがないもんだ、急いでやっとっただ。人間様の寝るとこがないくらいね、どの部屋もお蚕さんだった。柱に段々をつくってね。ざるをさいて、お蚕を置いて、葉っぱを並べておくと、ザッザッって、ものすごい音がするだ。葉を食べる。それも慣れちゃうだね。

貴重な水

どうしてあんなに洗わなんだなあと思うだけど。食器なんてめったに洗うじゃなかった。拭きもせんよ。膳箱ってね、

三十センチ四方くらいの箱があって、ふたがきさるようになって、自分のご飯茶碗とお椀に箸と、そこに入れて、ふたきせてしまって。また次に食べるときには、それをそのまま出いて、食べて、しまって。洗うじゃないだもんね。まあいいとこ、ご飯が終わったら、茶碗にお茶入れてかきまいて、飲んで米粒が残らんようにしたくらい。お椀の淵なんか洗らわんもんで、味噌みたいなもんがコテコテになってたまっちゃった。ほれでもめったに洗わへん。結局、水がなかったもんね、ここの洞は。ひとつ井戸があって、今でも使っとるだけど、手押しポンプでくみあげるだもんね。流し台の横に、バケツに溜めておいて、柄杓で汲んで使う。ここはてっぺんだもんで、上から落ちてくる水がないだもんでね。ほいでも、中学時分だったかな、流し台と井戸の間に親父が、五十センチくらいの深さの水槽を高いとこに上げて、押上げポンプで水を水槽に入れといて、水槽からパイプ通して、今の水道みたいに流れるようにした。それは本当に楽だ、流れ水で洗えるもんね。だけど、この流し台と水槽は屋根の下だったけど、ふきっさらしのようなところにあったもんで、冬は井戸は凍らんけど、水槽から出る部分とかが凍るだ。ほうすると、柄杓で叩いて氷を砕いたもんで、柄杓がボコボコになっちゃった。

お風呂も毎晩なんて絶対に沸かせなんだ。あふれちゃもったいない。熱くてもなんでも我慢して入らないかん。大きな割木をどんどんくべるだけど、煙たくて煙たくてね。雪が降りゃ、雪をバケツにすくっちゃあ、入れて。雪なん、熱っついときにいっくら入れても冷べたなあへんだよ。水分がすけないのかな、鍋やなん入れてね、水をつくろうとして下から火をたいても量はないだ。

山ノ中立のお祭り

「おかたおくり」ってのがあってね。「おかた」はどういう字だかわからん。晩方、村に人が集まって。今度はこのうちでとか回り番みたいだったかな、いろんなうちに行った覚えがある。小麦の殻で人形を作る人がおって、わら人形みたいなやつだね。それと馬みたいなやつもあったね。人形を竹の先っぽにさいて、しばりつけたり、くすげるだね。全部で十体

くらいだったじゃないかな。

もういっぽうじゃあ、小麦を炒って、臼で挽いて、「こうせん」を作るだ。今でも「こうせん」って売っとるだ。麦の粉を炒ってすって、粉になったやつに湯を入れて、かき混ぜて砂糖入れてね。香ばしい味がするでね。それは「病気をぼい出す」って、厄払い。通学路の途中に納めるところがあってね、それを立ててくるだね。そこじゃなんにもお祭りみたいなことはないけど、帰ってきて、「こうせん」を食べさせてくれて。みんなそろって「こうせん」を食べるが楽しみだった。俺が小学校の低学年のころだな。やめになっっちゃった。いろんな行事がやめになっちゃっただ。

大人になったからだと、ご祭典ぐらい。もっとずっと前だけど、ここに明治神宮なんて石碑があるところがあるだ。ご祭典の日に神官さんがお参りにいかれよったよ。くろい下駄みたいなやつをはいて、山へあがっていって、おがんでおくれよったが、それもいつのまにかやめになっちゃった。

石碑はいまでもたっとる、どうかせると見に行く人もいる。りっぱな石碑があるにはあるだよ。

お酒が飲めるようになったら、よったような話ばっかりしておもしろかったなあ。

トヨタ自動車の期間工に行く

トヨタ自動車が残業が増えだいて、景気がよくなって、従業員がそれぞれ働いて車を買う時代になってきたときに、期間工ちゅうのを募集した時があってね。何月から何月までってね。どえらい募集してね、新潟だか、山形だか、あっちのほうからも募集したときがあった。ほいで、稲の収穫が終わった十一月ごろかな、この大見連区にもそういう話があって、大見の集会所に集まれって、そこへ希望者が集まってね。トヨタ自動車がジュースだか、まんじゅうだか、えらいこと持ってきてね。ものすごいサービス。いい話ばっかやって、みんなで行くっちゅうことに決めて。俺が三十二、三歳くらいのときかな。金も欲しかったしね。親父と一緒じゃない仕事ができるのも楽しみだった。大見、葛沢、有洞とか十人くらいあったがな。

通うに、大見小学校まではマイクロバスが来たでね。ほいだけど、そこまでは歩いてかないかんもんでね。早番が八時から始まっただかな。ここを五時には出にゃいかんかった。五時半か六時くらいにマイクロバスが来とる。それに乗って、行くだった。二時か三時には終わったじゃないかな。遅番はね、ここを十一時半か十二時ごろに出るだった。ほいで、夜の十時か十一時ごろまでやっただったかな。夜十時までやって帰ってくると夜中ぐらいになっちゃう。今じゃあ暗くなっちゃあ、おそがくて（怖くて）一人じゃ行かんけど。途中に家のお墓がありゃがってね、そこを通るのがおそがくてね。後ろを見返っちゃあ駆け足で来るだった。

トヨタ自動車の仕事

足回りっちゅってね、車輪をはめてくれたやつに、ピンを刺すだけの仕事だった。車輪をはずすときに、中心に緩まんようにネジがはめてある。それがラインで流れる作業だったもんで、動いてくだ。何秒だかの速さで。二メートルくらいの長さの間にやっちまわにゃいかんだけど、それがずれてね。自分のエリアから向こうにいっちゃいかんだ。ほいで、出そうになると班長がきてね、手伝ってくれたりね。自分でこりゃいかんってなったら、ボタンを押せっちゅうことになっとっただけど、ボタンを押すと班長の減点になっちゃうだ。小言いいよっただ。ほや、厳しかったよ。初めてやることで、一応、説明は聞くけど、ベテランの衆がおるもんで、教えてもらったり。

ずっと毎日同じ仕事。早番の時はお昼くらいに終わって、そこから残業が二時間くらいあって。その残業は、その仕事から解放されて、部品やら製品が足元にいっぱい散らかっとるもんで、それを拾って、その選別をやる仕事だった。眠たくて眠たくてね。たるいような仕事だったもんね、あの眠さをこらえるが辛かった。ラインは眠たくない、真剣だったもんね。遅れちゃいかんし。

あくる年の三月くらいでやめちゃった。百姓せにゃいかんかったし、親があったし。期間工をそのまま続けとって正社員

になった人もおった。ほういう人は、今、厚生年金があって楽できる。おらはやめちゃっただ。続けとったらよかったが、新たに期間工の募集はなかったな。十人の半分くらいは続けとったと思うが、やめた人が多かったよ。

やっぱり山で生きる

トヨタの期間工をやる前は、日雇いみたいな仕事をちょこちょこやっとっただ。ここの村に住んどった人が大見発電所の水路番をやっとって、家族で発電所のそばの社宅に住んでおられた。「仕事に出んか」って言われて、一日いくらだったかな、三百円くらいかな。そりゃあ親から離れて仕事がやれたもんで、楽しかったわ。親やなんと炭焼きやるの、ほんとたるかった。しょっちゅう一緒だし、昔話ばっかだもんで。

ここは電気がつくのが早かっただよ。明治四十何年じゃないかな。ダムから発電所まで水を送るのに、山にトンネルを掘って通しとっただ。でも山から出ちゃって谷になると、向かいの山まで十キロくらい「はことよ」ってのでつなげとった。木の箱みたいで、板で合わせて箱にしてあるもんで隙間ができるだ。「まきはだ」ってね、杉の木の皮と幹の間に薄い皮をひもにしてあって、それを隙間に挟み込ませて、木づちでとんとんたたいて、隙間をふざぐっちゅうもんだ。トンネルの中はコンクリの「とよ」にひびが入って途中で漏れる。左官のようにひびにコンクリ塗るだ。トンネルっても、今みたいに天井をコンクリで固めてないもんで、ところどころ岩が突き出しとって危なかったよ。

それから、トヨタ辞めて田植えとか終わった六、七月ころだったかな、森林組合の労務班に入った。この村の人が労務班で働いておって、入らんかって言われて。ほれからずっと労務班で七十一か二くらいまでは籍をおいておった。

仕事は下刈りが主だったね。造林公社ってのができて、個人の山を借りるだね、六十年だか七十年で。借りてる最中に雑木を切って植林して手入れをする。植林した木が大きくなったら、伐採して造林公社が売るだ。その売れたお金の三分七分とかで地主に金が入ってくる。だから、山を植林する仕事も多くなってね。植林をすれば、必ず雑草が生えるもんで、仕事

が増えてくる。そういう仕事を女房とやっとっただよ。枝打ちをやったり、間伐をやったりね。ほいでも、個人に仕事をまわしてくれて、責任持たせてくれたもんで、のんびりやったわね。面積でね、一山一町分とか二町分とかを、いくらでやれって。それを自分で十日でやろうが十五日でやろうがいいもんで、自分で計画してやれた。その山が終わりゃあ、やれやれって、どっか遊びに行くかって、のんびりやったね。

雨が降っても出てくだったよ。朝、雨が降ってて出ていくのはやだったね。カッパ着て出てくだがね。途中で雨が降ってくるのは、雷がおそがくてね。どえらい音がするだよ。うちの奥のほうは山が高いし、刈り払い機は金属でだもんで、違うほうへ機械をおいて、雷がおさまるまで待っとって。雨がやみゃあ、また晩までやってきてね。

金蔵連の奥に国有林があってね、三町近くあった山も一人でやった。熊が出るって騒いどった時期だもんでね、怖いもんで、飼っとった犬を連れていっただ。一人で犬を連れて、朝早く六時くらいから行ったよ。下刈りは夏だもんでね、早く夜が明けるもんでね。ふんとうに、あの犬は俺の相棒だった。去年の正月に認知症みたいになっちゃって、死んじゃった。十六年か十七年。目は見えん、体はよぼよぼになちゃって、叫ぶようになっちゃってね。こりゃいかん、認知症だねなんて、初めてだったね。こりゃ、やっとじゃないなといっとったら、とうとう死んじゃった。どこに行くでも連れて歩いとったもんで。さびしかったな。

飲み仲間

この大見連区なん、酒飲みがいっぱいおった。大黒屋（安実京町）で仕事の帰りに一杯酒を飲んでね。ほすると、だんだん気分がよくなって気が大きくなって、「やあ、俺んとこへいじゃ（行こう）」「お前んとこへいじゃ」とか言いよって、三人も四人も連れて家にあがりこんだもんだ、酒一升瓶かかえてね。ほんだもんで、奥さんたちは大変だったね。ほや、急に入ってくるだもんでね。なんか酒の肴つくらないかんし、来る奴は酔っぱらいだもんで、遠慮もありゃへんだ。俺も、よそ

へよう行ったよ。うちへも連れて来たしね。夜中十二時ごろに電話があって、来いっちゅうだら、葛沢の近所でね。「じゃあ、こっちから行くわ」って言って。こんなん遅くなってから家に来られちゃかなわんでね。行くには俺一人で行けるだけども、来られちゃ、ばあさんまで巻き添えをくらうもんでね。そんなことが何年も何年も続いただよ。大見へも何べんも何べんも行って、迷惑かけただね。まあ、お互い様だけどね。おもしろいっちゃあ、そんなことだったな。

山ノ中立

集会所はこの村で一番いいところだ、あったかくて。けど、集まる機会は作らんとない。この村の衆は親の代からずっと酒を飲む。何か集まると必ず飲むだ。ご祭典でも三升くらい飲んだことがあった。寄合の後には必ず酒を飲むだった。「まあ、ちょっと一杯やれ」なんて始まって。飲みよったもんね。それもいつごろか人が減っちゃったもんで、夜じゃなくて昼間にやるようになって。それもいつごろか昼間もやれんくなっちゃった。三人くらいしか集まらへんし。活気がなくなっちゃってね。それと、あかんね、人間、連れがおらんと、相談する人がないと。八十七、八くらいだったかな。二人おって、ほの人たちがこの村を仕切っとった。頭のいい人で、なんでもやれる利口な人だった。その人が死ぬなんちゅうことはちっとも思わなんだ。利口な衆が死ぬなんてこと考えたことなかったもんで、なんにも、重要なこと聞いとかなんだ。その人が死んでからがっくりこいちゃって。俺も相談する人がおらんもんで、どだいさびしくなっちゃってね。ほんとたるいわ。何にもやる気がおこらんだ。まあ、しょうがないだな。

淡い思い出

恋愛したこたないね。一目惚れは大分したけどな。向こうから惚れられた経験がないだ。おとなしかった、俺ね。娘に声なんかけれんだ。まゆを売る日は決まっとったもんでね。大きな籠を背負子にしょって。今の足助の金融のところに、もの

すごい大きい倉庫があってそこへもってって。若いもんで、娘に見られるのが恥ずかしかった、嫌だったぞん。ま、そりゃ、青春時代はそんなようなことで終わっちゃっただよ。

でも、一度だけね、娘の手を握ったことがあっただ。中学卒業して青年団に入ったとこで、青年団の集まりの後に西盛座へ映画を見に行くだった。西盛座ってのは、川安のしもあたり、金原さんのあたりにあった映画館。そこで暗いとこに立って見とった。多少は横の人が見えるくらいの暗さだった。俺の横すれすれくらいのところに娘がおって。娘のほうが、度胸がよかったと思うが、手と手が触れるように近づいてきて。俺は、ほれでもよう握らへんかった。ほいでも、最後は思い切って手を握った。どこの子だか、まったくわからん。こっちゃあ、体がカチカチになって、冷や汗がでて、えらいこと。それが初めてで最後。

やっぱり　おっかあ

昭和三十三年三月に結婚した。おっかあは下山の梨野からもらった。前の年の十一月ごろだったと思うが、「いい娘がおるで見に行く」って、母親に連れてってもらっただ。見合いだわね。しばらく親ばっかりしゃべっとって、娘やなん、しゃべれへん。「おまんたあ、ほいでも、二人でうちの前の道路をあっちのほうくらい、行って来いや」なんて言われたけど、娘も行くとも言わんし、俺も行くとも言わんし。そのまま。まあ、返事は後ってことで、帰ってきちゃった。「まあ、いいわ」って返事が来て、ほれで結婚したようなことだな。

この人とは手を握ったことがないでね。三尺遅れてついて来るっちゅう時代だったもんで、男より先に歩くいなんてことない。新婚時代なん、どっこも行けなんだ。新婚旅行もありゃせんし。たきぎ拾いばっかだった。でも、下の子が小さいうちは内職やっとったことがあるね。足助の床屋さんがおもちゃのような内職をやったり、タックインとかいうのをひとつつけて一円とか二円とかいう工賃でやらせてくれて、なかなか何年もやっとった。女の人は偉いもんで、コツコツと何万円も

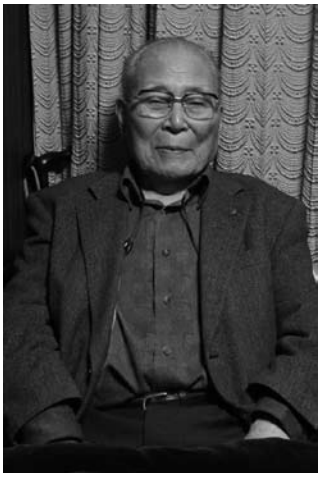
貯めちゃって、自分に使わんで子どものものを買っちゃあやって。

昼も夜も一緒。森林組合の仕事はこの人と二人でやってきた。若い人は、夫婦が離れて仕事しとるだら。俺は、離れて仕事したことないもんで、安気しておれんで心配。この人は山仕事いくときにも、必ず道を間違えちゃう人だよ。お前、先歩けっていくだけど、必ず道が違うほうへいっちゃう。あの世へいくとき、道を間違えていっちゃへんかと思って、心配だわ。

【聞き手・井上美知代（畝部東町）】

夫婦で仲良くいつまでも

志と想いを暖めて



成瀬　義秋さん　（なるせ　よしあき）　富岡町

大正八年五月二十九日生まれ　（九十三歳）

旧足助町林間（りんま）（豊田市富岡町）に生まれ育つ。阿摺村村立青年学校卒業後、陸軍騎兵第二十六連隊入隊、支那事変、大東亜戦参加、満期除隊。足助に戻ってからは青年学校に奉職後、木材業をやりながら、各種団体役員、足助町の議会議員を二期、文化財保護審議会委員長、文化協会副会長を務める。二十五歳で結婚。三人の子供に恵まれる。昭和五十年から史跡研究会・全国成瀬会の副会長として活動。趣味はカメラ。

北支那へ

昭和十五年一月十日に林間（りんま）を出て、現地入隊で北支那へ行きましてね。ほの頃は親兄弟はお父さんの仕事で安城におって、お祖父さん、お祖母さんと暮らしておった。旗立てて地域をあげてね、足助八幡宮さんまでみんな送ってくれて、八幡宮さんで参ってお別れする。ほういうしきたりだったもん。あれは大変なことだったけど、めでたいめでたいでね。二十歳になると、全国民が徴兵検査受けて奉仕で行くわけだ。

騎兵だったが、馬に乗るのは初めてだったね。わしんたちの時分、馬は《一人前になるのに千鞍》って言いおった。千鞍っちゅうと三年だね。三年乗って一人前ってくらいだったけんね。はじめ三ヶ月間ね、初年兵教育っちゅって教育受けると、大体馬に乗って行動ができるっちゅうことで作戦にも出て行くようになるだ。

南方とは違う

南方の方へ行った人やなん、魚雷で船がボコボコのようだが、わしんたちは戦地でもそういう状況とは大変中身が違う。南方の話とはかけ離れとるわ。

日本軍は、地域を良くしてやる為に行ったと思ってる。集落へ入場した時は、中国人が日本の日の丸の旗を振って迎えてくれて、歓迎されとる。当時中国は四つも五つも武装集団がおって、中国同士でも戦うだ。日本軍が入った方が安全になっただね。ほいで住民と日本軍とは非常にうまくいっとる。わしんたち部隊で働く住民は非常にいいわけ。食べ物に困らん。馬がこぼした食べ物を箒で集めて家に持っていくのが報酬だったからね。ほれと馬糞。肥も何にもないから、厩や日本軍が通った後の道路に落ちとると篭やわっぱの一輪車で持っていった。ほいだから、働きたい住民は多かったが、無性には入れられん。スパイ的な人間もおるもんだい、油断はできない。

支那にて　若き頃の成瀬さん

兵隊さんは当時、国をあげての軍国主義だったで、日本は物凄く強いと思っとる。装備も中国より日本軍のほうが優れとる。戦闘やっても、わしんたちの方が強いわけね。そういう中で兵隊行った人たちは、みんな勇敢に支那の土地では戦争やったわけ。ほれは厳しい戦闘もやって、わしも馬に乗りながら首切りやっただよ。

自分が乗る馬は、決められとる。馬は爪に鉄をつけてやるもんだい、それがゆるまんように、爪の汚れを取って油塗って、毎日毎日手入れしただよ。人間よりも馬を大事にする。戦場で走れなくなると困るもんで、乗馬部隊は馬の爪の事を物凄く心配しとるわけね。

北支那で特に記憶に残ってるのは、中国の広大な土地。ある年は、鉄道の列車に人間がいっぱいしがみついてくる。ほれはイナゴの被害で食べるもんが全然無くなっちゃった地域の人が、食べもんがある農地の地域に流れてきただ。ほういう年

が一回あったね。中国は広い荒野だからね。足助のような地形と違って、豊田くらいまでは全部、何もない荒野の所がだっただよ。もちろん、険しい山岳地帯もあるがね。

ほいから、三年目に作戦参加で足撃たれちゃってね。化膿して死んじゃわした人もおったけど、わしは運が良くて助かった。ほいで昭和十八年の暮れにね、四年間おって満期除隊っちゅうことで帰ってきたわけだ。

終戦を迎える

次の年の三月から、阿摺(あすり)村立青年学校に勤めた。はじめ青年学校はね、各町村にひとんずつあった。小学校と校長が兼任しとったけども、翌年に県の公立になって独立して学制制度も変わっただ。青年学校の中身は、軍事教育訓練が主体だね。女生徒も同じようにね。竹槍(たけやり)もやったよ。昭和二十年頃からB29の爆撃が首都圏や名古屋、他にも頻繁にあったね。足助にも落ちたんだよ。

終戦の日は重大放送があるという連絡が入ってね。中身が玉音放送ということも知らなかった。ほの当時は、そこらにラジオなんちゅうものはなかったで、青年学校の事務室と郵便局と両方に生徒が別れて、全員聞いたわけ。これはみんな誰もが頭に残っとる。中身は何だか全然わからん。聞きとれんっちゅうだか、わかる人は一人もおらん。ほいで二時間ぐらい経ってから、あちこちで「日本がえらいことになったげな。」っていう話が出てきた。何だいなぁ？って思ったら、行政の方から「日本は負けたげな。」って話がきて、みんな「負けた？」なんて言っとって、ピンと来ない。戦争は死ぬまでやるだと思っとったもん。まさか違わへんかって言うくらい、みんな丈夫で冷静だったね。えらいことだ！って大騒ぎってふうじゃなかったね。

戦後は物価がどんどこあがっちゃった。特に食べ物ね。わしは百姓やっとって、米はあったが、ほれも自由にならん。決まった量だけあって、あとは供出せにゃならん。みんな配給だったで、弁当は日の丸弁当が多かったね。

初の青年団長

各町村に青年団があってね、戦中は町村長が青年団長だったけども、戦後は自主団体になったもんで、わしは阿摺村の初代の青年団長になった。副団長は、加藤きみ子さんちゅって優秀な女の人がおってね。青年団として戦死せられた家へ、田植えとかお手伝いに奉仕活動したり、色々な行事を次々とやった。一番記憶に残るのは、終戦直後にね、自分たちで青年団の慰安会をやったこと。大蔵の小学校で、踊りや歌や、自分のやりたい演芸をやったわけね。わしはやらんかったが、みんなが沢山やるもんだい、夜中の二時までかかっちゃって。ほしたら新聞記者に、《慰安会、夜中まで続いた》って長すぎたことを非難くっちゃった。

候補活動

ほうして、足助町議会選挙に地域代表として出た。今は道路になっちゃったけど、集会所で北部地区でも各学区でも団結してね、候補活動した。応援しとくれる人も花も沢山で、地域で盛り上げてくれたね。落選せんように一生懸命で自動車で足助町中まわって、運動したいくわけ。昭和四十六年から二期やったね。

昔の集会所での候補活動

足助の変化

議員をやっとった時分は戦後の高度成長時代でね。足助では、まず御立（みたち）の栗園の開発オープンして、農林センター、そして学校改築が広まった。保育所も、町営に四十八年から変わったね。

議員の活動の中でも、小学校の改築の第一号が地元地域の新盛小学校だったで、よく覚えとる。校舎を町が造るっちゅうことが初めてだったからね。もともとは、小学校の校舎の空いたとこで保育所を始めとったもんで独立したわけ。改築は学

区で旧校舎を始末することになっとったもんでね。講堂は二階建てで新しかったで、料理屋やっとる人に買ってもらえるように話をつけてね。平屋の古い校舎も、牧場で使ってくれるとこに持って行っただ。

ほれから足助屋敷ね。推進も物凄い勢いで、行政の国の施策も活発だったね。昭和五十五年に開館式をやったけども、それまでに準備があってね。小澤庄一さんと香積寺（こうじゃくじ）の住職さんに話をしに行った記憶がある。それにはじめの計画は大きな屋根一枚で、ほの下で色々な手仕事をやるだった。でもその設計図だと川まで行っちゃうもんで、バラバラにする発想で、幾つも草屋根を持ってきたわけ。

足助屋敷の場合は、ただの観光じゃなくて《農山村の昔からの伝統的な手仕事を後世に伝える》っちゅうのが国の施策でね。だから草屋根の中に、国の林業構造改善事業が入っとる。農業構造改善事業っちゅうのもあって《林構》《農構》って言いおった。農構は農山村だもんでね。ほいで屋敷も県の方と意見調整してやっただね。ほれから西町のトレーニングセンターも、足助町民でなくて農業者の健康の為の施設として。あれは農構の予算で入っとると思う。

他にもね、県土木も新しい町舎にして、今の商工会の横っちょ西町にあったやつが中ノ御所の一番いいとこへ持って行ったし、伊勢神トンネルの上の伊勢神高原に《いこいの村》っちゅう県の大きな施設があっただが、県知事も県会議員も山へ来て、わしんたちが案内したんだよ。何百人って泊まれるどえらい施設。ほれもわしんたちの議会の時分できたね。他にも沢山あるがね、大きな事としては広域農道もできたし、足助城や住宅団地の事もわしんたちは随分協議したね。

その後はゴルフ場も入ってくるようになったね。どんどん幾つも業者が足助に入ってきたわけだ。簡単に町長もオッケーしたらめちゃくちゃになっちゃう。でも小出（こいで）町長がしっかり腹はすえとったもんだい、大丈夫だったわけだ。今とは全然違って、ほの全盛時代は山の土地も、買いたい人ばっかだったけど、今じゃ買いたい人一人もないわ。伊勢神の宿泊施設も今は戸締めになっちゃった。時代がすっかり変わってきたね。まぁ、ほれらが戦後の足助町の大きく変わったこと。大きな進歩、素晴らしく足助は伸びたわけだね。

木材業の仕事

足助地域も高度成長期と合わせて、昭和三十四年の伊勢湾台風の前後から、急速に木材の価格が上がってきた。戦後の復興をかねて、木材の需要があったわけ。

木材業は戦後青年学校辞めてからやっておったで、ずっと長い。木材業をやるには、県事務所へ木材業職の登録を受けないといかん。《マルヨ材木店》で登録受けて看板貰っただよ。登録を受けた者で、木材同業組合という組合をつくって、横の連絡をとっておったね。足助地域だけでも登録者は百人を越えておった。

ほれから他に登録を受けんでやる《ブローカー》ちゅう業者も、二、三十人くらいおったね。ブローカーは「あそこの山に売りがあるでどうだ。」って、登録を受けとるわしんたちに勧めてくれる。仲介業だね。

仕事の流れ

木材の仕事は、まず山の価格決定をするだ。どれくらいの価値があるかっちゅうことを、山をよく見て、自分の頭と時の価格とを兼ね合わせて腹を決める。ほして山主と売買契約を結ぶ。

売買契約が結ばれると、今度は木を切るだね。木を切る衆と伐採契約結んでね。冬になるとみんな山へ入って仕事をやっておった。昭和三十年代迄はトヨタに行くなんてなかった。四十年代になって、みんなトヨタに行きだいたけどね。

伐採が済むと、出材だね。山からトラックに積む所まで出す仕事をする衆がおってね。木馬（きんま）で出す場合とか、牛んぼの力を借りて出すとか、山から山へワイヤーを張って出したり、十なら十色の出し方があるもんで、その状況合わせた出し方を考えて、出材する衆と決めてね。ほれと同時に、よその人の山を通る場合には、地主に損害がないように、よその地主にも話をし

再現された木馬（きんま）（三州足助屋敷にて）

てね。それで出材ができるようになったら、出材価格を決めて、出材することができるだ。

出材が終わると運搬。運搬は建築業者や木材市場、製材業者へ運んでもらう。製材業者はお得意があって、いつも話をしとるで、ほこに合う喜んでくれる材を運搬するね。

運搬が終わって、月末か半年くらいで集金する。諸経費の計算もして、初めてこの山はどれぐらい利益があったか、収支がわかって終わるわけだね。一つの山が全部終わるまでに、半年～二、三年かかる。ほいだけ、木材業の仕事は長いわね。

木材の仕事は、全部信頼関係ができとらんと、うまくいかん。売る人も買う人も、それからあいさで働く人も。全部本当の心からの信頼と志が、ガチっとしとらんとね。中途半端な人がおったら、うまくいかんようになっちゃう。ちょっとごまかすなんちゅう事をしたら、駄目だでね。特別な欲も持たんで、志を通してやるってことが大事ね。全て心が通うようになっとるっちゅうね。まぁ、大変なことだ。夫婦と一緒だわ。

町との関係

足助の商店街は、木材業とは関係ないようだけども、料理屋さん、一杯呑み屋の店、料理旅館さんで、慰安を兼ねて食事会をする事もあるし、山の売買の話をするのに席を借りる事もあったね。両者の心を和らげる為に、芸子さんに来てもらった時もある。芸子さんは遊びだけじゃなくてね、業者や山主とわしんたちとの、あいさの潤滑油的な役目を果たされとったわけだね。足助の芸子さんは三十名の余おって、料理屋さんも、一杯呑み屋の店も十数軒あったと思うよ。足助の町が物凄く賑やかかった。時代時代に勝手に伸びたわけじゃなくて使命があったわけだね。そして石油ショックがあって、ちょっと世の中の価格の変動がストップしたことがあるけれど、木材業はまだ惰性で続いとったもんで、町の中も昭和五十五年頃くらいまでは、ほういう感じで続いたね。

香嵐渓にて　労働者の慰安会

木材市場

木材市場は、足助には沢山あったね。県有林木材市場、造林木材市場、県森連木材市場、足助木材共販組合市場と、四つあった。今は豊田市森林組合木材市場というかたちで一つ残っとるね。ほれは大事な山村の市場だと思うね。森林組合の人たちみんな努力しとるね。わしも関心があるもんでね、今でも木材市場のとこに顔出すよ。

今の想い

今は外国の材が安く入ってくるし、建築様式が変わったから、林業は窮地の産業になってしまってね、木材の価格が非常に安い。苗代がないような状態が続いておるが、ほこまでわかっておる人が少ないだろうね。

木材業が盛況な時代は、農構・林構に膨大な予算を出したもんね。飛躍的な戦後、高度成長時代に乗って木材が物凄い高い。ほの時分に切って使える様になるっていうと、五、六十年から八十年の木でなけりゃいかん。だいたい明治から植林が始まっとるもんね。目の前の買える物を考えんでやっとったわけだもんで、大したもんだなぁって思っとる。ほの時代があって、戦後のお国も救われた。

ほれを思うと、今はほういうことを国の政治が全部忘れっちゃっとる。最近だと、水資源を守ったり洪水を防ぐ水源涵養（かんよう）林の条例の話もでとるが、わしは国の施策で振興を考えて貰いたいと思っとるね。市とか森林組合の力だけでは及ばんもんね。

史跡研究会・全国成瀬会

史跡調査のきっかけは、昭和五十年の春のことだったね。仕事で足助の料理屋さんへ、しょっちゅう行っとったもんで、番頭さんもよく知っておるわけ。「今日、電話帳で《成瀬》を調べとる、東京から来たお客さんがおいでる。」って夜中に電

話がかかってきて、次の日に会ったのが、成瀬忠延(ただのぶ)さんね。林間のお宮さん《成瀬神社》へ参りに来ただ。その後も、京都の人も大阪の人も、みんなお宮さんへ参りにみえるが、なんだぁ?って思った。ほの頃、自分のルーツ先祖を調べる、そういう社会風潮の時代だっただね。みんな非常に心にゆとりをも持っとった時代かな。ほいで成瀬神社を知る為に、忠延さんらとわしとで史跡調査を始めたわけだ。

忠延さんっちゅう人が頭がいいしね、もう凄いだ。なかなか積極的だもんね。ほいで話もさっさっと進んで行く。忠延さんが、犬山城主は成瀬氏で成瀬正成という城主と同じ名前の人が東京におって、その人を会長にするで、わしに副会長になれっちゅっただ。ほいで副会長になって、成瀬会をつくって始めたわけだ。

調査するっちゅうと、ウチの辺にも何かかんかある。山の峠にも、お宮さんの事が書いてあるわけだ。林間の人はほんなこと考えもしんで、決まった時に行って、お祭りやっちゃあきとった。お宮さんは、部落にどこでもあるけども、何ちゅう神さんが祀ってあるか知らん人が多いと思う。ほだがそういうことのないように始めただね。

調査活動

東京の人と方々いって調べただ。香嵐渓の香積寺の住職も知らんどったが、お寺に関白の二条良基(よしもと)の位牌があるじゃん。その関白と内室関係だったのが、足助次郎重範公の娘の滝野だった。ほの人の位牌も、その息子基久(もとひさ)のもあるだ。この衆が林間のお宮さんの神さんになっておいでるわけ。香積寺の縁起書にもほのことが書いてあるだ。香積寺の上には装束塚(しょうぞくづか)っちゅうって、関白が京都へ行かれて、滝野はきっと会えらへんと思い、関白の衣装を埋めて大切にするという言い伝えの墓礎(はかそ)だ。

ほれから、岡崎の岩津の調査にも出かけてったら、信光明寺に成瀬家の地図があるじゃん。巻物三本分も出てくるわけだ、成瀬氏系図っちゅうやつが。これは六百年も昔ので、古くてバラバラになるわけ。これをわしんたちが修理してあげようっ

ちゅってね。なおいたら徳川美術館へ保存して貰う約束で、修理に一人二万円ずつ出して、十人で二十万円かけて修理をして、徳川美術館へ預けたわ。ほの巻物から成瀬城があったことがわかったね。近岡にあった。今はほこに成瀬城跡に標柱がたっとるだけども。

ほいから伊勢神宮の二条大宮司さんを訪ねただ。大宮司さんも、先祖が林間のお宮さんの神さんになってみえるっていうことを知らんでみえた。

お宮さんのお社が腐りかかって傾いっちゃっとるで、造り直したらどうだいっちゅう話が出て、ほいで伊勢神宮の古材を相談もなしに決めて来ちゃっただ。村の衆へ話したらほしたら「そんな夢の様な話、途中でとんずらこいたら恥をかくのは村だでどうもならんぞ。」っちゅうことだった。ほいでも一人の人が「残るモノは途中でも、ほんだけ残るもんだい、やってもいいじゃないか。」っちゅって、始めることに決めたわけだ。決めたわけだけども、またもめちゃうだ。村の人たちも暇もかかるし、全部同じ七戸の人が同じ力を入れてやるっちゅうわけにはいかん。ほういったとこから、村を先立ってくれたのは三人ばかだったけども、ほのうちに「会長だとか副会長だとか、色々名前はついとるけども、やるのは俺ん達ばっかだ。」っちゅうもんで「いや、ほれはこういう日本全国網羅(もうら)した会なんちゅうのは、地元の者が動くしかないだよ。」って俺が言って、ほいでみんな納得してくれてね。

成瀬神社

伊勢神宮の古材を使った新本殿

成瀬神社の御造営奉祝祭

昭和五十五年十一月九日、本殿ができあがって成瀬神社の御造営奉祝祭を林間でやっただよ。伊勢神宮の大宮司ご夫妻

を迎えてお祭りやったわけだ。小さい山の中でね。大宮司さんと奥さん、お祝いの言葉もほのままテープでとってあるよ。小出町長さんの祝辞もあった。豊田の業者に頼んでシート張って、テーブル持ってきてね。お祝いで棒の手やったり、剣舞も足助の人がやってね。みんなが鉄砲撃ってくれて。わしも詩吟やったね。鉄砲はみんな、終戦後でやらんかったけんど、ここでやったらまた足助祭りに村の衆はみんな撃つようになったね。四、五百人の人、全部は収まらんかったけど、お宮さんの鳥居のとこで写真を写いた。全国各地から心ある人たちが、グループじゃなく自主的に参加されただ。

古いお宮の社殿はね、北海道の千歳へ持ってって、松宮殿（まつみやでん）っちゅうお宮つくって祀っとる人がおるだ。その後もね、十五年で覆殿（おおいでん）も社務所も草屋根が傷んじゃったけど、瓦屋根にしたですわ。お祀りなかなか大変で、お金がないもんだい、二条家の奥さんが神具皆寄付しとくれた。ほういうことをね、全部冊子にまとめただよ。

御造営奉祝祭

写真史集『一期一会』

『一期一会』の思いつきはね、わしが八十五の時だ。八十五歳の老人としてわしが出した。関係者の残り少ない一人として、当時を想うと感謝の日々でね。これは忘れちゃっちゃいかんっちゅってね。こんな出来事があって、わしも死んでしまって、お宮さんの事とをまとめるとなると、村の関係でお金を出さんならんし。ほいでこれを五百部つくってね。『一期一会』っちゅう言葉は好きだったけと、どうやって書かぁしらんと思ったねぇ。でもカメラを友としておったもんで、『写真史集』っちゅうのが頭に浮かんできてね。

『一期一会』と『先人の心』

成瀬忠延様という人間との出会いから始まって、成瀬神社の御造営奉祝祭。ほれから、犬山城主成瀬氏三河世代十世っちゅってね、十世の墓所だね。香積寺でやった始祖六百年祭。装束塚に碑も建てて、詩吟の連中に頼んでやってもらった。百人も集まっちゃっただ。日光東照宮に行った事も載っとる。第十八代目徳川さんの御拝謁行事で、犬山城の関係としてわしんたちは行って、謝辞をやったわけだ。あとは成瀬神社を通しての色々な出会いを写真で残してあるね。

二代目成瀬会会長をやっとった、成瀬正躬（まさみ）先生はいい先生でね『一期一会』に《調和の美》っていうのを書いてくれただ。これもわしは頭下がる思いだ。わしの苦労が全部書いてある。資金ない中、わしんたちは木材業やっとるもんだい、一般の人は借金なんて事は考えんが、銀行で金借りるっちゅうこともやって、屋根までつくっちゃって、きちっとしてお祀りやったら、みんながびっくりこいちゃっただ。ほこの心配しとる。わしの行動を黙って見とらいたわけだ。

林間の人だけに『先人の心』っちゅうのも最後のまとめでね、わしの発想でつくった。これは平成十九年時点で、当時こういう人がおれてやれたというのがわかるように残した方がいいと思って。この部落でも、時代が来るとわからんくなっちゃうで。

誰とでも出会い生きて

ほいでもう一つ、碑文化って石碑を何本か造っただ。《感謝の気持ちは石に刻め。恨みは水に書け。》という大事な言葉があるわけ。ほいで碑を全部造ったわけ。あれやこれやと。お宮さんへ貢献された人の名前を全部、二千人以上になっとるかもしれんが、碑に刻んであるね。みんなしてやるって事に意義があるもんね。

わしが感じておるのは『人の出会いのぬくもりは心に残り、人生を楽しく幸せにしてくれる』これを感じとるね。人生で。全く幸せだわ、みんな生き会ってね。誰とでも出会い生きてね。何回生き会っても、重なるたびに。

【聞き手・河合友理（白倉町）】

牛のない生活はしたことない

大河原　チエ子さん　（おおかわら　ちえこ）　野林町

昭和十年八月一日生まれ（七十八歳）

七才から一年間満州で過ごし、新盛の旧制中学を卒業後、家の手伝いをしながら、洋裁を学ぶ。一九歳で野林へ嫁いで以来、現在まで御主人の鐘市さんと共に、牛の飼育、繁殖を行っている。現在、黒毛和種の繁殖牛（親牛）二頭、肥育牛（仔牛）二頭の計四頭を飼育中。

お百姓と牛

私は昭和十年生まれ。いのししだから今七十八。おじいさんが蛇で七回目の蛇がくるが。巳年でね。八十四になっちゃうだもん。

酪農（らくのう）は乳牛だよね。わしんたなんちゅう・・・肉牛だもんで畜産の仲間に入っちゃおるだけども、それで生活しとるわけじゃない。数がおればおるほど売れた時にはいいんだけど。私んとうはなくしちゃうのもいかんと思って、親二頭にしてあるんだけどね。

在所は新盛の永野ちゅうとこで、春夏お百姓。冬は山で割木（わりき）とか炭焼き。竹を切って出したこともあるよ。

ここらでも昔、牛のいない家はなかった。田んぼ百姓、牛がみなやっとったでしょ。ウチでも田んぼ耕すのに必要だし、

犂とかいろんな道具引かせてね。耕す道具に田んぼの中を掻きまわす道具、みんな牛が引っ張るための道具じゃんね。

人間でも一緒だけど、昔の牛は田んぼ漉いたり力仕事やるから、背筋がぴーんとしとった。今の牛はだらだらしとるだら。今は牛でも背筋が真っ直ぐなやつはなかなかおらんだ。

私、父親がはやく亡くなったもんで、おじいさんが田んぼで牛使ってる時には手伝って引いたり、晩には家まで引っ張って帰ってきたりやってたけどね。

餌はよくやりよったよ。藁を切って大きな桶に入れて、お湯をかけて、お米の搗いた糠をかけてやるくらいだった。そうゆうものしかなかったで、ほうやってやりよった。昔は大豆をよく作ったもんで、その大豆の皮干しといたやつ、堅そうだけどお湯とか水かけてにやると藁よりようけ食べとったね。

ウチのは雌だもんで子供産ませとった。西樫尾で種親っていう牛を飼ってるとこがあって、発情がくるとそこへ引っ張ってって種つけてもらうの。行きがけはすごい勢いで歩くもんで。とっとっとって行っちゃうじゃんね。ほいでそこで種つけてもらってから、ちいと休ませといてから家へ引いて帰るの。でも大変だよねえ。一回で種が着かな二回も三回も引いてかなならんで、どうやっとたかしらん・・・・お金は多分出したじゃないかな。

上手く種が着いて、仔が産まれたら売りに出したり、跡継ぎにしたりするだったけど、今じゃ牛飼ってる人なんてだんだん減ってっちゃうもんね。おじいさんも子供時分のこと言うけど、やっぱしこの家でも仔牛が産まれると持ってって売っちゃうだけんに、なんかたるくて泣けた覚えがある、って。小さい時からいじっとっただね、牛を。

野林に嫁いできてからは国谷に農協の出張所があってね、電話しといて時間合わせて牛連れてくと、受精師さんが種つけてくれるの。

今じゃ獣医さんに頼んで、家に来て種付けてもらえるようになったじゃん。

嫁いだ先でも

結婚ちゅうても昔だもんねえ。仲人さんがいて、親が行けちゅうで来たくらいで、本人やなんかそっちのけだが。来たはいいけど誰が旦那さんか知らん、ちゅうようなもんだよ。

この家もやっぱし農業用に牛使っとったし、おじいさんの親も牛が好きで、偶然にも牛の好きなとこへ嫁いで来ただね。だもんで私、今まで牛の居ない生活したことないもん。ずーっと牛がおる。

嫁いで来た時分飼っとったのはいっこぎしだよ。ただ、昔はどこの家でもみな一頭ずついたもん。お百姓に使うもんで。居ない家が少ないくらい。ほだけどこの家じゃ牛飼う前に馬のほうが良いちゅうて、馬を飼っとったみたいじゃん。ほいだで牛を飼うようになってからも馬の背負い鞍を牛に使っとったね。この家じゃまだ牛に荷物背負せて、旧のイタチ道を引いて山をいろいろ行っとったんだよ。私の在所じゃそれはやらなんだもんで。ここへ来るまでは知らなんだ。

牛糞やなんか肥やしとして自分ちの田んぼへ持っていくでしょ。厩から出した牛糞をカマスに入れて、牛に背負い鞍つけて、両脇に二つ乗して。今みたいにこんな良い道じゃないよ。イタチ道のようなとこをね、ずーっと背負って山ひと越えして、向うの田んぼへ持って行くだった。今みたいに金肥ないもんでね、それ使っとったじゃんね。

今は焚き物作らないけどね。その時分は焚き木も牛に背負わせて、自分も背負って、下りたり上がったりしていろいろ行ったんだよ。

牛のほかにヤギもおってね。ヤギは青草食べちゃあお乳がでるでしょ。それ飲んだじゃん。ヤギのお乳はいっぺん、布巾で漉して沸騰させて、ほれから飲ませる。私、長男の下に双子の娘を産んだもんでね、ちょうどその時ヤギがいたから、娘はほとんどヤギのお乳で育ったね。母乳なんて夜だけしかなかったもんでね。昼中飲ませる分が無いもんで。ミルクなんちゅうもんは在所へ帰る時に一つ小さいのを買って帰るくらいで。

今の家に建て替える前は、ここに本屋があってね、玄関入って左に牛がいて、自分等は右側に住むちゅう生活だった。一

緒の家で、いつでも目が届くとこに牛がいるでね、そのくらい牛を大事にしてたんだって。私来た時は、その家壊したばっかでね、牛小屋は別に作ってあった。ほいで今の厩は、息子が大工だもんで十年くらい前に本体だけ建ててくれた。それにおじいさんがいろいろ手を加えてね。

どの家でも牛は田んぼやったりするに必要なんだけど、そのうち耕運機がでてきて。私んとうはそれこそ時代遅れだもんで、近所みんな耕運機使うようになっても、やっと牛使っとったよ。

そのうちにだんだんと自分の趣味として飼うようになっちゃって、子供産ますうちにほいじゃ一つもなんだで、一つ飼え二つ飼えで、会社行くまでには三つまではおったね。私が嫁いで来てからだんだん増えてって、一番多い時で親が五頭だでね。ほいで全部仔がついて、一頭が双子産んで、全部で十一頭。それが最高ぐらい。けっこう賑(にぎ)やかしかったよ。

だけどそれで収入得ようってわけでもないんだわ。ほりゃ牛を売れば確かに収入あるけど、もう売値の半分くらいは牛が食べちゃうもん。昔みたいに藁と粉糠(こぬか)でやっとれば助かると思うよ。今は配合飼料だなんだって買わにゃならんもんで。それでもずーっと飼っとったのは牛が好きちゅうのが・・・まずそれが先だった思うよ。

現在の厩（牛小屋）

会社勤めしながら

ガスだの電気だのが出だして、割木や炭が売れてかないで困っとったら、トヨタの自工さんの下請けの募集があったもんで、おじいさんが勤めだしたじゃん。私は家にいて牛みたり百姓やったり、露地栽培でキュウリを作って出荷しとっただけど、同じ畑ばっかだと病気が出ちゃうでしょう。ほいで良いものが生らないもんで、おじいさんと一緒の会社が募集しとる

けどどうするーちゅうて、季節工で冬だけ行こうかって。行き出したら年中出かけちゃって。
ほん時牛は三頭おって、朝、餌やって七時前には会社行って、夜帰ってきてから翌朝の用意もしとくじゃん。そうやって続けとった。
おじいさんが平成二年に定年で辞めて、私は二十二年勤めて、平成八年に定年で辞めたんだ。おばあさんも元気でおってくれたもんで、私も定年までいけたじゃん。
それからだね。御立（みたち）の栗園のとこにある牛の館へ応援に行き出して、結局は引き継いでね。あきもせんと結局おじいさんと一緒の現場で、二人で十年行った。
館のはね、あそこの牛じゃない。預かった牛。家で飼いたくても飼えん人がおるじゃん。牛は好きなんだけど飼えない人が買って館に預けてあったじゃん。遠いとこだと名古屋とか春日居の人がみえたよ。それが親子で六十頭、親子で一緒におった。

広報あすけ　97年1月号表紙より

館はね、最初は朝晩朝晩、餌の藁やるだったけど、今は夜一回だけ。夜一回にすると、お産が昼中で収まるって。夜産まんで、昼中産むようになる、ちゅうことを獣医さんが言わっせたもんでね。　だけど可哀相でねえ。一週間から十日ぐらいまでは朝行くとモーモー呼ばるでしょう。あれが辛かったけどね。ほのかわり晩に朝の分も二倍やるの。そりゃ夕方なんてやかましくて。腹が減るもんで呼ばるじゃん親が。もう忙しい忙しい。
そのあいさには、貯まった牛糞をおじいさんと二人でダンプに積んじゃあ、一杯三千円だかで欲しい人に運んでったの。方々の田んぼ持ってったよ。鶏の糞より牛糞はね、何に効くにしても悪効き、効きすぎるちゅうことはないんだって。鶏糞だとできすぎると稲でもガサガサなっちゃうでしょ。ああいうのは絶対ならん。
それにしたって六十頭もおったら、盆も正月もあったもんじゃないよね。獣医さんが正月やっとくれたこともあるけどね。

産まれたり発情したりが何番だってみな黒板に書かなならんしね。それこそ黒板いっぱいに牛の名前が書いたりよった。

仔が産まれたら、ある程度で乳を切っちゃらっせるだ。何ヶ月か乳飲んだら、もう親のそばに行かせんようにして餌だけで育てる。餌食べると発育がいいみたいじゃんね。親子別にすると一時(いっとき)呼ばるが会わせんだ。そのうち親も仔も慣れちゃうとけどね。

ほうやって十年行ってねえ「おじいさん、疲れてから辞めると、ウチのほうもやれんくなるから、もう辞めようか」ちゅうて、ほいで辞めてウチだけにしてねえ。

ウチの牛んぼ

牛の仕事ちゅうても別に一日中はあらへんよ。今は冬だもんで朝ゆっくり七時前に起きて、先にふすまちゅうて小麦の皮や配合飼料だけやり行くじゃんね。ほんで他の家事やなんかやったら今度は藁やって、天気良ければ夕方まで下に放してやるじゃん。牛放すのに下にある余所の田んぼ分けてもらったんで、天気が良い限りそこに放してやるの。雨降ったりして一日でも出さんどいて、次の日外出たら親も仔も走りまわっとるわ。自由がきくもんで、うれしいもんなんかね。放してやればストレスも溜まらんしね。獣医さんの話だと、運動するから種の着きもいいかもしれんよ、って。

牛の足もとに布団かわりの敷き藁やおが粉が敷いてあるもんで、牛を外に出してからそれを掃除するだけど、今はほとんどおじいさんが牛の世話しとるよ。はりあいだもんでね、おじいさんの仕事取っちゃいかん。ふふふ。

厩の中

入口に柵作っといて、表に自分で自由に出入りできるようにしといたこともあるけど、玄関なんか開けとけれんわ。外にいた牛が家の中入ってきちゃうもんで。そんな飼いようもしたことあるよ。

稲架掛けしてある藁はね、良いとこは餌用にして、悪いとこは敷き藁で足もとに切っていれてやる。

畑はひととこ遠くなるけど、牧草もつくってるよ。牛の餌用の種買ってきて畑に蒔いて。それも刈りたてがおいしそうで、生でも食べさせるけど、刈って青いのを一日くらい干しといたのが良いが。

でもね、一番よく食べるのが、ボタの野草。そこらのボタの草ね。あーいうのが一番良く食べる。枯れとってもなんでもね。ここらの田んぼは土手が多いか田んぼが多いかちゅうぐらい土手が高いでしょ。その土手の草刈ちゃ、ウチへ背負ってきては牛に食べさせとった。おじいさんは明けても暮れても草のあるうちはばーばーばー草刈って、ほれを干して縛っといて、ほいで今になると出しちゃ藁と一緒に切って牛にあげるじゃん。牛にしてみれば藁はね好きじゃないだろうけど、肉質良くするには藁くわしたほうが良いんだって。

牛の市

昔は今の百年草のところに市場があって、そこに売りに出しよった。子取りちゅうのか、親牛は残しておいて、産んだ仔だけを売りに出すの。うちでも順調にいくと三歳ころで仔を産むようになる。そこで発育が悪い、種の着きが悪いと四年くらいになっちゃうわねぇ。

最近は市へ出すでも獣医さんが仲介やっとくれるし、足助の市がのうなってからは、新城まで連れてくじゃんね。牛積んでくだもんで一時間くらいかかるな。だいたい四十万円になればいいけどね。なかなかね四十万ちゅうと難しいみたいだけど。

雄なら去勢するから短期で大きくなるでしょ。まあ、雌の場合はそのまんまだけど、良い牛なら跡継ぎに買ってかれる方もあるし。

なんしろ市の時に家の前の道路まで仔牛を出してトラックに積むのが大変だったじゃん。仔牛がね、動かないの・・・わかっとるだね。仕方がないで親を引っ張り出すじゃん。ほうすると親に付いて来るから、やっと積んで。

今いる六月生まれの仔が今度は四月に市に出てくかな。あとは八月の末に生まれたやつがおるだけだな。市に出すでも、最初は切ないとか思ったけど、今はそういうもんだと思って。自分がえらくなったもんで、まずやれやれと思っちゃう。しょうがない。

一番やっと飼ったのは十五、六年は飼ったと思う。やっぱしほいだけんなって飼ったやつを出すのはかわいそうな気がするね・・・・でも出さざるを得んしさ。

名前呼ばって

今いる親の名前は、ヒトエにサフラン。　ヒトエの仔がキタシゲで、サフランの仔がニフラム。

二十年くらい前まで名前はウチでつけるだったけど、今は農協さんがつけてくる。農協さんに「産まれたよー」ちゅうと、農協さんが種牛、おとこの親と似たような名前や、一文字とって変えたりしてね名前つけてくれる。

五つおる時は名前呼ばって歩いたよ。カツマにヤスサワにサフランの親のハレモ。キタサナもおったか。

「カツマ！ほんなとこおっちゃ自分の部屋じゃない！こっちこなあかんわ」

ほう言ってやると向きかえて帰ってくるもん。ちゃんと自分の部屋帰ってくる。餌やっとかなとんでもないほう行っちゃうもんで。でも向き変えて戻ってくるわ。自分が呼ばれとるっちゅうのは分かるみたい。餌やり行った時に名前呼ばってやらにゃ分からんよね。

放牧中のヒトエ、サフラン、仔牛

ただ黙って餌やっとるだけじゃ。今は二つばっかだもんで、自分の部屋呼ばらんでも来るけど、五つおった時には、たまにゃ間違えて行っちゃうもんで「おまんどこ行っとるだー」ってわしがほう言ってやるとね、向きかえて帰ってくる。

獣医さんと

種付けやお産もそうだけど、だいぶ獣医さんには世話になってるよ。親がちょっと怪我したとかね。

こないだ親が後ろ脚を脱臼だかで立たんくなっちゃって。牛を後ろから見ると、お尻がぽこんと膨らんどるでしょ、その片一方のぽこんがのうなっちゃったじゃん。

それからなかなかよう立たんでねえ。しかたがないもんで踏ん張りが効くように、畳ひいてやって。ちいとは餌食べたのかなあ・・・立てんもんで寝とって食っちゃうと意外と消化せんもんね。やっとこさ起きても、向きもよう変えれんぐらい痛くて、獣医さんがマッサージやったりんちゅうもんで、一生懸命マッサージやるじゃんね。

人間にするみたいに手でやるんだけど、牛にとっちゃ撫(な)でとるぐらいなもんでしょ。ほだもんで力任せに痛いところを揉(も)んでやるじゃん。それでもおっつかんでマッサージ器でごろごろごろごろやって、最後にはちゃんと立つようになったけどね。これだけ良うなればいいかしらんが、ほいでもお腹に子が出来た時に難儀(なんぎ)して、また座りこんじゃうと可哀相だと思っとったら、それが双子産んだじゃんね。双子産んでから、あと二つくらい産んだかなぁ・・・いい牛だったでね。

牛は寒いのはいいんだもんね。人間が頬被りせにゃ寒いちゅうぐらいで放っても大丈夫。ひどいとこは、もう背中凍らかしてでも外におるがな。慣れっこになっちゃうよ。

だけど牛んぼは夏の暑さに弱いのね。ひとつ暑さにやられて死んじゃったことある。。外出とらんだかなんだかで、トタン屋根で暑くて日射病みたいになっちゃって。いくつもおったもんで、次また別の仔牛がそうなっちゃって。その仔牛は獣医さんがいろいろ注射や点滴打ってくれただけど、毛が抜けちゃったの。ほんなんじゃ藁の上で寝とっても痛そうで、古い

毛布持ってって敷いちゃあ、毎日替えてねえ。親と離らかすといかんもんで、親がいる厩でちょこっと仕切りして親のそばで。
体力ないもんで動けへんし食べれんし、立ってもひょろひょろになるくらい痩せちゃって。乳も具合よう飲めへんし。ほいだもんで、おじいさんがミルクを管で喉いれて飲ませてね。ようやりよったよ。私も夜中に起きて行っちゃ、水をちいとずつ飲ませたり、一生懸命に手入れしとったら最後には立って元気になったことがあるよ。ほいでも薬で毛が抜けとったもんで、獣医さんが痛そうだでって赤チンつけたら、まあ赤だか黒だかわからんぐらいになって、はははっ。まだらになっちゃってね。そんだけ毛が抜けちゃってたね。

お産

子供時分は「お産するで覗いちゃいかーんっ！」ってよう言われとった。厩の中をね。ほいだで、そういうもんだと思とったけど今じゃお産だっちゅうと手伝うようになっちゃった。
仔が産まれると、まず初乳を飲ませるじゃん。初乳飲まっせると丈夫いちゅうこと言うもんで。
私が親牛の乳搾って、ついでに哺乳瓶入れて、ほいから産まれた仔に飲ませてやって。ほうすると急いで親の乳吸うようになるじゃん。だけど親によって搾らせんやつがおるでね。もう産まれる時期になると乳がぱんぱんに張っちゃって切れちゃうでしょ。ほいつを難儀してねえ、搾っちゃ飲ませる。ほうだけど触ると痛いもんで怒るじゃんね。子供が吸おうとしても蹴っからかしちゃうもんで可哀相で。あれ畜生だねえ。あれだけはなぁ。ちいと乳が柔らかくなればいいだけどね。
牛にも性格あるんだよ。そりゃ人間と一緒でねえ。お産するでも、今いる牛はちょっと出かけてるうちに自分で産んで、きれいに片付けしちゃって。結局、産むでしょ。子坊べたべたになるでしょ。それを親がぜーんぶねぶっちゃってきれいにして。だけどしないやつもおったよ。産んでも知らーん顔してね。
お産の時はいつも家に居るだけど、初産だとなかなか出なんだわ。今二頭いるうちの一頭が初産で、夜中十二時過ぎだっ

たな。脚と頭まで出てきちゃったけど、ちょうど息子が肩痛めて手伝ってもらえんで、弱ったなーって。

脇の辺はあばらがあるでまだいいけど、脇腹は骨がないでしょ。そこで止まっちゃうと内臓締めちゃうで、止めちゃ駄目なの。脇まで出たら気に引っ張り出さんと。破水してからあんまり時間かかるから余計心配しちゃって、もう駄目かしらんと思ったけど、下へ座って牛のお尻に足当てて、一生懸命おじいさんと、ほんとに必死になってなんとか引っ張り出したよ。

ほいだけど親は疲れて起きやへんしね、まあ困ったなあ、腰が抜けっちゃたかしらんと思ったら、そのうちに起きてきて子ねぶりだしたもんで良かったけど。

双子産んだ牛もいてね。最初から獣医さんに双子がいるでねー、って聞いとったら心配しとった・・・・・知らんどったもんで良かったじゃん。獣医さんに診とくれって言やあね、多少わかるだろうけど、今まで双子なんてなかったしね、特別お腹大きいとも思わなんだ。まさか二つ産むと思わんもんで、ひとつ産んでひと安心と思っとってね。親の初乳搾ってるといやに親が動くから、

「おじいさん、ちょっと撫ぜとりん。親が動くから」

って言って見たら脚が出てきたでしょ。「あれっ?」ってびっくりして。急いでおじいさんと引っ張り出したけど、どうもこうも普通の牛だったよ。それからはまぁ、小さい厩だもんで、二つを一つにして大騒ぎだったよ。ほいから双子じゃ乳が足らんと思ってね、人間のミルク貰(もら)ったのがあって、日にちが切れとっても匂いがすればいいよって言わっせれたもんでお砂糖ちょっと入れちゃ哺乳瓶で飲ませとったの。

ほいで飲んどったけど、一週間目くらいから飲まんくなっちゃった。親のとは味が違うもんで。いくらやったって振り切っ

サフランとニフラム

ちゃっうし、口に入れても吐き出っしちゃうだら。なんしろ賑やかしかったねえ。

そういう訳で、牛が双子産んで、私も双子産んどるんだわ。

人を力にしとる

まあ、飼っとるとね、家を空けるちゅうことは出来ない。おじいさんがおるか、私がおるか、どちらかがおらにゃね。

後はどいだけやれるだか・・・・・・おじいさんとはいつ辞める、もう辞める、みたいな話はでないねえ。好きじゃなけりゃこんなことやれんしさ、他になーんにも取り柄ないもんで。おじいさんには、これなくしたらポケーンとなっちゃうよ、って私言うだけどね。

私はね、だいたい犬や猫好きなんだわ。動物は好きなんだけど、おじいさんに言わせると、犬や猫にご飯食わせるくらいなら、牛にほいだけやってみよ、と。私の在所は猫も飼っとったでしょ。猫と一緒に寝りよったじゃん。たまに私在所行くと布団の中入ってくるでしょ。おじいさんは嫌がりよったけど、わしゃ猫も好きだもん。牛はなんちゅっても大きいもんねえ。布団の中で抱いて寝るような訳にはいかんしさ。だもんであれだけど。

それに犬や猫みたいに最後まで見てやれんじゃん。私はそれがイヤなんだっちゅうだ。だけど仕方がないもんね、そればっかりは。ほんと今はね、金はかかる手はかかるけどね、これでも飼ってみりゃ、やっぱり人を力にしとると思うと可愛いですよ。大体眼が可愛いじゃん。大きな身体のわりに小さな眼ぇしとるだら。眼ぇくりくりして。

物は言わんだけどね、よう知っとる。そう思うと可愛いとこもあるしさ。ふふふっ。

チエ子さんとヒトエ

【聞き手・原　章展（桑田和町）】

すべてのことを大事に想う

梶　公子さん　（かじ　きみこ）　野林町

昭和十一年五月十九日生まれ（七十七歳）

国閑（かいご）の農家に産まれ育ち、野林町に嫁ぐ。農業や会社勤めをしながら夫の誠さんと共に三人の子供を育てる。現在は孫が九人とひこが七人。

戦争と子ども時代

私は足助の西部にある国閑（かいご）というとこに産まれてね。お父さんとお母さんとの間に産まれた長女だったよ。六年経って弟が産まれたけど、それまでは三人家族。一年生あがる時はさんじゃくと言ってカフェのお姉ちゃんがかけとるような前掛けを着物の上に着て、鞄しょって下駄はいて行ったね。ほんとならピカピカの一年生。だけど鞄がボール紙でできとったんだよね。色はピカピカしてきれいだったけど、天気の悪い日に雨水がもおったらもう色がとれちゃって、たるいなあと思ったのを覚えとるよ。帳面とか鉛筆も無くてね。今のノートぐらいの大きさの黒板みたいな感じのとこに、石筆（せきひつ）っていうチョークみたいな物で『あいうえお』とか『さいたさいたさくらがさいた』なんて書いて勉強したね。

私が小学校一年か二年のときにお父さんが召集で戦争に行ってね。その時はなんかぽかーんとなっちゃって。親戚のおば

さんに「公子はおとっつぁんが戦争へ行くのに涙のひとつも出んだか」って言われたのを覚えとるけどね。寂しいとは思ったけど泣くっちゅうことはなかったからね。お父さんは「まあうちへは帰れんと思うでお母さんの言うことをよく聞いてしっかりやれよ」って出征して行って。でもそういう事を言ったにしちゃ割に早く、二年位で帰って来たけどね。その後の生活は大変だったよ。食べるもんがなくてね。稲やジャガイモ、秋じゃがと春じゃがと両方作ったり、お父さんが一生懸命で仕事をやっとるなあっちゅうことは覚えとる。皆いもを作っても麦を作っても、それから稲でもね、くずのようなのだけとっとくだけであとはみんな兵隊さんに出すだったもんね。まあ情けないよほや。空襲が多くなった終戦前には街から疎開してきた人で学校の生徒の人数も増えてね。名古屋や大阪や神戸のほうから来た子もあった。戦争が済んだら皆帰って行っちゃったけどね。

戦争始まる前はおやつも色々あってね。バナナやなんかを買ってきて食べたりできた。でも戦争だって言うようになったら、うちで粉を練ってふくらし粉ちょっと入れて焼いたパンみたいなのぐらいしかおやつが無くなってね。うちはみつばちを飼っておったから甘いものには苦労がないほうだったけどね。

戦争中に一番怖かったのは、右に六所山があって左側に砲ろく山があるとこでおばあさんと一緒におった時に、目の前で飛行機がぶつかったこと。飛行機はどこへ行っちゃったか分からんかったけど、高いところに小さなものが見えるの。何あれ？ちゅって見ながらだんだん近づいてきたらね、足が二本ぶらぶらと揺れとる。落下傘で米軍兵が降りてきたんだよね。日本人は優しいから、かやを刃物で切ってその人を探いたげたんだよ。見つかってからはご飯もあげたんだって。ぶつかった飛行機は松平のソダメというとこに落ちておって、私も後で見に行ったよ。小さい頃だったからものすごい大きいものに思えてね。となりに亡くなった米兵が二人寝ておったよ。よう見んかったけど、すっごく大きな足が見えとってね。「あそこに寝かいてあるね」なんて話したけど。

主人の兄弟は六人兵隊に行っただでね。うち二人が戦死、主人のお父さんも戦争で亡くなってしまったよ。だから私の姑

さんも難儀せらしたと思う。桶を西中というとこへ持って行って、肥をしょんぼけに入れて担いできて、それを家で薄めて麦とかなんかにやるの。その頃は道がないからね。ウサギやタヌキが飛んでいくぐらいならいいけど、一輪車だって通らんような狭い道ばっかだった。そこを女の人が桶担いで持って行くっていうのは並大抵のことじゃなかったと思うよ。

あの時代は誰もかれも皆難儀しただよね。学校へ行っても勉強なんできん。あっこの畑へ行って稲を植えましょうとか、麦を刈るとかそんなことしたりね。運動場へはさつまいもを植えたり豆を撒いたりそういうことをして。お弁当でもたまにどうかするとちゃんとしたご飯を持ってくる子がおったけど、そうすると叱られる事もあった。百姓をやっとってもお雑炊とか、米粒がいくつある?っちゅうくらいの水気の多いおかゆみたいなのを食べておってね。今思いだすと考えれんよ。でも果物はいっぱいなりおったからね。柿とかびわとかみかん、いちじくやなんかをよく食べておって。それがだいぶん体を助けてくれたと思うよ。運動会もやれへんし学芸会もやれへん、という時期が二年ぐらいはあったからね。ほの時分が一番えらかったかな。

昔はとにかく仕事仕事

小学校の四年生の頃からお勝手をやっておったよ。晩にご飯をしかけといて、朝ぶーっと吹いて火を焚いてね。くどの上をきれいに拭いとかんとお父さんが「女の子がお嫁に行ったらどうする?」って頭の上に手置いて言うもんで、きれいにするようにしておった。

いっぺんだけど殴られたこともあったよ。村のことで忙しい時だった。「餅を焼いてくれ」ってお父さんが外で言っとったもんで、聞こえんと思って「自分の食べる餅ぐらい焼きゃいいじゃん」ちゅったんだね。だけどそれが聞こえちゃってね。「なに!」ちゅって中へ入ってきてぱーんと叩かれたの。その時には私も怒れてね、玄関の扉ぴしゃっと閉めて学校へ走るみたいにして行ったのを覚えてるよ。

昔はとにかく仕事仕事だったからね。あんまり遊んだ記憶が無い。歳の離れた弟や妹が四人おったから、その面倒もみておって。今日は稲こきだで学校を休んで子供の面倒みろなんて言われるようなこともあったよ。私は学校大好き、休むこと大っきらいだったでね、しょうがないもんで学校へ兄弟を連れて行って横へ据えて勉強したこともあったよ。昔の親はひどかったっちゃあひどかったかもわからん。子供の世話を私に任せて仕事へ行っておったからね。朝私に子供をおばせる。そうすると昼までそのまま。もしおろしちゃったら私も体の小さい子供だで自力でもう一回おぶことができんでしょう。朝おんだらお昼に親が来るまでそのままおらんといかんかった。辛抱強かったと思うよ。今でも近所の子が「皆が遊んどってもきみちゃんは遊べれんで、縁側へ子供のお尻を乗せて見とったねえ」なんちゅって言うもんね。

それから昔は水が無くて、それも大変だったね。どうにも水がいるときには遠くの池へ行って汲んで来て。家の近所をちょっと掘って水がでるならそこを池のように掘ってね。雨水やなんかも溜まったりしたとこから埃をちょっと取って使うということも多かった。そのせいかな、ちっちゃい子が亡くなるってことが多かったように思うけどね。こないだ家へ来た子がふと「昔は水が無かったでねー」って言うだよ。ああ私が思うだけじゃないだなあと思ってね。皆そんなかんじだった。ある人はね、石の間から水が出るでそれでいいわっちゅうかんじでそこから取って飲んでおったみたいだけど、ちょこちょこちょこちょこお腹が痛いって言っておってね。後々分かったことにはその水は米をかいたりした排水を流すとこだったんだって。お腹壊すはずだわっちゅってね。今じゃ笑い話になっちゃったけど、そのくらい水が無かったってこと。在所にはポンプがあったからその水を汲んでおったけど、嫁ぎ先は井戸の水だったからね、こんな水飲んだら死んじゃうかもしれんちゅってちゃんとした検査をしてもらった。冬はあったかくて夏は冷たい調子のいい井戸だったけどね。

それから中学へ入っただけど、それからも仕事を手伝っておったよ。通学する時には空の一升瓶を二本持って行ってね。国谷の鳥飼場（とりかいば）ちゅうとこに乳牛を飼ってる人がおったもんで、登校する時にその一升瓶を家のとこに置いておくの。そうすると学校の帰りに牛乳を入れといとくれるもんでそれを持って帰る。一升瓶いっぱいに入った牛乳を後ろ前にかついで、さ

らに学校の鞄を持って行き来しただよね。えらかったよ。持ってくと私にお茶碗一杯だけ牛乳をくれた覚えがあるけどね。持って帰った牛乳は牛の赤ちゃんに飲ましたの。当時は牛に切った木を道まで引っ張り出す仕事をさせとったもんで、牛に栄養つけさせなきゃいかんかったからね。

この頃に本当はひとくち親から「高校へ行くか?」っちゅう話があってね。私は勉強はできんけど学校が大好きだったから、わあ行きたいなと思って。だけどそこで一つ考えちゃったのが兄弟のこと。弟や妹が五人おったからね。雨の日でも風の日でも学校から帰ってすぐ蓑を着たり傘をさいたりして外へ仕事をしに行くようなふうだったもんで、学校なんか行ったって勉強しとれんと思ったね。それなら会社でも行って自分のもんでも作るほうがいいと思った。その時分の給料がねえ、一ヶ月で五千円だったかな。紡績会社、毛糸を作る会社だけどね。安城の寮で生活しながら働いたの。高校へ行くかって言われて乗り気んなって行こうかと思って張り切って勉強始めたけど、色々見てみると学校行ったってこいじゃ家帰っても勉強はできんし、それよりも金とったほうがいいと思って「私会社へ行く!」って言いきって、安定所へ行って自分で手続きしてきてね。当時は一晩泊まらないと豊田へ行ってくることができんかったもんで、自転車で矢並の親戚の家まで行って、一晩泊めてもらって行ったよ。矢並では「お父さんもお母さんも難儀せらっせるでお前家におって助けてあげてくれよ」って言わしたけど、「私今日試験受けるつもりで来たから泊めて」ちゅって。出かけに「落ちるといいだがなー」って言わしたけど結局採用されてね。帰って「受かったよ」って言ったら「なぁんだ受かっちゃったかやぁ」って言われたけど。そんなわけで家を出て安城へ行って寮に住み込みで働いて、二年位はおったのかな。

妻になる、母になる

亡くなった舅さんの親で、まこちゃんのおじいさんにあたる人が、「俺も歳とって色々やれんようになったで、誠に嫁さんもらわにゃいかん。俺ぁ今日一日嫁さん探いてくるで、おっかあ弁当くれ」ちゅって出て行かれたんだって。それで一日

中ほうぼう娘をみて歩いて。たまたまその帰り道に、知り合いだった私のおじいさんと会ったんだって。うちのおじいさんが「今日はどっか行っただかえ」って聞いたら、「誠に嫁子がもらいたいと思うだが気に入る人がなかったで」ってたるがっとらしたげな。だもんで私のおじいさんが「オラがにもひとーりあるがのう、今お盆で帰って来とるけど」っちゅうことを言わした。ほしたら帰りながらうちへ寄ってくれてね。お茶を飲んでちょっと喋ったりせらして。

そうしたら「オラぁ嫁子決めてきたでな」っておじいさんがうちへ帰ったんだって。誠さんはびっくりするよね。そんな知らん人をね、おじいさんの奥さん選ぶわけじゃないのに決めて来ちゃったって。もちろん私も困っちゃうよね。誠さんとは三つ違いで歳が近かったで、名前はよく聞いたことがあったけど、どんな性質の人だかは全然知らんかったもんね。結局お互いに承知できんで二年の猶予をもらうことになって、二年間ぐらいあっち行って百姓やり実家へ行って百姓やりっちゅうような動き方して、二年よりちょっと早かったぐらいの時に正式に結婚が決まったね。学校卒業したら一生懸命働くつもりでおったけど、周りがあんまりわーわー言うもんだで結婚することになっちゃったね。今思うと早かったよね。だけどあの時分は私より早く、中学校行っとるうちにはい話が決まっとる人もおったからね。今の人からしたらへえーだら？

結婚式はね、自分のうちで支度をしていったよ。座敷で仲人さんとお酒を飲んで式をする。あとは宵宵なんて歌って、夜が明けるくらいまで皆飲んで飲んで。雨戸なんか閉めちゃって騒いだね。嫁ぎ先の村の人や親族、それから嫁子さんについてきたお客さんや親族とお座敷でお酒を飲んだりかやしたりしてね。お嫁さんは最初は裾模様の派手な着物で、頭は自分の髪の毛で結って角隠しを着けて途中でお色直しをしてね。指輪は無し、新婚旅行も行かんかった。

お嫁に行ってからも毎日毎日仕事だったよ。田んぼやったり畑行ったりご飯作ったりね。ご飯を作るからって私だけ一足先に帰れるっちゅうこともなくて、皆と一緒に帰って来ては、ご飯の支度をはよせよって言われてね。でもあの頃は今の料理と違ってばっかり食だったから助かったけどね。かぼちゃのとれる時はかぼちゃばっか食べとる。大根がとれる時はすったり煮たり揚げたり色んな事して食べる。そういうふうだったもんで今よりは楽だったかな。魚とか肉はあんまり食べれん

くて、たまにおじいさんが弘法さん行ったときにサンマかイワシでも担いでくるか、罠にかけた山兎でも食うとかほういうふうだったしね。

十九の時に一人目の子供を産んだね。うちの下にお世話人さんという人がおって、その人に来てもらって家で産んだんだよ。と言ってもお世話人さんも産婆さんじゃないで、うちで素人ばっかで産むようなもんだったかな。そのせいか一人目の子は小さくてお父さんの手に乗っちゃったもんね。一番下の子の時だけは貧血で倒れるようんなっちゃったもんで、輸血してしばらく入院しとったけど、あとは全部素人ばっかで出産したよ。今の人みたいに産休育休なんちゅうのもないもんでね、一カ月過ぎるとお宮さんを参ってそれが終わるとその日にはい仕事やったよ。一カ月だもんえらかったよ。でもあの時分は皆そうやって来たもんね。

妊娠中は仕事のあいさに産婆さんへ診てもらいに行くこともあったよ。産婆さんが国谷にあったからね。そこへ行って腹みたり心音を聞いたりってしてもらった。長男の時は三日間腹が痛くて、ほいでも産まれへんくてね。ちょうど近所に産婆さんがおいでたって聞いたもんで診てもらったら「このままほかっておいたら二人とも生きておれんかったよ」って言われた。位置がいざっておったのと、どすんと尻持ちをついたことがあって、その時にへその緒がからまっておったみたいだね。位置治いてくれたらいきみが来て、やれやれっちゅうかんじで産まれてきたよ。

仕事の間は赤ちゃんはほかりっぱなしでね。いい子で寝たでと思って寝かして出かけるでしょう。ほうすと帰ってきてもまたいい子でおるじゃん。ああ一日いい子でおっただなあと思うわけ。だけどそうじゃないだげな。目を覚まいてから泣いて泣いて泣いて、ほいで泣き疲れて寝とるだって。もうとにかく仕事仕事だったもんね。田んぼではおっぱいがちょぼんちょぼんと水の中へ落ちとってもお乳をあげに行けれえへん。朝出たら昼まで帰れんかった。だから守のある家の子はいいけど、無い子はかわいそうだったわね。ちいと大きなって、二カ月ぐらいんなると動き出すだら。そうすとね、足だけ蚊帳から出

ちゃっておったり、逆に頭が出ておったりして。ほいでもほかりっぱなし。でもどの子も死なんで育っただよ。泣いたり動いたりして強くなる。ただ小さい子供はしょっちゅう風邪ひいたり熱だいたりするでしょう。そういう時は林さんっちゅうとってもいい先生があったから、そこへ診てもらいに行ったね。でも家で休むっちゅうようなことはなくて、その子をなるべく暖かいようにくるんで、おんぶして畑仕事をやったけどね。よっぽどでなけにゃ子供について家におるっちゅうことはできんかった。多分他の人もそうだと思うよ。特に田植えの時と稲刈りの時は仕事が忙しかったからね。

炭焼き今昔

梶家は炭焼きを長いことやっておってね。私がお嫁に来た時にも、おじいさんはあっちの窯、誠さんはこっちの窯ちゅう感じで焼いておったね。焼けた炭は売っておったよ。まんだ一輪車が通れんような細い道をせだで背負って、田振の道まで運び出してね。このへんの事はお父さんのほうが詳しいだけど。

私が学校出て会社行っとる頃かな、『ガラ万』ちゅう年があったの。ガラっと回しゃあ万金が入るっちゅってね。自分で工場を作って綿を糸にすることが流行って、国閑でも何軒も開業した人がおって。そういうことと切り替えた時期だっただね。その頃は梶家もしばらく炭を焼くことをやめたみたい。だけど私がお嫁に来てからまた炭が恋しくなっちゃったみたいでね。炭の火は暖まりが違うの。家でも皆が来た時ね、あがってきんって言っても「まあ上がるとさいがこたつ出れんで帰るわ」って言って帰ってく人もおるぐらい。炭の火は暖かさが違う、体中暖まる。そういうわけでユンボでかいて大きな窯を作って炭焼きを再開したの。

今の時代はほうぼうに炭焼く人が無くなっちゃったじゃん。ちょっと前まではとんとんとあっただけどね。だから山に木がひとなり過ぎちゃって切るのが大変だよ。大きくなっちゃった木はね、芯が油の塊のようになってて炭にすると火は燃えてもがさがさのような炭になっちゃうの。だから炭焼きにとってはあまり良くない。それから桜の木も山ん中に増えてるね。

桜の木は炭にはしないんだけど炭焼きの時一番しまいにまるさらで入れて、閉めて火を付けるのに使っとっただよね。だけど炭を焼く人がいなくなったから桜が山に咲いとる。この頃うちの近所でも春になると山がすっごいきれいでもこもこしておってね。一昨年ぐらいになんでこんなきれいになったんだろうって思ってよう考えたら、そういう理由だった。

だけど近頃は変わってきた事もあってね。お父さんに窯を作ることを教えてくれって来た人がおって、完成した窯が三つ四つあるだよ。それから千年塾って言ってね、二～三十人の人がどこからともなくお父さんのとこへ集まってきて、自分で木を切ることを覚えたり木を入れることを覚えたり、ほういうこともやっとるよ。町の人が来て田舎の事や山の事を知りたがったりしてくれとる。千年塾には私もまたいっぺん行きたいと思っとるよ。

夫の誠さんのこと

女の人も含めて大勢が会社へ勤めに出た時期があっただよね。私が四十代の頃だけど。だからうちも夫婦で自動車の部品を作ってる工場へ行ってたよ。うちのこともやりながらね。朝会社へ行く前にあそこの田んぼとあそこの田んぼ行くぞちゅってね、肥をふったり、草取ったりしといて行ったこともある。会社へはマイクロで行ってね。

その頃に誠さんが手を怪我したことがあってね。当時私たちは一緒の会社に勤めておっただけど、その日は二～三時間夜勤をしていこうとなった日だった。別の場所で働いておったら工場長が来て「きみちゃん、まこちゃんが手を怪我したでちょっと一緒に病院行くか」って言ったの。だからほんな重い怪我だとも思わんで「ああいいよ」ちゅって行っただよね。そうして病院の戸を開けたら会社のお偉いさんが皆おらっせるじゃん。それで「きみちゃん来たかや」って言われるだけど、ズボンの裾がなんか震えとる。あ

夫の誠さんと

れ？って思ってね。それでしばらくして先生が来たもんで聞いたら「指四本がだめ。もしかすると親指もなくなっちゃうかもしれない」って。とっさに「先生どうか親指だけでも助けて」って泣きつくように言った覚えがあるよ。

それからまこちゃん二階におるで行くかって言われたから同僚何人かと行こうとしただけどね、私、階段が上がれんの。ふわふわしたようになってね。雲の上を歩くってこういうかんじかなって思ったよ。同僚二人に肩を抱えられてまるで私が怪我したみたいだよね。ほいで病室のドアを開けたらね、左手を包帯で縛って吊ってあげとる誠さんがいたの。それ見たらこらえとったのが溢れて泣けて来ちゃってね。だけどそれ見てお父さん何て言ったと思う？よう来たなんて言うどころじゃない「死ぬようなことはないで泣くな！」って言ったの。そんなこと言われたってね、はいなんていきなり治まらあへん。涙が出てしょうがないじゃんね。まあお父さんもまだ麻酔で痛みが来んようにはなっとったんだと思うよ。うち行って布団なんかいっぺん持ってくるわって言ったら、「えらいことやっちゃったなぁ」って二、三回言ったもんね。自分ではまっと心では思っとっただろうと思う。でもあんまり痛いっちゅうこと言わなかったね。

結局人差し指と中指が無くなってしまったんだけど、今は親指と小指側を使ってやれんことは何にもないよ。人以上にやらっせる。怪我がちいと良くなった頃から二種の自動車免許をとりに行ってね、日の出タクシーへ行ったり重機も運転したりするようになって。器用にやらっせるなって皆が言うよ。うちの炭焼き小屋には炭を焼くのが三つ、ピザを焼くのが一つほいからお風呂もあってトイレもあるんだけど、そこも全部作っちゃったもんね。私は釘一本手伝っとらんだよ。だけどちゃんとできとる。こないだも家へ来た人が「トイレも作ったの？何でもやる人ね。」って言うもんで「ほうだね。大工さんでもないし、左官屋さんでもないけど何でもやるねえ」ちゅって言ったとこ。私が糸を針に通せんっちゅってやーっとおると「何をいつまでもやっとるだ」って言ってやってくれるしね。どうかするとさいがここのボタンが一個取れたとか帽子がゆるいだとか言うのを自分で直しちゃったりね。山の木を切って色んな事するでも、自分が木を寝かさあと思う方向に器用に転ばせたりできるもんね。

怪我してすぐはおばあさんが「まともに産んでやったになぁ」って言ったこともあったよ。でもそんな時は「おばあさん頼むに、本人は皆がおる時に口には出さんけども、自分一人でおる時には大変なことやっちゃったなあとすごい気にしとるでね。まあ言わんどいてね」ちゅって。ほうしたら「ああそうだなあ」って言ってくれたけどね。そうは言っても、私も手袋の指のとこを切って落とす時になると今でも心が痛むよ。

お父さんは今は炭焼きと、足助へ永住する人を迎えるっちゅうことも積極的にやっておるよ。高嶺下（こうろげ）という場所には六軒うちができたり、町営住宅もあって明るさがあるよ。周りの人は「誠さんのおかげで良かったねえ。」ちゅって言わっせるけど、「お父さん一人でできたじゃないだよ、皆のお陰でできただよ」って私は言うだけどね。まあでもがんばらしたね。息子がネコを拾ってきたことがあってね。それに付けた名前が、ちくわ。初めはちくわ?.?.まっとかわいい名前付けたりゃよかったのにって思っただよ。そうしたらね、地区が皆仲良く暮らすようにってちくわって付けたらしいの。

お父さんはね、家ではなかなか小うるさい。今朝もね、白いご飯だいたら「何にもかけてないのにこんなん食えん！」って言うしさあ（笑）ごはん一人だけ先に食べて、私が食べておる頃にはもうはいおらへんで、山やらあちこちへ飛んでっちゃうのもいつものことだしね。でも元気で好きな事やっとるだでいいわーとか思いながらね。私も縁あってここで暮らいちゃったなと思ってるよ。

家族に囲まれて

私が三人の子供を生んで、その三人の子供が三人ずつ生んだから孫が九人。孫のうち結婚したのが三人。それでひこが七人おるだよ。まだ孫がえらいことあるけど、全部の孫がひこを生むのはとてもじゃないけどお目にかかれんなあって笑ったけどね。でもひこが七人だよって言うと「いいねえ」ってけなるがる人がある。お父さんも八十になるし私でも数えでいけば七十七になるし、世代も変わってきてね。息子が俺がやるでって言ってくれることが多いよ。その代わり手え出さんでも

いいよって言われて。誠さんはそれ見とって「あんなことやっとちゃ、こんなことやっとっちゃ」って言うけど、いっぺんやってみりゃ分かるわ、機械で刈ってくでもどうやったら上手に刈れるか。そうするとさいが次に植える時にあれじゃまずかったで今度はこっちへこういうふうに植えるっちゅうことが分かってくるで。まあ息子もいい歳だで自分でかんこうするで黙っとりんやって言ってね。

お父さんはそれこそ自分でやりたい時に山へ行って木を切って炭焼き塾をやったり、上の山で間伐をみんなにやってもらったり好きなことをやって生活しておるね。私はその手伝いや家事を少ししてるよ。お母さん（お嫁さん）も働いとって疲れて帰ってくるで、かぼちゃを煮とくとかそうめんをうでとくとかできる事はやっといて。あとは肉料理とか横文字で書いたるような難しい袋は何をどうしていいか分からんでお母さんに任せてね。そんなふうにして過ごしとる。

今私が常日頃思っとることはね、すべてのことを大事に想うっちゅうこと。大事にするんじゃなくって「大事に想っとる」ってこと。それと「感謝」ね。その二つは離いちゃいかんなって思ってるよ。うちには家神さんって言う家を守ってくれとる神さんがおってね、亡くなった人が私らを助けて守っておってくれるんだって。人間は病みもするし色々大変なこともある。でも「すべてのことを大事に想う」ってことと感謝の気持ちを離さないでいたい。ほかっちゃうようなものでも何かの足しにしようって気持ちを持っていきたいね。

孫たちと

【聞き手・加藤　彩（近岡町）】

あとがき

『足助の聞き書き』第三集が無事完成しました。

この第三集は、平成二十四年度足助地区わくわく事業の補助をうけて発行しています。足助地域会議の提言事業として、平成十九年度には椿立自治区が『椿立家族ものがたり』を、二十年度には久木自治会が『原田一族とその子孫』を作成。そして、平成二十二年度・二十三年度は地域予算提案事業「歴史伝統文化保存事業」として『足助の聞き書き第一集・第二集』を発行しました。

しかし、平成二十四年度から歴史伝統文化保存事業は廃止。『足助の聞き書き』の製作に関わったメンバーのほとんどが、「足助での聞き書きをこれからも続けていきたい」という思いを持っていました。そこで、平成二十四年三月に有志が事務局となり、「あすけ聞き書き隊」を結成し、新たな聞き書きメンバーを加え、わくわく事業の補助を受けて事業を継続しました。

私たちが、今、この活動をとぎれることなく続けていかなければ、と考えた理由はいくつかあります。戦前戦後で暮らしがガラリと変わる前の生活を実際に過ごされた方々の話は、今しか聞けないことです。今聞いておかないと、十年二十年後にはその機会がなくなっていってしまう。そして、自分が生まれ育った土地のことを文字で残す必要がある。多くの人の「聞き書き」を残していくことは、足助の財産になるものだと思います。

足助にはたくさんのお年寄りがおられて、お一人お一人に他の誰も経験していないヒストリーがあります。今は話す機会がないまま記憶の底に沈んでいるかもしれませんが、どんどん引っ張り出してきてお話していただきたいと思っています。

また、聞き書きでできた作品が地域の資料として残る価値と同じくらいに、活動に実際に関わることで、聞き手が普段は話をすることのない世代の方と真剣に向き合って多くのことを学ぶことの意義はとても大きいと思います。

そして、聞き書きをしていると、人と時間を共有する事の大切さ、言葉の面白さ、知らなかったことを知ることの楽しさを感じます。話し手の方も、話すことで張り合いを感じていただけている気がしました。普段は忘れていたことでも、話し始めるといろいろなことを思い出されるようで、何十年前も前の出来事に関してもその記憶の正確さに驚かされます。小さな範囲ではありますが、人と人との関係を活性化し、歴史を紡ぐ役割を果たしているように感じます。「生」の声をまとめることで、足助で生きる「心」を記録し、継承できるものだと考えます。読まれた方との認識が異なるかもしれません。それぞれの方の記憶に基づいたお話です。どうぞご理解ください。

最後に、ご自分の話を一生懸命に話してくださった十四名の話し手のみなさまに感謝いたします。みなさまが話してくださらなければ、聞き書きは完成できませんでした。そして、聞き手の十四名のみなさん、初めてで不安だった人、作業が思うようにはかどらなくて困った人、お疲れさまでした。そして、この事業を評価し応援していただいた足助地域会議委員の方々、及び事務局の足助支所地域振興担当の職員のみなさま。聞き書き講座の講師を務めていただいたＮＰＯ法人共存の森ネットワークの皆様、本当にありがとうございました。

この本を多くの方々に手にしていただきたい。ぜひ、人と人のつながりが紡ぎだす足助の暮らしの息づかいを感じていただき、先人から受け継がれ、守られてきた地域の伝統や文化が次の世代へと受け継がれていくことを願います。

あすけ聞き書き隊

講師の吉野さんと聞き書きメンバー

足助の聞き書き　第三集
（話し手への取材期間　平成二十四年七月～平成二十五年一月）

発　行　日　　平成二十五年三月
発　　行　　あすけ聞き書き隊
印刷・製本　　三河印刷株式会社

＊この本は、平成二十四年度足助地区わくわく事業補助金を活用して製作したものです。